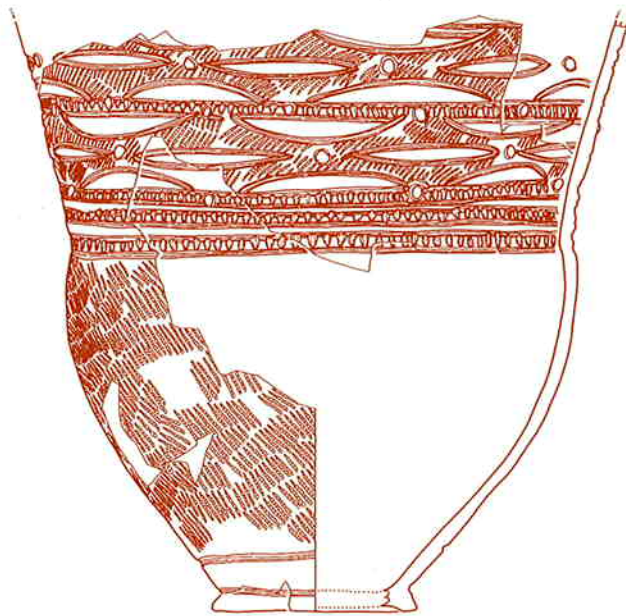


盛岡遺跡群

平成10年度発掘調査概報

林崎遺跡	第22次調査
砂溜遺跡	第23・24次調査
百目木遺跡	第12次調査
見前館遺跡	第1次調査
町田遺跡	第9次調査



1999. 3

盛岡市教育委員会

盛岡遺跡群

平成10年度発掘調査概報

林崎遺跡	第22次調査
砂溜遺跡	第23・24次調査
百目木遺跡	第12次調査
見前館遺跡	第1次調査
町田遺跡	第9次調査

1999. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市内には、古くは1万年以上前の縄文時代草創期の遺跡から、岩手公園として市民に親しまれている国指定史跡盛岡城跡に代表される江戸時代の遺跡まで約500箇所以上の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

当市では、近年民間開発や個人住宅の建築等に対応する調査の他に、区画整理事業をはじめとする公共事業に対応するための発掘調査件数や調査面積が増加しており、事業の促進と埋蔵文化財の保護の面で新たな課題をかかえております。このような状況ではありますが、当市教育委員会では盛岡の歴史と文化遺産が新たな街づくりの中に活かされ、多くの市民に広く親しまれるよう願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施と本書の作成にあたり御指導いただきました関係諸機関、並びに諸氏に対し深く感謝を申し述べるとともに、御理解、御協力をいただきました地権者各位並びに地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

盛岡市教育委員会教育長 佐々木初朗

例 言

1. 本書は、平成10年度国庫補助事業である盛岡遺跡群発掘調査事業に伴う「盛岡遺跡群発掘調査概報」である。

2. 本書では、林崎遺跡第22次調査、砂溜遺跡第23・24次調査、百目木遺跡第12次調査、見前館遺跡第1次調査、町田遺跡第9次調査について掲載した。

3. 遺構の平面位置は、平面直角座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。

林崎遺跡	・調査座標原点	X - 35,000.000	Y + 23,700.000
砂溜遺跡	・調査座標原点	X - 34,500.000	Y + 29,500.000
百目木遺跡	・調査座標原点	X - 38,000.000	Y + 27,500.000
見前館遺跡	・調査座標原点	X - 40,000.000	Y + 28,000.000
町田遺跡	・調査座標原点	X - 44,000.000	Y + 31,500.000

4. 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さによって堆積の違いをあらわした。土層注記は層理ごとに本文に記載し、個々の層位については割愛した。

なお層相の観察にあたっては『新版土色帳』（1967 小山正忠・竹原秀雄 編著 日本色研事業（株）発行）を参考にした。

5. 遺跡全体図は、以前の調査との関係をわかりやすくした。

6. 遺構記号は以下のとおりである。

※集落遺跡の場合（林崎・砂溜・百目木・町田遺跡）

※城柵・城館遺跡の場合（見前館遺跡）

遺 構	記号	遺 構	記号
竪穴住居跡	RA	炉 跡	RF
建 物 跡	RB	溝 跡	RG
柱 列 跡	RC	集石・配石	RH
土 坑	RD	井 戸 跡	RI
竪 穴	RE	そ の 他	RZ

遺 構	記号	遺 構	記号
塀・柱列跡	SA	竪穴住居跡	SI
建 物 跡	SB	土 坑	SK
堀・溝 跡	SD	そ の 他	SX
井 戸 跡	SE	※縄文時代～古代の遺構は集落遺跡に準ずる	
土塁・築地	SF		

7. 時期ごとの遺構番号は次のとおりとした。

	林崎遺跡	砂溜遺跡	百目木遺跡	見前館遺跡	町田遺跡
縄文期遺構	501～799	501～699	001～099	001～099	501～799
古代（奈良・平安）	001～499	701～799	101～799	101～499	001～499
中・近世期	801～899	801～999	801～899	501～999	801～899

6. 本書の編集執筆には、盛岡市教育委員会文化課 三浦陽一、八木光則、似内啓邦、室野秀文、菊池与志和、藤岡光男、津嶋知弘、神原雄一郎、黒須靖之、藤村茂克、平沢祐子、太田代由美子があつた。

目 次

序言

例言

目次

I. 平成10年度事業の概要

1. 市内遺跡群発掘調査事業…………… 1
2. 平成10年度の調査体制…………… 4

II. 調査内容

1. 林崎遺跡…………… 5
2. 砂溜遺跡……………22
3. 百目木遺跡……………34
4. 見前古館遺跡……………59
5. 町田遺跡……………74

図 版 目 次

- 第1図 調査遺跡の位置…………… 2・3
- 第2図 地形分類と遺跡分布…………… 7
- 第3図 林崎遺跡全体図…………… 8・9
- 第4図 第22次調査区全体図……………12
- 第5図 RA027竪穴住居跡 ……14
- 第6図 RA027竪穴住居跡出土遺物（1）……………15
- 第7図 RA027竪穴住居跡出土遺物（2）……………16
- 第8図 RA028竪穴住居跡 ……17
- 第9図 RA028竪穴住居跡出土遺物 ……18
- 第10図 RB05掘立柱建物跡・RD050、051土坑・ピット群 ……19
- 第11図 地形分類と遺跡分布……………23
- 第12図 砂溜遺跡全体図……………24・25
- 第13図 第23次調査全体図……………28
- 第14図 RE801竪穴……………29
- 第15図 第24次調査全体図……………30
- 第16図 RA510竪穴住居跡、RB501掘立柱建物跡 ……32
- 第17図 RA510竪穴住居跡出土遺物 ……33

第18図	地形分類と遺跡分布	35
第19図	百目木遺跡	36・37
第20図	第12次調査区全体図	40
第21図	RA107竪穴住居跡	41
第22図	RA107竪穴住居跡出土遺物	41
第23図	RA108竪穴住居跡	42
第24図	RA108竪穴住居跡出土遺物	42
第25図	RA109竪穴住居跡	42
第26図	RA109竪穴住居跡出土遺物	44
第27図	RA110竪穴住居跡	45
第28図	RA110竪穴住居跡出土遺物	46
第29図	RA111竪穴住居跡	47
第30図	RA112竪穴住居跡、RD801・804・805土坑	48
第31図	RA113竪穴住居跡	49
第32図	RA113竪穴住居跡出土遺物	50
第33図	RA114竪穴住居跡	51
第34図	RA114竪穴住居跡出土遺物	52
第35図	RB802・803掘立柱建物跡、RC801柱列跡、ピット群	54
第36図	RC804掘立柱建物跡、RC805柱列跡、ピット群	55
第37図	RD802・803土坑	56
第38図	岩手・志和郡の城館分布図	62・63
第39図	岩手縣陸中国紫波郡西見前村絵図	67
第40図	見前館遺跡全体図	68・69
第41図	第1次調査区全体図	71
第42図	第1次調査出土遺物	72
第43図	地形分類と遺跡分布	75
第44図	町田遺跡	76・77
第45図	第9次調査全体図	80
第46図	RA115竪穴住居跡出土遺物	81
第47図	遺物包含層出土遺物	81

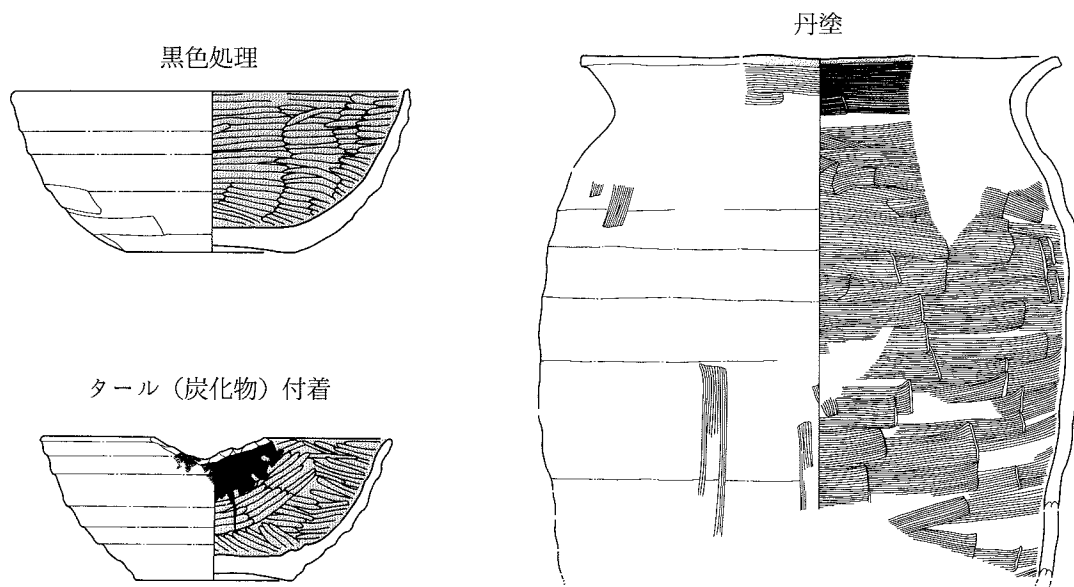
写真図版目次

- 第1図版 林崎遺跡全景、第22次調査区全景、RA027竪穴住居跡
- 第2図版 砂溜遺跡第23次調査全景、RE801竪穴、砂溜遺跡第24次調査RA505竪穴住居跡
- 第3図版 RA505竪穴住居跡、RB501掘立柱建物跡、RD049土坑
- 第4図版 百目木遺跡遠景、百目木遺跡第12次調査全景、RA108竪穴住居跡
- 第5図版 RA109竪穴住居跡、RA110竪穴住居跡、RA111竪穴住居跡
- 第6図版 RA113竪穴住居跡、A113竪穴住居跡遺物出土状況、RA114竪穴住居跡
- 第7図版 元治元年作図紫波郡西・東見前村絵図（部分）、見前館遺跡第1次調査
- 第8図版 町田遺跡全景、RA115竪穴住居跡、遺物包含層遺物出土状況

〈遺物の表現について〉

1. 土器

- a. 縄文時代早期～前期初頭に属する土器の実測図・拓本は1/2スケールとし、その他の土器は1/3スケールとした。
- b. 挿図の土器配列については、層位毎に器種・器形毎にまとめ型式分類はひかえた。
- c. 縄文時代の土器で隆線や沈線の表現は上端・下端を実線や破線で表現し、陰影は表現していない。
- d. 土師器の黒色処理されたもの、タール（炭化物）の付着したもの、丹塗を施したものは下記のとおりスクリーントーンで表現した。



I 平成10年度事業の概要

1 盛岡遺跡群発掘調査事業

埋蔵文化財発掘調査件数は、全国的に最近は減少傾向にある。しかし、当市においては調査件数は増加しており、平成10年度の発掘調査件数は93件をかぞえ、発掘調査面積は 54,311㎡である。近年の傾向としては、大規模な公共事業に対応する調査面積の増加である。その結果、各種民間開発、個人住宅建築への対応が困難な状態になっているという問題点を抱えている。

当市では、遺構密度の高い遺跡内の発掘調査（個人住宅建築対応）を盛岡遺跡群発掘調査事業（国庫補助事業）とし、平成10年度においては6件について対応している。調査総面積は740.3㎡、国庫補助対象分の調査直接経費は2,000万円である。当事業における本年度調査の成果では、各遺跡を理解していく上で重要なものが数多く含まれている。

縄文時代の遺跡では、砂溜遺跡で縄文時代後期の竪穴住居跡、縄文時代中期の掘立柱建物跡が検出されている。中でも竪穴住居跡からは縄文時代後期の瘤付土器が出土しており、市内では数少ない検出例となっている。町田遺跡ではこれまで平安時代の集落が確認されていたが、このほかにも縄文時代後期末葉の瘤付土器が遺物包含層から出土していることから、この時代の遺構が存在する可能性を示唆している。

奈良・平安時代の遺跡では、林崎遺跡、百目木遺跡、町田遺跡の調査を実施した。林崎遺跡は志波城跡に隣接する遺跡で、これまでも平安時代の遺構・遺物を検出している。今次調査では遺跡の北東縁辺部を調査し、竪穴住居跡から多量の土師器等が出土している。百目木遺跡の調査では、奈良時代と平安時代の竪穴住居跡を8棟検出した。今次調査により、遺跡東側で遺構密度が高いことが確認された。町田遺跡では、縄文時代後期の包含層を掘り込む平安時代の竪穴住居跡1棟を検出している。

中世以降の遺構としては、掘立柱建物跡を中心に資料の増加がみられた。見前館遺跡では、はじめての調査で確認された掘立柱建物跡や柱穴群は、中世城館のものである。

百目木遺跡第9次調査では、古代の遺構の他に近世の掘立柱建物跡の一部が確認されている。これまで市内では、稻荷町遺跡、大塚遺跡などで近世の掘立柱建物跡が検出されており、今回の調査事例とあわせ近世民家の構造等について資料の比較をおこなってきたい。

砂溜遺跡第22次調査では、近世以降の性格不明の竪穴が検出されている。隣接する第15次調査区では近世の礎石建物跡、土坑などが検出されているが、これよりも新しい時期のものとしてとらえている。

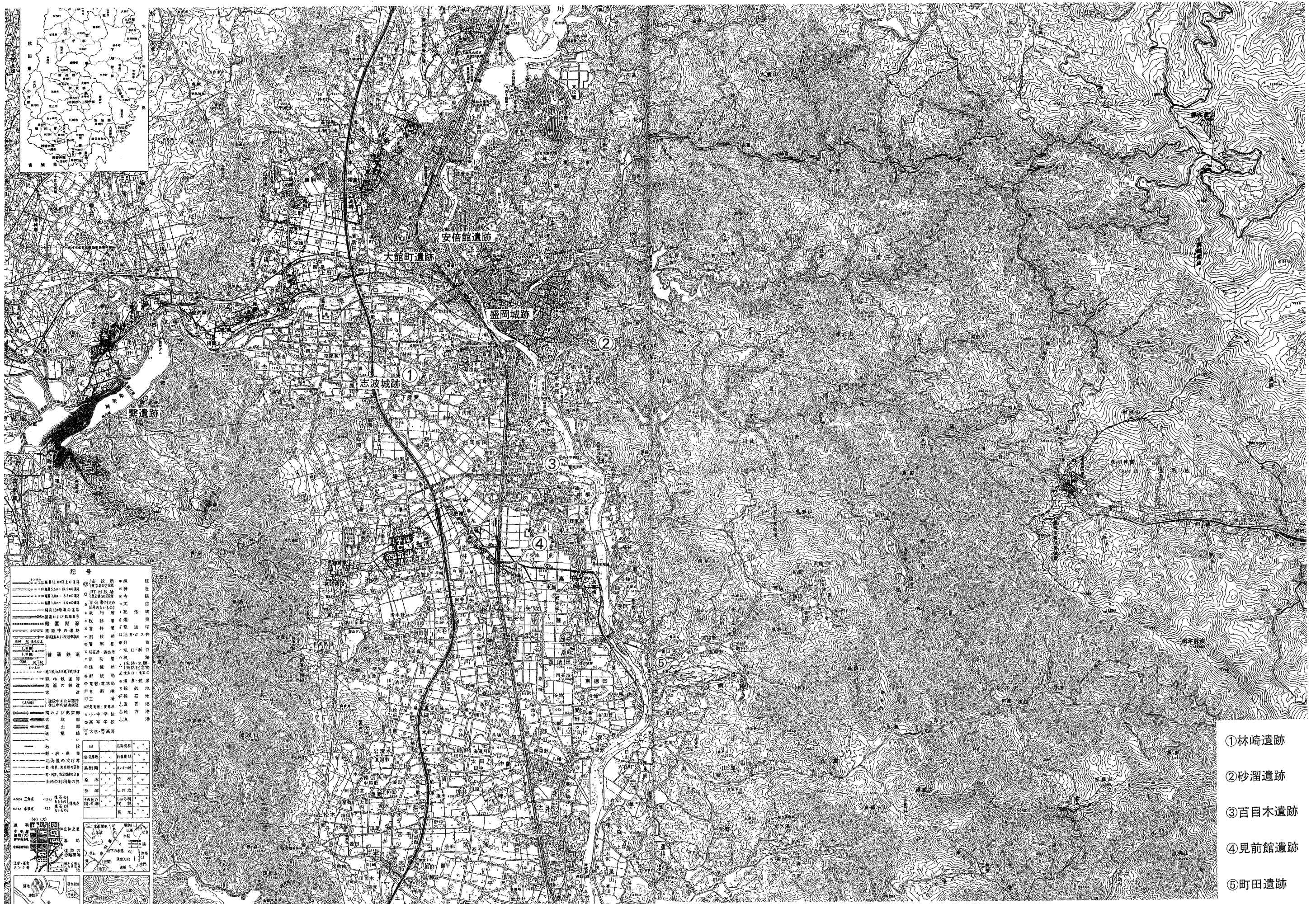
以上のように、本年度の発掘調査においても資料の蓄積が確実になされており、他の公共事業関連の調査成果と併せて、さらに多くの資料が蓄積されたこととなる。今後はさらに出土資料の普及・活用を図っていくことも必要とされる。

発掘調査

縄文時代の遺跡

古代の遺跡

中世以降の遺跡



- ① 林崎遺跡
- ② 砂溜遺跡
- ③ 百目木遺跡
- ④ 見前館遺跡
- ⑤ 町田遺跡

第1図 調査遺跡の位置 (1:100,000)

2 平成10年度の調査体制

総括	照井 紀典	盛岡市教育委員会	文化課長
	菊地 誠	〃	課長補佐
	亀山 助正	〃	文化財係長
事務	阿部 徳乃	〃	事務嘱託
事務・調査	八木 光則	〃	文化財主査
	似内 啓邦	〃	文化財主任
	室野 秀文	〃	文化財主任
	藤岡 光男	〃	文化財主事
	菊池 与志和	〃	文化財主事
	津嶋 知弘	〃	文化財主事
	三浦 陽一	〃	文化財主事
	神原 雄一郎	〃	文化財主事
	黒須 靖之	〃	文化財主事
	藤村 茂克	〃	文化財主事
	平澤 祐子	〃	文化財調査員
	太田代由美子	〃	文化財調査員

また、調査の実施および整理にあたり、下記の方々から多大なご援助とご協力をいただきました。御芳名を記して、深く謝意を表します（敬称略）。

〈地権者〉小岩学 福土長英 藤田文夫 藤原実 吉田和彦 吉田正志

〈発掘調査〉浅沼はた 芦垣直樹 天沼芳子 井上勝子 五十嵐大輔 岩泉喜六 逢坂洋介

川村昭三 菊池武 久慈聡 工藤エキ 斉藤三郎 斉藤登 佐々木幸子 澤口君子

四戸孝丸 田貝恵子 武田とし子 玉井真由美 千葉ふさ子 中村淳子 日野杉節子

平賀眞利子 平野淑子 藤原広知 藤原亮子 細田幸美 松田昭夫 南幅征子

南幅千代 南幅洋子 武蔵照子 山下摩由美 山本伸治 吉田喜美 吉田健次郎

吉田誠 米山徹

〈整理作業〉天沼芳子 安藤稀環子 泉山紀代子 北口智里 佐々木泰子 白澤和子 鈴木賢治

高橋ツヤ 竹花栄子 藤田ひろみ 藤原美知子 平野淑子 百岡峰子 山下摩由美

米山徹

Ⅱ 調査内容

1. ^{はやしざき}林崎遺跡（第22次調査）

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の位置と地形

林崎遺跡は盛岡市の中心から約4kmほど西側の下太田字林崎・本宮字大宮地内に位置し、史跡志波城跡の東側に隣接している。遺跡範囲は地形などから東西200m、南北140mほどと想定している。

本遺跡は雫石川の旧河道が認められる低位沖積段丘上に立地し、北側は比高差約1mをもって旧河道により画されている。この低位沖積面は雫石川が鳥泊山と箱ヶ森にはさまれた北の浦付近で流路がせばまり、北上川と合流するまでの間の南岸に形成されているも、この沖積段丘は盛岡市猪去地区の山麓から、矢巾町の史跡徳丹城跡付近まで形成されており、古墳時代から平安時代にかけての遺跡が多く分布している。一方、雫石川北岸は岩手山からの火砕流堆積物や火山灰層で形成されている段丘が発達している。

雫石川南岸に形成される低位沖積段丘面では、東や南東に走る大きな旧河道が4本確認されており、両岸には微高地や自然堤防が形成されている。これらの連なりは大きく5面あり、当遺跡の立地するのは北から3面目である。地質は水成砂礫層を基底としており、この層上にシルト層、さらに黒色土および表土（耕作土）が覆っている。これは、雫石川によって堆積する砂礫層・シルト層が河道の定まらない河川の流路によって形成されたもので、それぞれの層厚も一定ではない。また、旧河道は流路の転換が著しく網目状に確認されている。現況では圃場整備などにより旧地形の細部を復元できないため規模は不明瞭であるが、砂利採取に伴う確認調査などで遺構の検出例が増えており、旧地形が確認できる場合もある。

遺構の埋土は、志波城跡やこの周辺の遺跡から検出される遺構と同様の黒色火山灰土を主体としている。林崎遺跡では大半が耕作等によって削平を受けており、耕作土直下で遺構の検出が可能である。なお、遺構検出面は褐色シルト層である。

(2) 周辺の遺跡

林崎遺跡の立地する沖積段丘上には、奈良時代～中世にかけての遺跡が多く分布しているが、その多くは、上太田に所在する太田蝦夷森古墳群の立地する地域から細かい旧河道をはさんで東側に分布している。

林崎遺跡の西側には史跡志波城跡が位置しているが、遺跡を画する明瞭な地形の差異は観察できない。志波城跡に接する遺跡は、北西側に小沼遺跡が位置するほか、南側には竹花前・田貝・新堰端遺跡が位置している。周辺におけるこれまでの調査では、小沼遺跡で近世の礎石建物跡が確認されているほか、9世紀後半に比定される緑釉陶器が竪穴住居跡から出土しており、志波城廃絶後の集落である。さらに、竹花前遺跡では東北縦貫道建設に伴う発掘調査において、平安時代の竪穴住居跡6棟を検出しており、うち1棟からやはり9世紀後半に比定される緑釉陶器が出土しており、小沼遺跡と同時期の集落遺跡と考えている。

田貝遺跡では志波城外郭線から平安時代の竪穴住居跡のほか大溝が検出されている。この大溝は志波城外郭南辺と平行し、築地線から約1町(約108m)ほど南に位置しているものである。この溝跡は志波城外郭外大溝と埋土が共通していることなどから志波城関連の区画施設の可能性がある。また、平安時代の竪穴住居跡では埋土に粉状パミス(火山灰)が入っていることから、10世紀初頭のものにとらえている。新堰端遺跡では縄文時代後期の土坑群のほか、平安時代の竪穴住居跡住居跡のほか田貝遺跡でも確認された大溝が検出されている。

遺跡の東側に分布する遺跡群では、近年大規模区画整理事業による発掘調査が実施されている。林崎遺跡の東側約300mほどの地点に位置する小幡・宮沢遺跡の調査では、平成5年度から市教育委員会による試掘調査の後、平成6年度から岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに本調査を委託。大規模な発掘調査が継続実施されており、遺跡の内容や性格が判りつつある。

宮沢遺跡では溝跡を主体としており、小幡遺跡では縄文時代の陥穴状土坑のほか、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡などが確認されたほか、近世の掘立柱建物跡や溝跡も検出されている。

小幡遺跡と林崎遺跡の間には大宮北遺跡が位置している。ここでは小規模な個人住宅に対応する調査のほか、上水道布設に伴う発掘調査が実施されている。これまで、古代の土坑や溝跡、柱穴を検出しているものの、今のところ集落遺跡の様相は呈していない。

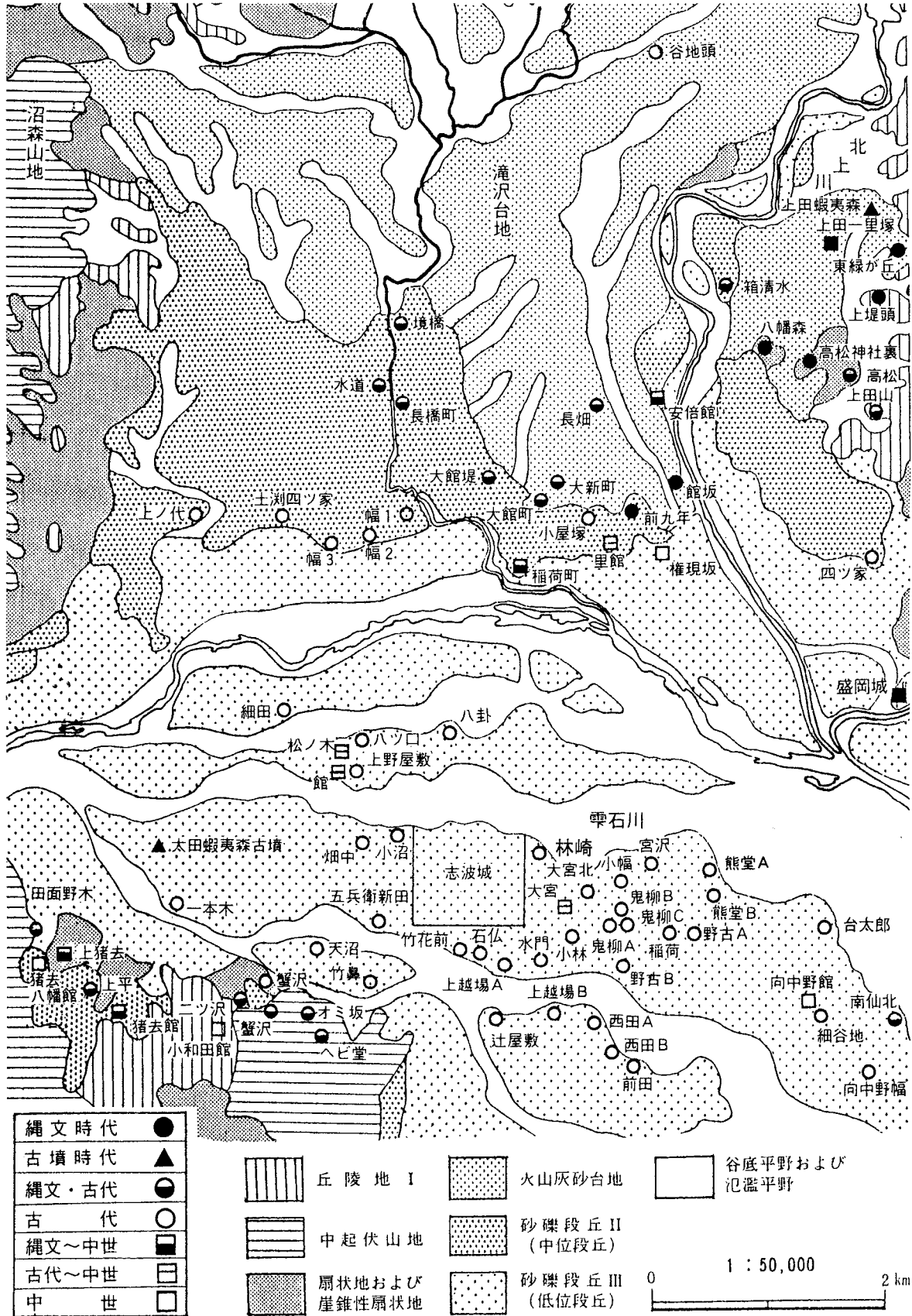
大宮北遺跡の南側には大宮遺跡が位置している。ここでも、個人住宅建築に伴う発掘調査のほか、上水道管敷設に伴う調査が行われている。大宮遺跡では中世の竪穴、土坑、柱穴等を検出している。明確な時期は不明であるが、中世の村落遺跡の可能性もあり、今後の調査成果の蓄積と分析を待ちたい。

2 調査経過

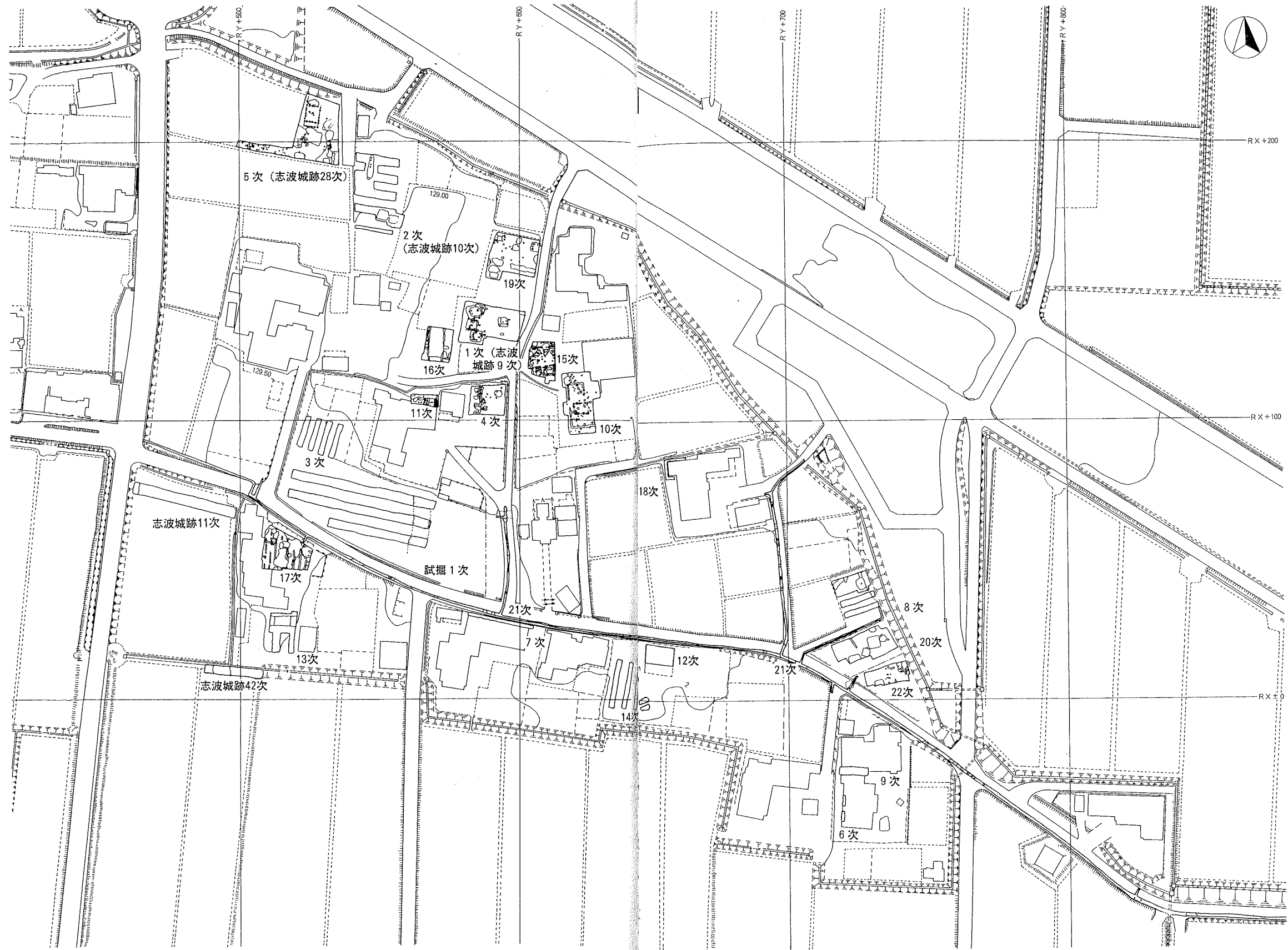
(1) これまでの調査

林崎遺跡は昭和53年度の第1次調査(志波城跡第9次調査)より25地点で発掘調査(本調査試掘調査)を実施している。

史跡志波城跡と接している遺跡北西部縁辺では、第2、5次調査を実施しており、平安時代の竪穴住居跡および近世の掘立柱建物跡を検出している。同様に志波城跡に接する遺跡南西部では、第13、17次調査を実施している。この付近では竪穴住居の密度が低く、幅3mの東西方向に走る溝跡や、畑の畝跡と考えられる溝跡が確認されている。



第2図 地形分類と遺跡分布



第3図 林崎遺跡 (1:1,500)

遺跡中央部は、当遺跡内で最も高密度で遺構が確認されている区域である。この付近では平安時代の竪穴住居跡や土坑から出土した土師器坏に「寺」・「大」・「大上」と判読できる墨書土器が出土しており、大形の掘立柱建物跡とあわせ、他の集落遺跡とは様相を異にする性格がみられ注目された。遺跡中央部ではその他に、遺跡を南北に走る大溝1条が検出されている。

この大溝は田貝遺跡や新堰端遺跡で検出されている東西方向の溝跡と同様の規模をもち、埋土の状況も類似している。大溝跡は、志波城外郭築地線から約1町（約108m）の東側にあり、埋土の状況が外郭外大溝と類似していることなどから志波城の区画施設の一つと想定されている遺構である。

林崎遺跡内で検出されている溝跡の規模は幅5.0～6.0m深さ1.0～1.2mをはかり、埋土には灰白色火山灰が堆積する特徴をもつ。第4次調査区では桁行4間以上、梁間2間で柱間寸法約3m、堀方一辺1.2m、検出面からの柱穴の深さが約1.2mをはかる南北棟の建物跡が検出された。なお、近接する第15次調査区でも同様の規模をもつ掘立柱建物跡が検出されている。

建物跡は桁行4間以上、梁間2間で、柱間寸法約3mをはかる東西棟の建物である。掘方は一辺が1.2～1.7m、深さ0.9～1.2mをはかり、3期にわたる掘方の変遷を確認している。

さらに、上水道管敷設にともなう第21次調査においても大形の掘立柱建物跡が確認されており、志波城廃絶後に官衙的な施設が当遺跡地内に存在したことが窺える。なお、遺跡の東側は、高密度ではないが竪穴住居跡が主体となっている。

林崎遺跡の調査成果

次数	所在地	調査原因	面積(㎡)	期間	検出遺構・遺物
1	下太田林崎42-2	住宅建築	270	78. 8. 29 78. 10. 3	平安時代の竪穴住居跡9棟、土坑2基
試掘 1次	下太田林崎25-1	幼稚園新築	420	78. 8. 26 78. 8. 27	溝跡1条
2	下太田林崎20-2	住宅建築	268	79. 4. 9 79. 5. 12	竪穴住居跡2棟、土坑2基
3	下太田林崎25-1	幼稚園増築	97	82. 4. 6 82. 4. 8	遺物僅少
4	下太田林崎25-1 ほか	幼稚園増築	166	82. 4. 17 82. 5. 18	掘立柱建物跡1棟、土坑1基、
5	下太田林崎20-3	住宅新築	490	83. 4. 11 83. 5. 4	平安時代の竪穴住居跡4棟、土坑2基、 中世以降の掘立柱建物跡2棟、土坑12基
6	本宮字大宮119-2	住宅増築	5	87. 4. 22 87. 4. 25	平安時代の土器散布
7	本宮字大宮117-2	住宅増築	9	87. 5. 25	遺構・遺物なし

8	下太田林崎34-6	住宅新築	133	88. 5. 13 88. 5. 21	平安時代竪穴住居跡1棟、土坑1基、溝跡1条
9	本宮字大宮119-2	住宅増築	10	88. 5. 16	遺構・遺物なし
10	下太田林崎39-1	住宅改築	290	89. 4. 24 89. 5. 19	中世以降の掘立柱建物跡1棟、溝跡2条 土坑1基
11	下太田林崎25-1	住宅改築		89. 6. 19 89. 6. 22	溝跡1条、土坑2基
12	本宮字大宮118-3	物置改築	64	90. 5. 25 90. 5. 28	遺構・遺物なし
試掘 2次	下太田林崎地内	区画整理	8,700	91. 8. 5 91. 8. 9	遺構・遺物なし
試掘 3次	下太田久保筋・ 林崎地内	区画整理	420	91. 8. 5 91. 8. 9	遺構・遺物なし
13	本宮字大宮116-5	農作業小屋 新築	100	92. 7. 6 92. 7. 13	平安時代の溝跡1条
14	本宮字大宮118-3	住宅新築	165	93. 4. 20 93. 4. 21	遺構・遺物なし
15	下太田林崎39-5	住宅改築	110	93. 8. 30 93. 9. 24	平安時代の掘立柱建物跡2棟、土坑3基 溝跡3条
16	下太田林崎42-2	農作業小屋 新築	118	93. 9. 1 93. 10. 4	平安時代の土坑8基、溝跡2条
17	本宮字大宮116-2	住宅改築	203	94. 6. 20 94. 7. 2	平安時代の竪穴住居跡1棟、土坑8基 溝跡16条
18	下太田林崎37	住宅新築	10	95. 10. 3 95. 10. 3	遺物僅少
19	下太田林崎42-1	住宅新築	330	95. 10. 27 95. 11. 21	平安時代の竪穴住居跡1棟、土坑1基 竪穴2棟、溝跡1条
20	下太田林崎34-4	住宅新築	250	96. 6. 27 96. 7. 3	平安時代の竪穴住居跡3棟
21	下太田林崎地内	上水道管 敷設	634	98. 8. 5 98. 11. 10	古墳時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の 竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土 坑3基、溝跡13条
22	下太田林崎34-3	住宅新築	104	98. 9. 28 98. 10. 16	平安時代の竪穴住居跡2棟、土坑2基 掘立柱建物跡1棟

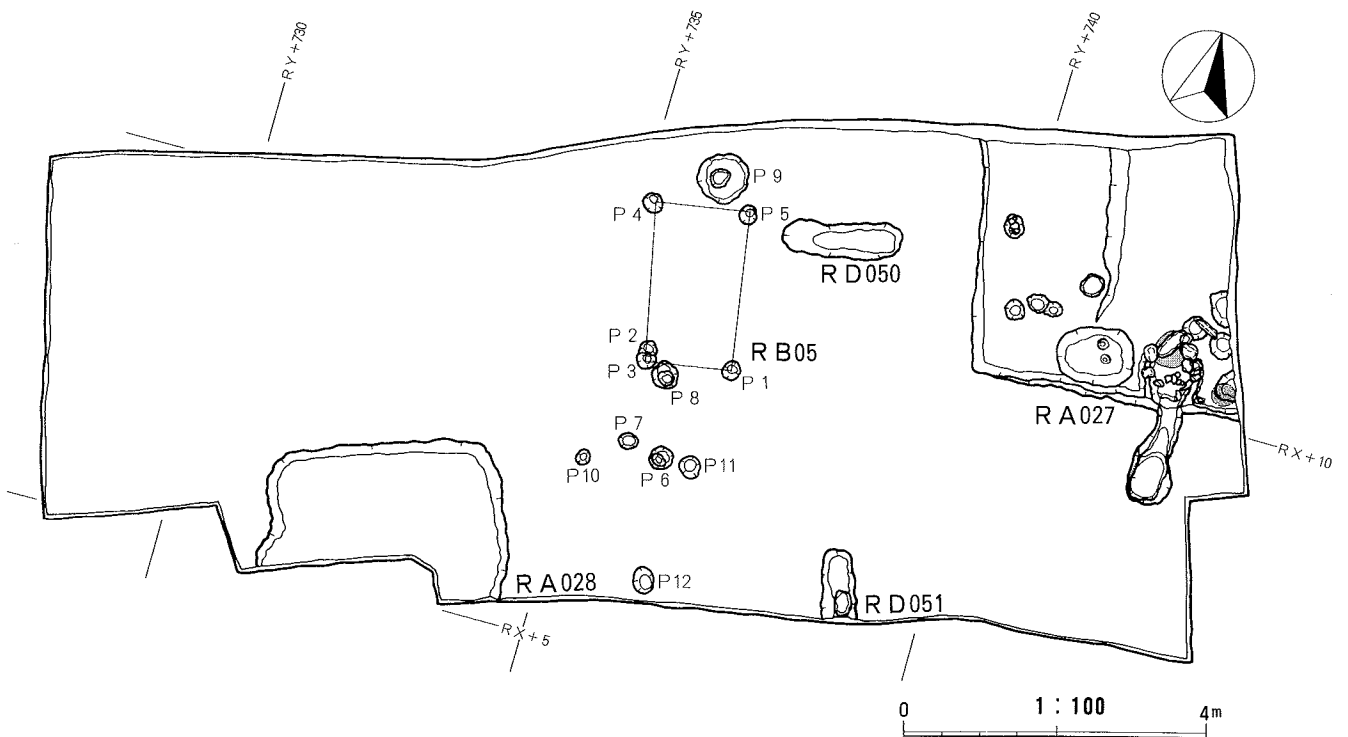
(2) 平成10年度の調査

平成10年度は、第21次調査として上水道管敷設にともなう調査、第22次調査として個人住宅全面改築に伴う事前調査を実施した。本書では第22次調査を報告することとし、第21次調査については概略することとする。

第21次調査 第21次調査は、遺跡のほぼ東西を走る道路内と北側に向かう道路に上水道本管を設置し、各家庭に引き込み管を敷設するため、工事の進捗にあわせて調査を実施したものである。

検出面は褐色シルト面および漸移層内である。検出の結果、古墳時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の竪穴住居跡3棟、大形の掘立柱建物跡1棟、土坑3基、溝跡13条、土坑3基を検出した。これまで本遺跡内では古墳時代の竪穴住居跡の検出例はなかったため、遺構の上限として注目している。

第22次調査 第22次調査は、個人住宅全面改築に伴い本調査を実施した。調査区は遺跡の北東に位置し、比高差2.3mをはかる段丘の縁辺部に立地する。検出遺構は平安時代の竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基で、竪穴住居跡からは須恵器、あかやき土器、土師器が出土している。



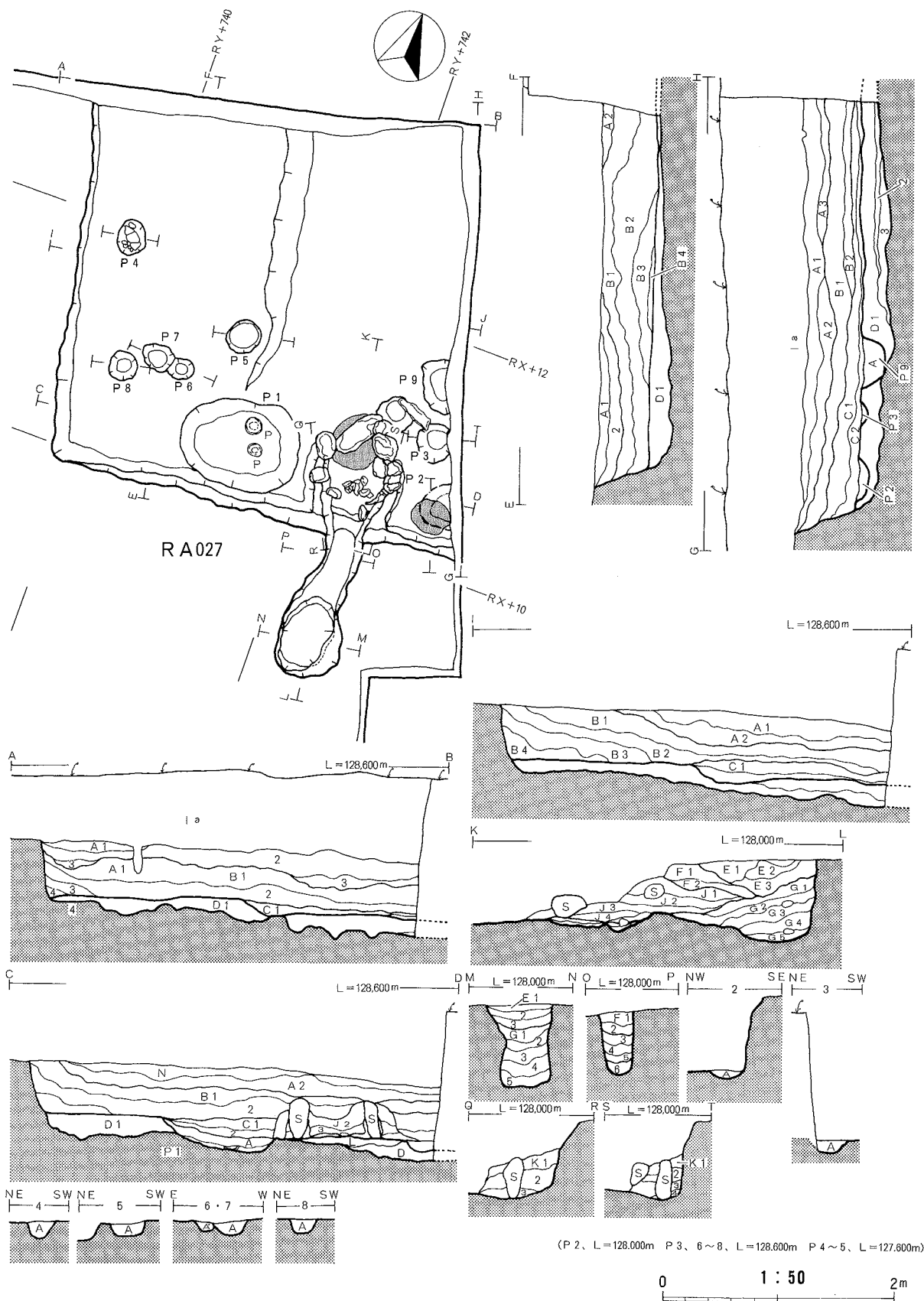
第4図 林崎遺跡第22次調査区全体図

3 調査内容

(1) 平安時代の遺構と遺物

RA027竪穴住居跡（第5図）

- 位 置 調査区北東隅。 平 面 形 正方形。
- 主 軸 方 向 S2°E 規 模 東西3.6m、南北3.5m
- 検 出 状 掘 込 面—削平により不明。 検 出 面—耕作土直下褐色シルト面。
- 埋 土 自然堆積で層相の違いによりA～Cの3層にわかれる。黒～黒褐色土を主体とし、しまりのよい層相を呈するA層、黒～暗褐色土を主体とし、若干の褐色土を含みA層よりもやや堅い層相を呈するB層、黒～黒褐色土を主体とし、褐色土をやや多く含み炭化物を含むC層からなっている。
- 床面構築土（D層）は床面全体に見られ、シルト質の褐色土に若干の黒褐色土を含む。しまりがあり、堅い層相を呈する。
- 壁 の 状 態 検出面から床面までの深さは0.4～0.45mほどをはかる。南壁は壁中程までは直壁であるが検出面に向かって外傾しており、その他はほぼ直壁である。
- 底 の 状 態 床面は中央部が一段低くなっており、床面下ほぼ全面に構築土（D層）を確認している。構築面は凹凸が著しく、構築土の層厚は0.05～0.15mをはかる。
- か ま ど かまどは壁の南側に位置し、煙道の形状は削り抜き抜きによるもので、掘込み天井の地山シルト層（F層）は多少落ち込んでいる。検出された平面形は溝状を呈しており、煙道底面は壁際から徐々に深くなっており、煙出し底面が最も深くなる。なお、火床面と煙出し底面との比高差は0.1mをはかる。規模は南壁から煙出し先端まで1.42m、煙道の幅は0.3～0.4m、検出面からの深さ0.45～0.7mをはかる。煙出しは楕円形を呈し、規模は0.7×0.55mで、検出面からの深さは0.7mほどをはかる。埋土は黒～暗褐色土に炭化物および焼土粒を含む（E層）と、黒褐色土に炭化物と焼土粒を含む層（G層）からなる。
- かまどの両そででは残存しており、そでの下部には褐色シルトに暗褐色土を含むかまど構築土（L層）が認められる。そではややしまりのある黄褐色シルトと粘土の混合土により構築されており、補強材として0.08～0.35mほどの丸い自然礫を使用している。規模は東そでが長さ0.4m、幅0.1～0.15m、床面からの高さ0.28～0.35m。西そでが長さ0.6m、幅0.2～0.25m、床面からの高さ0.25～0.35mをはかる。火床面はそでに囲まれた壁内よりやや外側に直径0.5mほどの円形の範囲で認められている。火床面は硬く、ややしまりがあり、浸透層は5cmをはかる。かまど崩壊土（J層）は褐色～暗褐色土に焼土および炭化物を含む。また、支脚はそでに囲まれたほぼ中央部に円礫を配置している。
- 柱 穴 貯蔵穴（P₁）が南側壁近くに検出されている。埋土は暗褐色土に褐色土を含むもので、平面形は楕円で長軸径1.05m、床面からの深さは0.2mをはかる。その他ピット（P₂～₉）は床面上に8口検出している。いずれも不整形を呈しており浅い。規模は、直径0.16～0.3m、深さ0.1～0.15mをはかり、埋土は黒色土を主体とし、褐色土を粒～粉状に含んでいる。

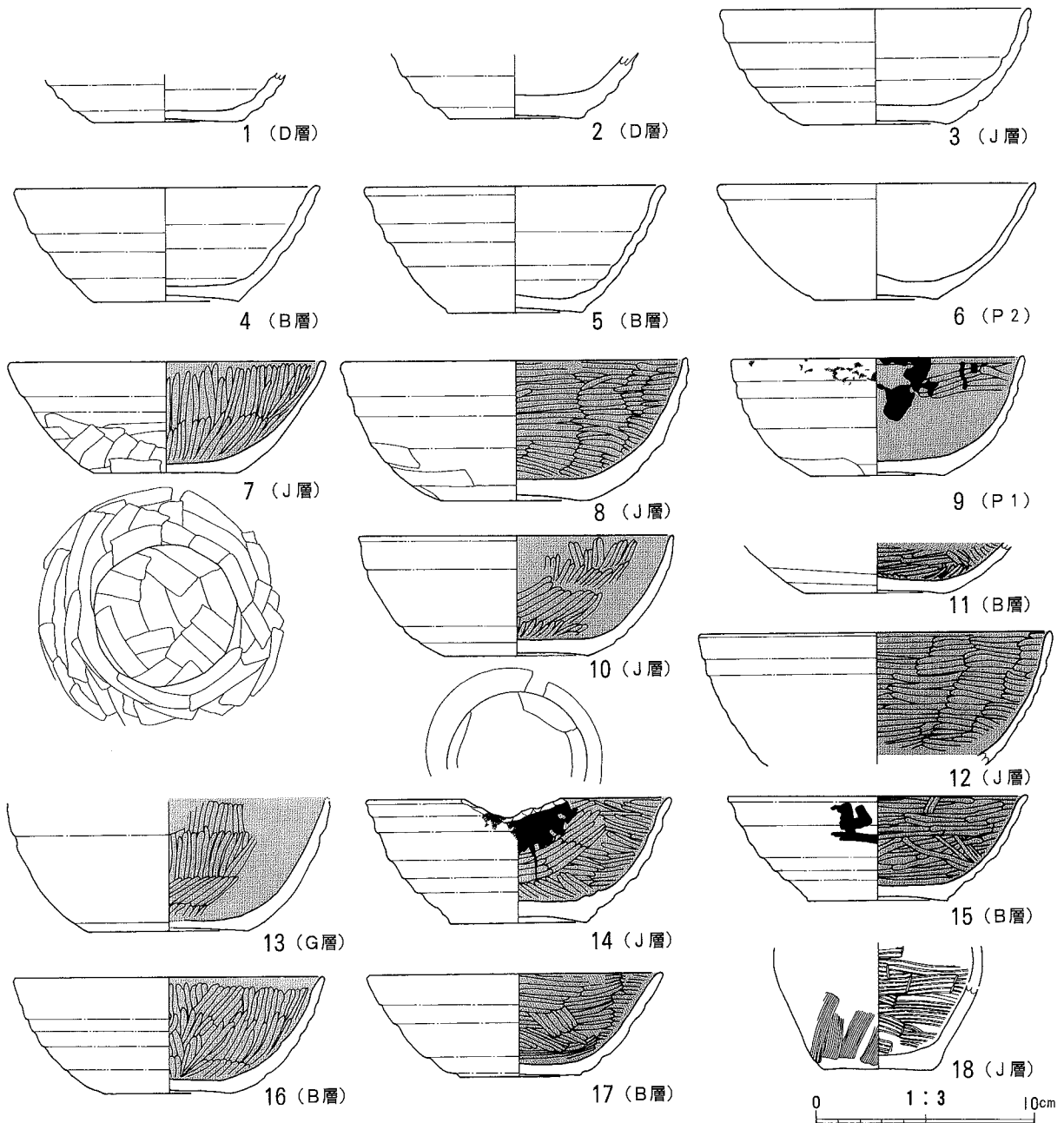


第5図 RA027竪穴住居跡

出土遺物 (第6・7図1~23) 1、2は須恵器坏で、ロクロ成形で底部は回転糸切り無調整である。

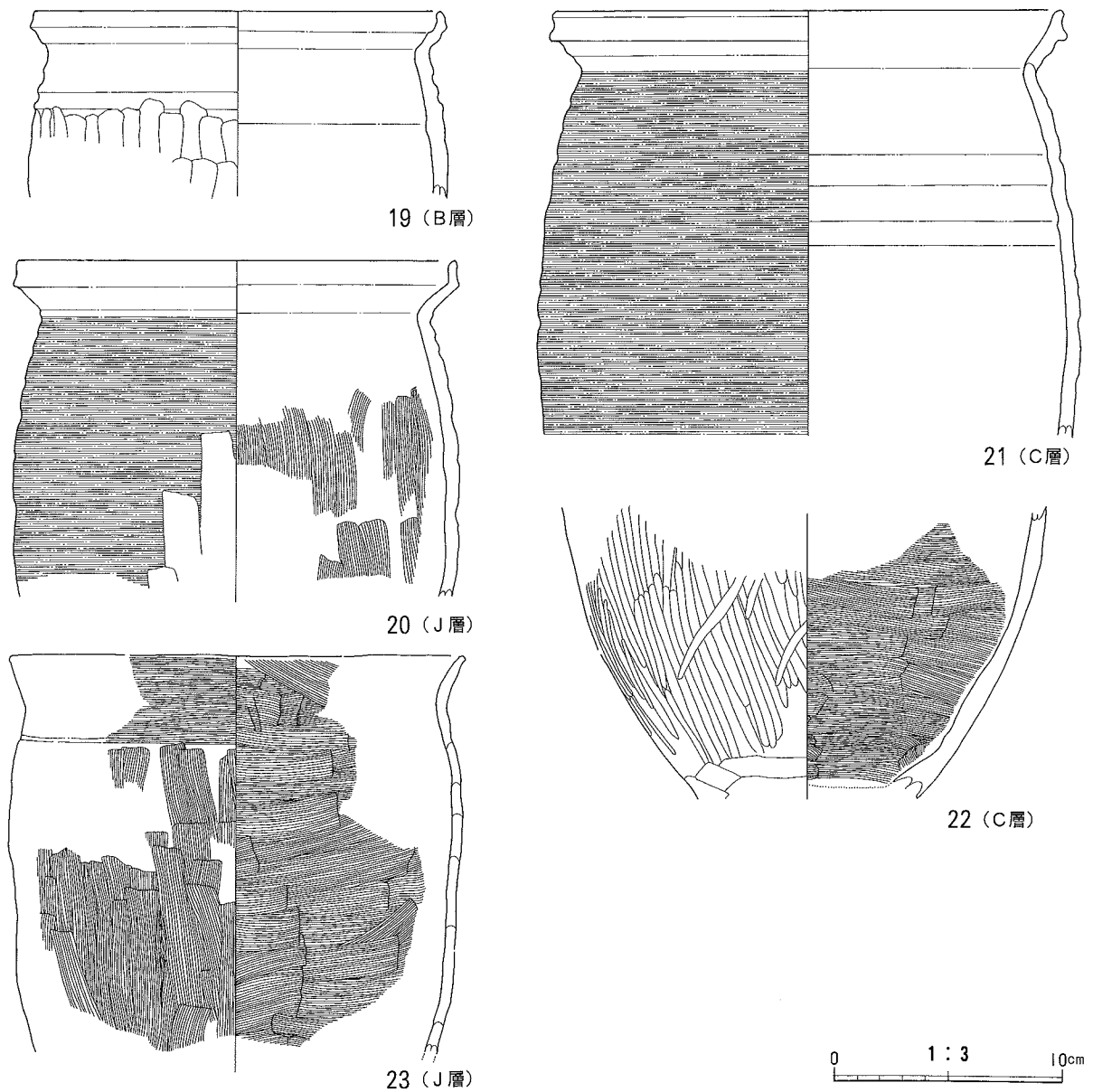
3~6はあかやき土器坏である。全てにおいてロクロ成形で、口縁部に向かい内湾ぎみに立ち上がるもので、底部は回転糸切り無調整である。

7~17は土師器坏である。全てがロクロ成形で、内面に黒色処理を施し、ヘラミガキが施されている。7は体部下半~底部にかけて手持ちヘラケズリ調整を施すもの、8は体部下半から下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を施すもので、口縁部はやや内湾する。9は体部下端のみに手持ちヘラケズリ調整を施すもので、内面は一部が摩滅している。口縁部は若干内湾してお



第6図 RA027 竖穴住居跡出土遺物(1)

り、内外面にタール状の付着物がみられる。10も口縁部がやや内湾するもので、体部下端に回転ヘラケズリ調整を施し、底部には糸切り後に手持ちのヘラケズリによる再調整が施される。11も体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されるものであるが、底部は回転糸切り無調整である。12は底部を欠くもので、外面調整はみられない。13は口縁部がやや内湾するもので、口縁部の端部を欠き、底部は回転糸切り無調整である。14は口縁部が外反するもので、底部は回転糸切り無調整である。内面にヘラミガキが施されおり、口縁部の一部を任意で欠き、注口として使用している。内外面にタール状の付着物が多く、中に灯芯のようなものもあるため灯明皿として使用されたものである。15も14と同様の器形で、口縁部が外反し、底部は回転糸切り無調整で、判読不明であるが墨書が書かれている。16・17は回転糸切り無調整である。



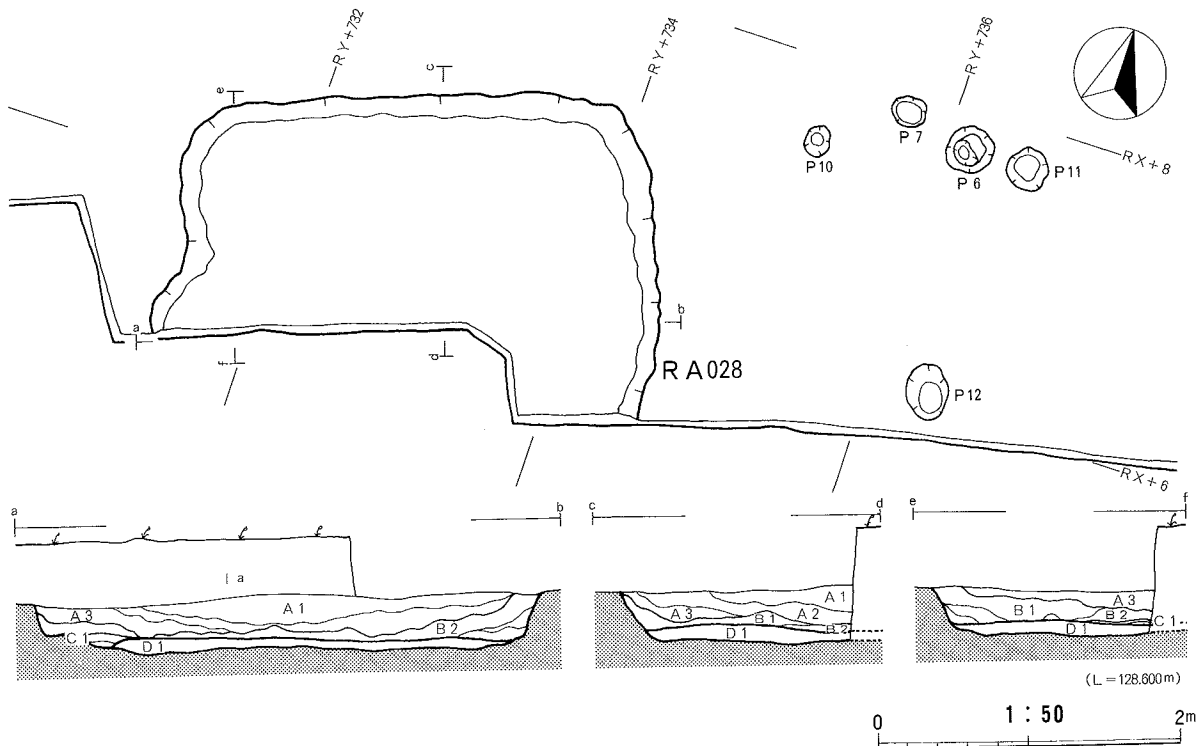
第7図 R A 027 竪穴住居跡出土遺物(2)

18は口縁部～体部上半を欠く土師器小形壺である。外面に縦方向のヘラナデを施し、内面は横方向にハケメを施している。

19～23はあかやき土器長胴甕で、19・20は口縁部が「く」の字状を呈している。19は体部～底部の2/3ほどを欠くもので、体部上半に縦方向のヘラケズリ調整が施されている。20は体部下半の1/2ほどを欠くもので、体部にカキメを施した後縦方向のヘラケズリ調整を施しており、内面には縦方向のヘラナデが施されている。21も体部下半を欠くもので、体部にカキメを施すほかはヘラミガキ調整等は見られない。22は体部下半～下端で外面に細かなヘラケズリ調整が施され、内面には横方向のヘラナデが施されている。23は土師器の長胴甕で、体部下半～底部を欠く。外面に縦方向のヘラミガキが施され、内面には横方向のヘラナデが施されている。

RA028竪穴住居跡（第8図）

位置 調査区南西部。 平面形 不整な正方形。
 主軸方向 不明。 規模 東西3.0m、南北2.2m以上。
 検出状況 掘込面—削平により不明。 検出面—耕作土直下褐色シルト層上面。
 埋土 自然堆積で、層相の違いによりA～C層の3層に大別される。A層は黒～黒褐色土を主体とし、褐色土を粒～粉状に含む層。B層は黒褐～暗褐色土を主体とし、褐色土をやや多く含む層。C層は遺構の西側に見られるが、暗褐色土を主体とし、褐色土を他の層よりも多く含む層である。床面構築土（D層）は褐色～黄褐色のシルトと黒～暗褐色土との混合土で、しまりがよく



第8図 RA028竪穴住居跡

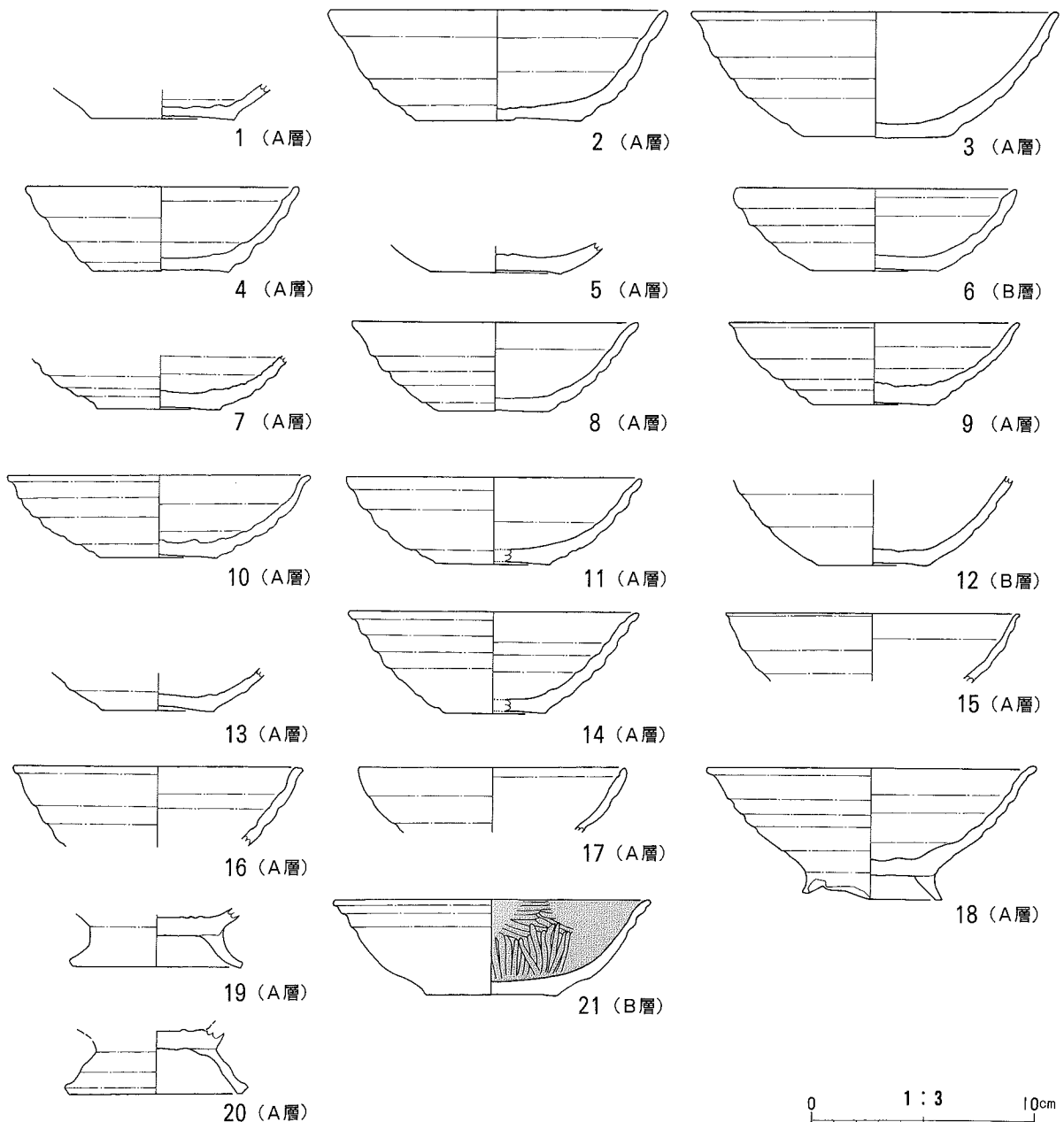
硬い土質である。

壁の状態 ほぼ直壁であるが、全体的に上方に向かってやや開いている。

底の状態 床面はやや凹凸が見られるがほぼ平坦である。構築面はあまり起伏のない掘り込み面に構築土を敷き詰めており、構築土の層厚は0.05～0.1mをはかる。検出面から底面までの深さは0.3～0.32mをはかる。

かまど 未検出（調査区外か） 柱 穴 なし

出土遺物 （第9図1～21）1は須恵器環で、底部は回転糸切り無調整である。底径6.5cm、残存する器高1.3cmをはかる。2～17はあかやき土器環である。底部は回転糸切り無調整で、8～11、14～16は口縁部がやや外反する。



第9図 RA028竪穴住居跡出土遺物

18~20はあかやき高台付坏で、高台を回転糸切り後に取り付け、その後ナデツケにより外面調整がなされるものである。18は、高台下端の一部を意図的に打ち欠いているものである。

21は土師器坏で、底部切り離しは糸切り無調整、内面には黒色処理の後ヘラミガキが施されている。

RB005掘立柱建物跡（第10図）

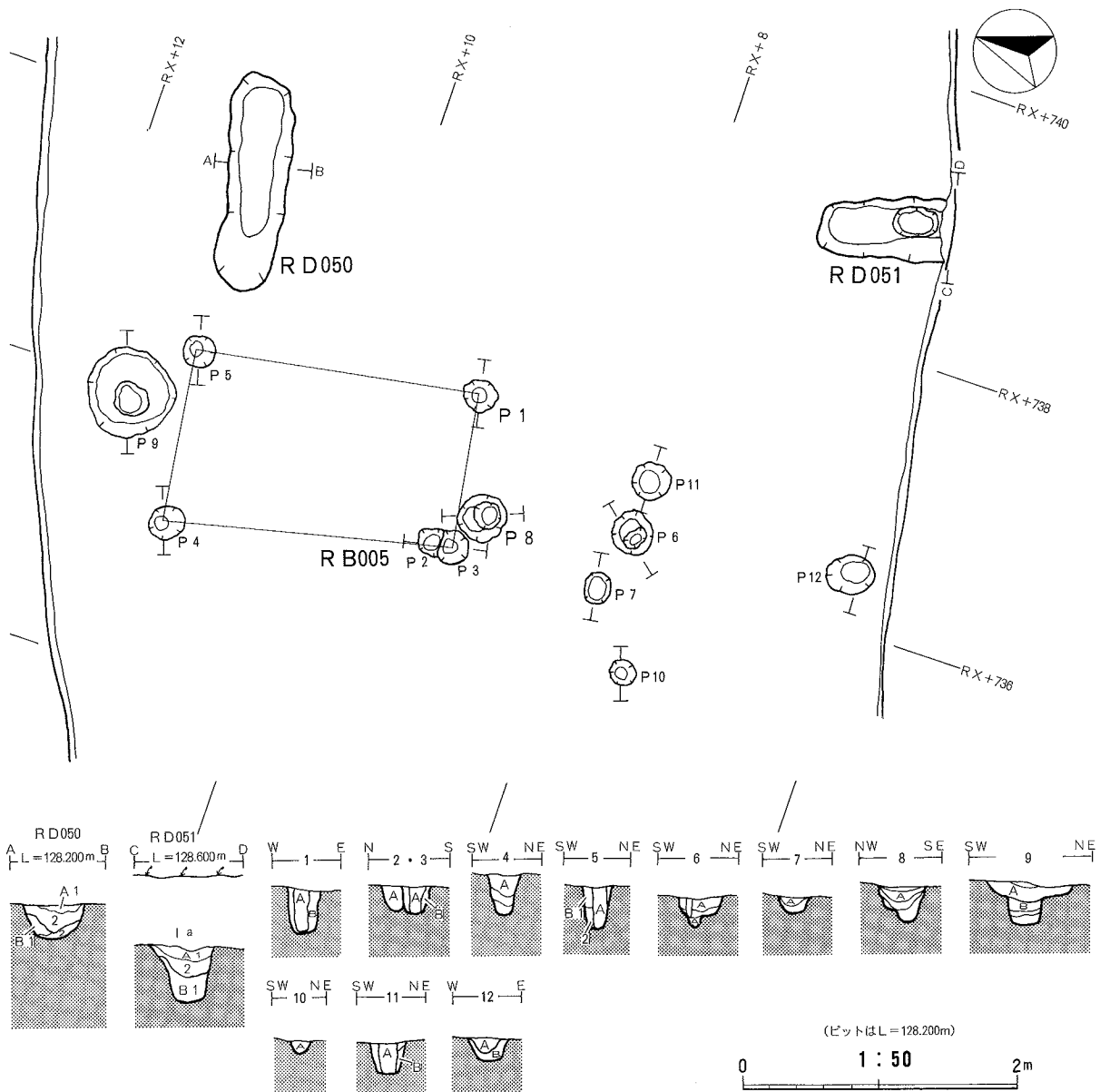
位置 調査区北東 主軸方向 N10°W

規模 桁行1間（約2.2m）梁間1間（約1.3m）

柱穴の直径は0.4~0.5m、検出面から底面までの深さは0.5~0.7mをはかる。

検出状況 掘込面一削平。検出面一耕作土直下褐色シルト層上面。

埋土 埋土は、柱痕跡部分のA層と掘方のB層に大別される。A層は黒~黒褐色土を主体とし、褐



第10図 RB005掘立柱建物跡・RD050・051土坑、ピット001~012

色土を若干含む層。B層は黒～黒褐色土を主体とし、褐色土を多く含む層である。

出土遺物 なし

RD050土坑（第10図）

位置 調査区北東 平面形 長楕円形

規模 上端—1.6m×0.45m。下端—1.1m×0.25m

検出状況 掘込面—削平。 検出面—耕作土直下褐色シルト層上面。

埋土 埋土は、自然堆積で層相の違いによりA～Bの2層に大別される。いずれも黒褐色～暗褐色を主体とする埋土で、A層は黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含む層。B層は暗褐色土を主体とし、褐色土をA層よりも多く含む層である。

壁の状態 壁高は0.25mで、ほぼ直壁。 底の状態 やや丸い。 出土遺物 なし。

RD051土坑（第10図）

位置 調査区南東 平面形 長楕円形

規模 上端—0.45×1.0m以上。下端—0.3m×0.8m以上。

検出状況 掘込面—削平。 検出面—耕作土直下褐色シルト面。

埋土 埋土は、自然堆積で層相の違いによりA～Bの2層に大別される。いずれも黒褐色～暗褐色を主体とする埋土で、A層は黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含む層。B層は暗褐色土を主体とし、褐色土をA層よりも多く含む層である。

壁の状態 壁高は0.25mで、上方に向かいやや開く。 底の状態 一部に円形の窪みが認められる。

出土遺物 なし。

ピット（第10図） ピットは調査区のほぼ中央でまとまって検出されている。ピットの配列やそれぞれの規模などを考えると掘立柱建物跡を構成しているものではないと思われる。

埋土は全て黒～黒褐色土を主体としているものである。なお、遺物の出土はみられなかった。

4. 調査のまとめ

林崎遺跡ではこれまで22地点について試掘調査・本調査を実施した。調査の成果から遺構の配置と遺跡の性格が明確になりつつあり、特に志波城廃絶後の集落や、官衙もしくは寺院を窺わせる建物跡の存在など、注目される遺構が検出されている。

第22次調査では、竪穴住居跡2棟、土坑2基を検出している。出土遺物はいずれも10世紀初頭の須恵器・あかやき土器・土師器等で、当遺跡内でこれまで確認されている大半の遺構と同様の時期に属するものであることが確認された。

出土遺物の傾向としては、RA027竪穴住居跡では土師器環の出土量が多く、かつ甕類の出土がみられるのに対し、RA028竪穴住居跡ではあかやき土器環の出土量が多く、甕類の出土がみられないという傾向をもつ。これまでの調査成果においても、環と甕の保有率もさることながら、あかやき土器の保有率の高さが目立つことや、灯明皿として使用された土師器環をは

じめ、「寺」「大上」「上万」と判読できる墨書土器や、多嘴瓶など一般集落では出土しない遺物が出土していることもあわせ、一般の集落遺跡と出土遺物の器種構成は異なるようである。

竪穴住居跡の検出される範囲は、雫石川旧河道によって画され、比高差2m程をはかる微高地の縁辺部において多く検出されている。これまでの調査で28棟が検出されており、古墳時代の竪穴住居跡1棟が検出されているほかは、全てが平安時代の10世紀前半に比定できる住居跡である。なお、遺跡の南北を横切る大溝から出土する土器群は9世紀中～後半を主体としており、時期を異にしている。発掘調査が個人住宅建築に伴うものが主体であるため、遺構の全体が明確なものが少ないが、表として8次調査以降で検出された竪穴住居跡のデータを掲げた。

林崎遺跡検出竪穴住居跡一覧（※第8～22次調査）

次数	遺構番号	竪穴住居規模					重複関係		時期	備考
		平面形	主軸方向	かまど位置	東西(m)	南北(m)	新しい遺構	古い遺構		
8	016	方形	—	—	—	4.0	RG803	—	10世紀初	
17	017	方形	—	—	—	3.7	RD039,040 044	—	10世紀初	
19	018	不整形	E 5° N	東壁南寄り	3.1	3.2	—	—	10世紀初	検出のみ
20	019	方形	S 35° E	南壁東寄り	2.3	2.3	RA020	—	10世紀初	
20	020	方形	E 5° S	東壁北寄り	4.5	4.3	—	RA019	10世紀初	
20	021	方形	N 37° E	北壁中央	2.8	2.9	—	—	10世紀初	
20	022	方形	—	—	4.0	—	—	—	10世紀初	
21	023	方形?	—	—	—	—	—	—	7世紀?	
21	024	方形?	—	—	—	—	—	—	10世紀初	
21	025	方形?	—	—	—	—	—	—	10世紀初	
21	026	方形?	—	—	—	—	—	—	10世紀初	
22	027	方形	S 2° E	南壁中央	3.6以上	3.5以上	—	—	10世紀初	
22	028	方形	—	—	2.2	—	—	—	10世紀初	

※竪穴住居跡のデータは、第1、2次調査分については、『志波城跡 I 太田方八丁遺跡範囲確認調査報告』（1981）に掲載。第5次調査分については、『志波城跡昭和58年度発掘調査概報』（1984）に掲載。また、第14～17次調査分については、『盛岡市埋蔵文化財調査年報平成5・6年度』（1998）に掲載されているが、8、21次調査は別途報告予定である。

【引用・参考文献】

- 1981 盛岡市教育委員会『志波城跡 I』
- 1985 盛岡市教育委員会『埋蔵文化財調査年報—昭和55～58年度—』
- 1998 盛岡市教育委員会『埋蔵文化財調査年報—平成5・6年度—』
- 1996 矢巾町教育委員会『館畑遺跡』（平成7年度発掘調査報告書）
- 1998 西野 修ほか『東北地方の古代集落』「北上盆地北部」第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料

2. ^{さだまり}砂溜遺跡（第23・24次調査）

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の位置と地形

遺跡の立地 砂溜遺跡は、盛岡市街地から約2kmほどの東山1・2丁目、川目16・17地割地内に所在している。岩山の南側に形成された丘陵地および緩斜面上に立地しており、現況は住宅地や果樹園を主体とした農地となっている。遺跡周辺には西側に小山遺跡、東側には和田・仁反田遺跡が位置しており、小山遺跡群として包括している。

小山遺跡群 本遺跡群は建石山山地の西端部およびその縁辺部に発達した丘陵地・山麓緩斜面上に立地し、その下方には築川で形成された広い低位段丘（砂礫段丘Ⅲ）が分布している。この低位段丘は洪民火山灰層上部以上をのせる砂礫段丘Ⅰと分火山灰層をのせる砂礫段丘Ⅱがあまり発達せず、小起伏山地や丘陵地Ⅱが低位段丘・氾濫平野と接している。

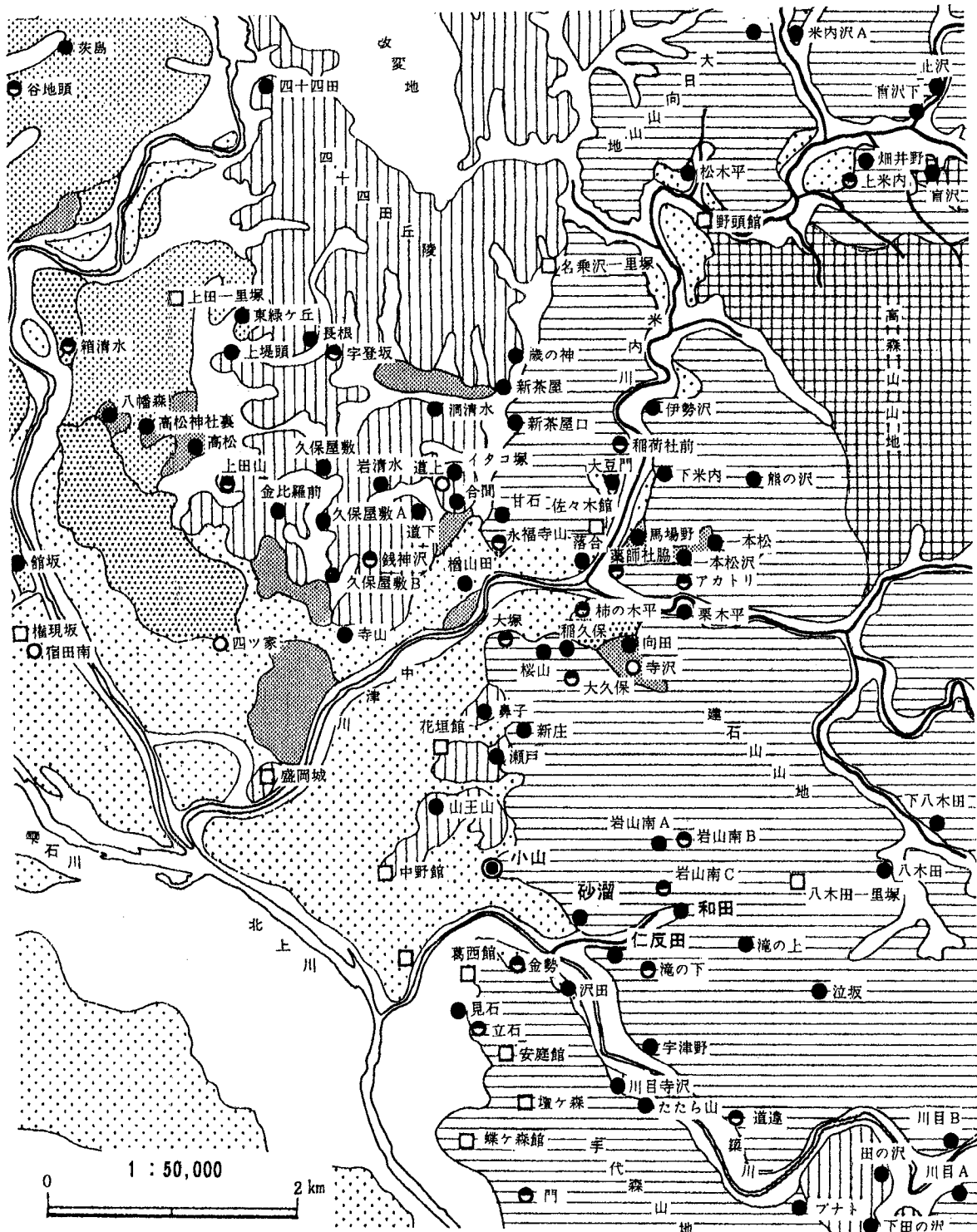
小山遺跡群は築川北岸の小起伏山地山麓の南面する丘陵上および傾斜地に位置している。そのなかでも小山・砂溜遺跡の範囲は広大で、東西1.2km、南北0.8kmほどをはかり、入り込んだ埋没谷によって両遺跡は画されている。位置的には県公舎の立地する丘陵地と谷を隔てて対峙する東側緩斜面上で区分されるようである。なお、砂溜遺跡は小山遺跡から東方に望む位置にあり、比高差は約10mほどをはかる。









2 調査経過

(1) これまでの調査

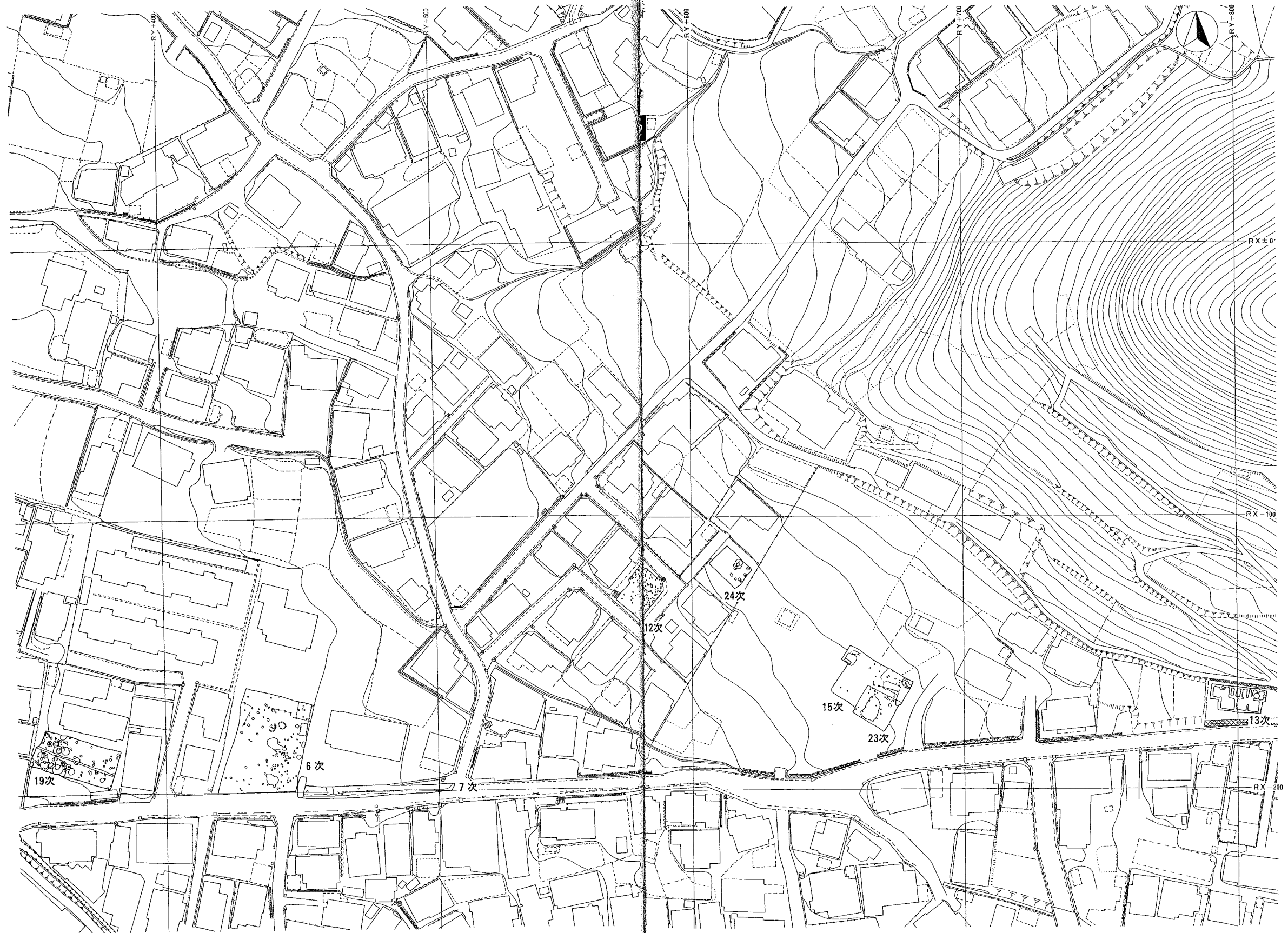
小山遺跡群での考古学的調査研究の歴史は古く、特に小山遺跡では大正～昭和にかけて活躍した県内の考古学調査の先駆者であった小田島禄郎氏のコレクションにも実見することができる。昭和20年代になると、草間俊一氏は吉田義昭・奥健夫・古沢典夫氏らによる調査資料から、縄文時代前期～中期にかけての土器編年を小山一類から七類まで細分した試案を『盛岡市史』のなかで提示している。

当遺跡群における組織的な発掘調査は、前述のような研究成果があげられていたにもかかわらず昭和40年代まで実施されることはなく、小山遺跡の中心部分と思われる舌状丘陵地では県知事公舎・県公舎団地の建設が遺跡未調査のまま実施されている。また、周辺地域の果樹園等も急速な宅地化が進み、遺跡群の大半はそれらに伴う造成や掘削などにより旧地形をとどめていない。これら住宅建築・宅地造成に対し当市としては早急な対応を必要とし、昭和62年度よ



- | | | | |
|---|--|---|-----------|
|  中起伏山地 |  扇状地および
崖錐性扇状地 |  砂礫段丘Ⅲ
(低位段丘) | ● 縄文時代 |
|  小起伏山地 |  火山灰砂台地 |  谷底平野および
氾濫平野 | ● 縄文時代～古代 |
|  丘陵地Ⅰ |  砂礫段丘Ⅱ
(中位段丘) | | ○ 古代 |
| | | | □ 中世・近世 |

第11図 地形分類と遺跡分布



第12図 砂溜遺跡 (1 : 1,500)

り個人住宅建築等をはじめとする開発行為に係る事前の発掘調査を実施している。

砂溜遺跡 砂溜遺跡では、昭和62年度から小山遺跡群第6次調査として発掘調査が行われており、縄文時代中期～近世にかけての遺構・遺物を確認している。なお、第6・7次調査区については報告済である。なお、ここではそれ以降の調査成果について略述することとする。

第12次調査 第12次調査区は、第6次調査区から北東に250mほどの地点に位置し、南西に緩やかに傾斜する斜面上に立地している。縄文時代中期の土坑2基、炉跡1基、縄文時代中期～後期にかけての遺物包含層を確認した。

第13・15次調査 第13次調査区は、遺跡南東の背後に山地が迫る狭い緩斜面上に位置し、縄文時代の土坑3基を検出した。第15次調査区は、遺跡南東部の南西に緩やかに傾斜する斜面上に立地している。

確認された遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、近世の礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、竪穴1棟、井戸跡1基、溝跡1条、また、近世生活面での整地層、時期不詳の竪穴1棟、土坑1基のほか、縄文時代中期～後期にかけての遺物包含層も検出された。遺物は、礎石建物跡や掘立柱建物跡に伴うものと思われる近世の陶磁器、古銭、煙管などが出土している。

砂溜遺跡の調査成果（調査次数は小山遺跡群の中で一括されている）

次数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期間	検出遺構・遺物
6	東山1丁目25-1	住宅新築	554	87. 11. 24 87. 12. 03	縄文時代の竪穴住居跡3棟、土坑6基 近世以降の掘立柱建物跡2棟、柱列2列
7	東山1丁目23	市道改良	98	88. 7. 25 88. 7. 27	柱穴4口、縄文時代の遺物包含層
12 試掘	東山1丁目165-18	小屋新築	50	89. 11. 1	縄文時代の土坑を検出 (翌年度本調査)
12	東山1丁目165-18	住宅新築	191	90. 4. 9 90. 5. 2	縄文時代中期の土坑2、焼土遺構1、柱穴150口ほか
13	東山1丁目179-2	住宅改築	60	90. 9. 19	縄文時代の土坑3基
15 試掘	東山1丁目178-8	住宅新築	21	91. 11. 6 91. 11. 8	平安時代～近世の遺構を検出 (翌年度本調査)
15	東山1丁目178-8	住宅新築	178	92. 4. 14 92. 5. 2	平安時代の竪穴住居跡1棟、近世以降の礎石建物跡1棟、竪穴1棟、井戸跡ほか
19	東山1丁目26-5	共同住宅 新築	277	97. 4. 8 97. 5. 15	縄文時代中期の土坑38基・柱穴4口・遺物包含層・縄文時代以降の焼土遺構ほか
23	東山1丁目	住宅新築	122	98. 5. 21 98. 6. 5	近世以降の竪穴1棟、柱穴
24	東山1丁目	住宅新築	102	98. 6. 19 98. 6. 25	縄文時代の竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基

※1～5、8～10、14、16、18、20～22次は小山遺跡、17次は仁反田遺跡の発掘調査分

第19次調査区は、遺跡の南西部に位置し、第6・7次調査区と同様の地形上に立地している。第19次調査ここでは、縄文時代後期の土坑38基等が検出された。出土遺物も遺構数に比例して多く、縄文時代後期を主体とする土器・石器・土製品が多く出土しており、これまでの調査区の中で最も遺構密度が高い地点であった。

(2) 平成10年度の調査

第23次調査区は第15次調査区に隣接しており、近世以降の竪穴1棟、第15次調査区で検出された土坑の未検出部分が1基確認された。第23次調査

第24次調査区は、第12次調査区の北東側に位置し、緩やかに南西に傾斜する斜面上に立地している。当該調査区では、遺構の確認された部分について発掘調査を実施しており、建築申請地内の東半で縄文時代後期の竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1基、土坑2基を検出した。第24次調査

3 調査内容

1. 砂溜遺跡第23次調査

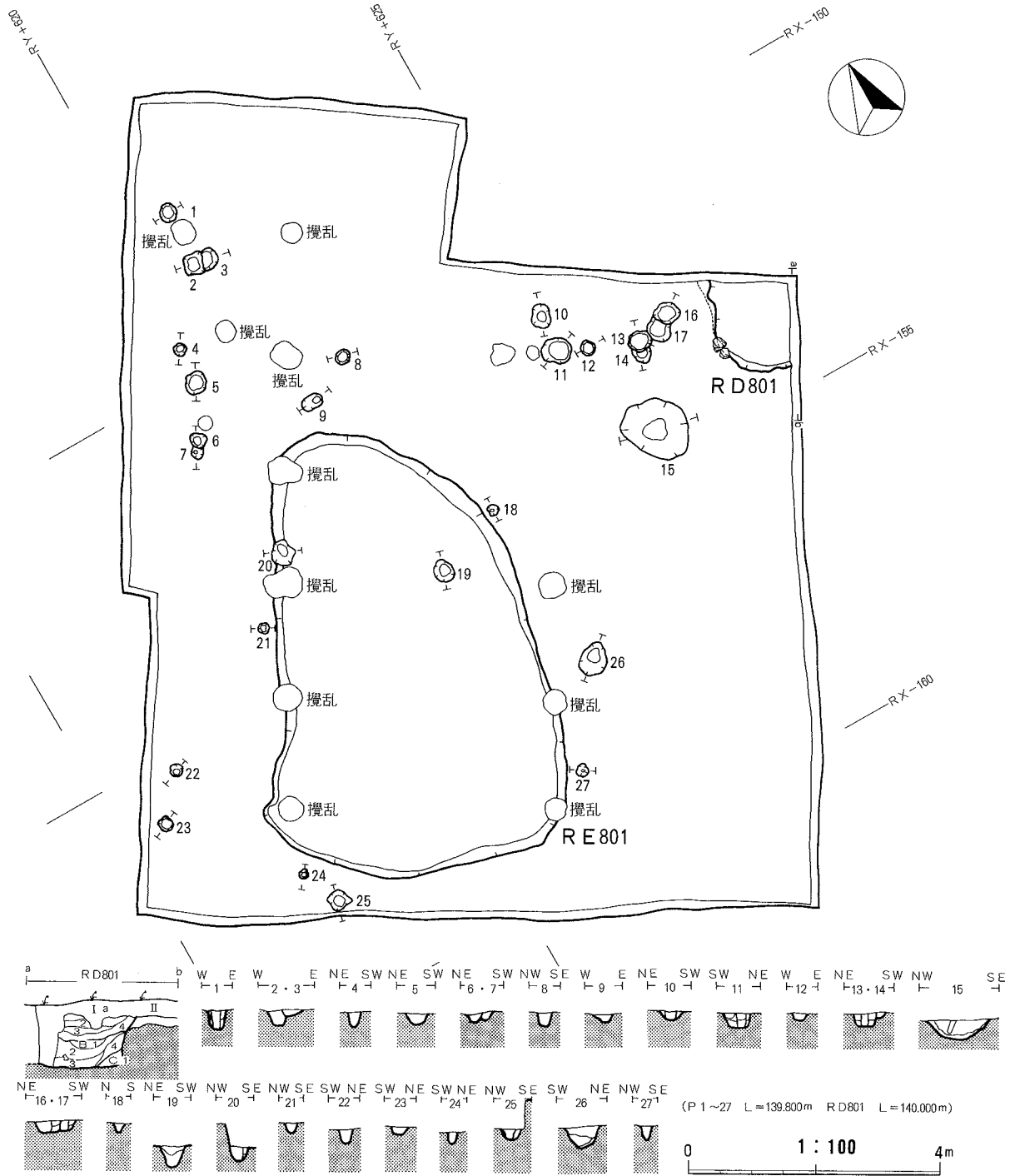
(1) 近世以降の遺構と遺物

RE801竪穴（第14図）

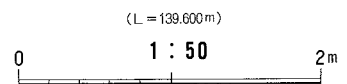
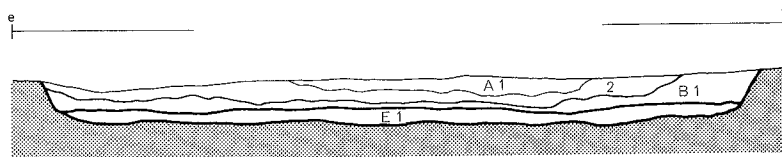
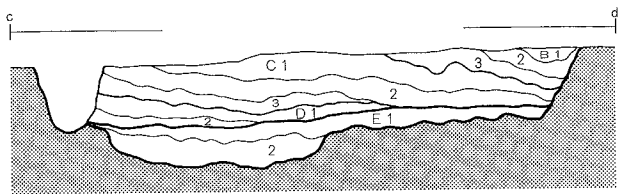
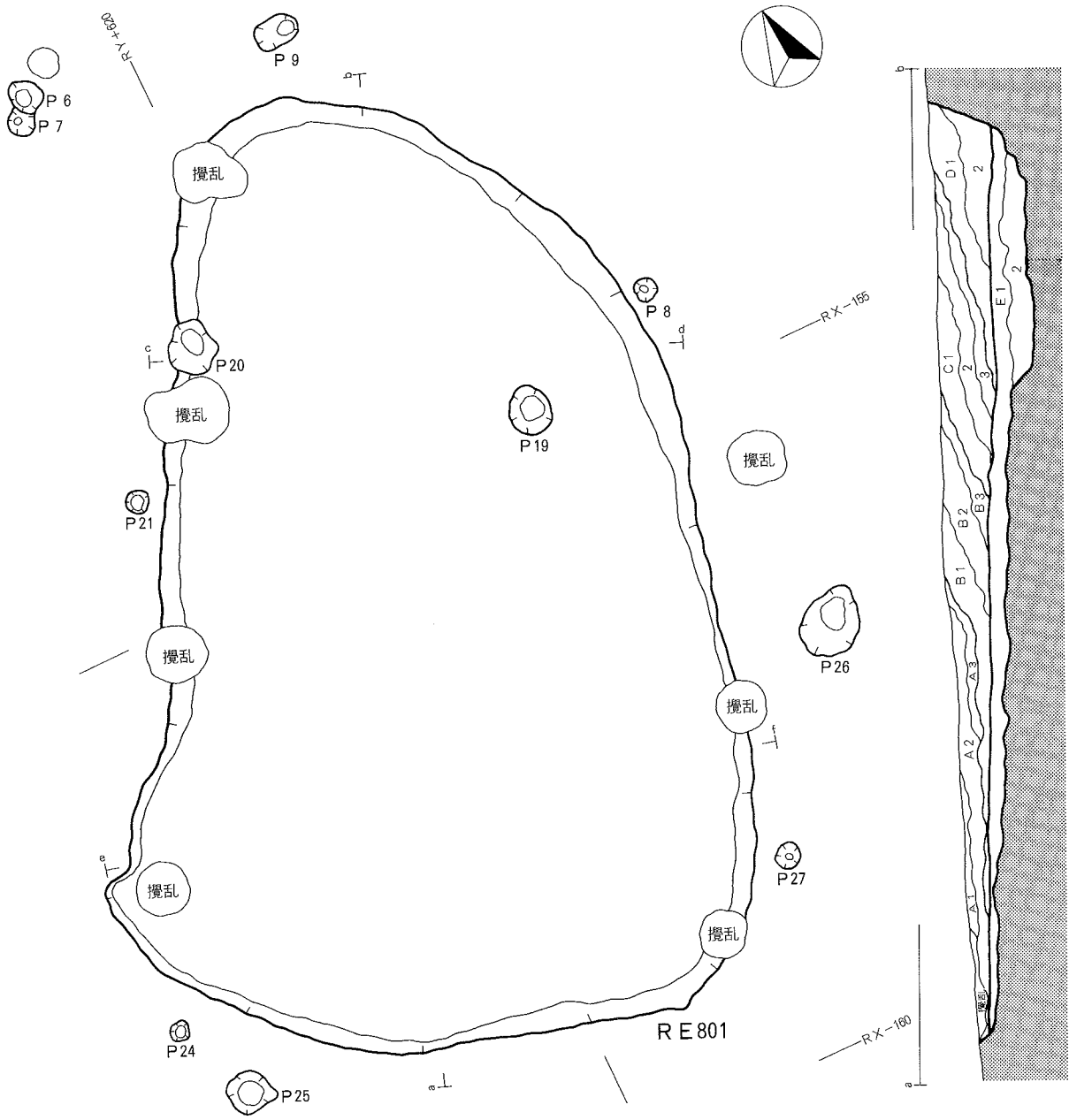
位置	調査区中央部。	平面形	一不整楕円形
主軸方向	N20°E	規模	東西—8.7~4.8m、南北—7.1m
重複関係	P _{19・20} に切られる。		
検出状況	掘込面—削平により不明。検出面—表土および耕作土直下地山面。		
埋土	埋土は黒色～黒褐色土を主体としており、黒色土を主体とし、褐色土を粒状に含むA層。黒色土を主体とし、褐色土を粒～塊状に含むB層。同じく黒色土を主体とし、褐色土を粒状に含むC層。黒色土を主体とし、明褐色土を粒状に若干含むD層。黄褐色土と粘土の混合土からなる床面構築土（E層）である。		
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.1~0.45mで、南壁は削平を受けているため残存状態はよくない。壁は上方に向かってやや開く形状を呈している。		
底の状態	床面は平坦で、床面下全面に構築土（E層）を確認している。構築面は凹凸があり、北西側の一部は深く掘り込まれている。構築土の層厚は0.05~0.27mほどをはかる。		
柱穴	床面に見られるピットは遺構埋土を上から掘り込んでおり、本遺構より新しい。		
出土遺物	遺物は小破片が出土するのみで、図示できるものは皆無である。ただし、床面から18世紀代のものと思われる陶磁器（肥前）の小破片が出土している。		

RD801土坑 (第13図)

- 位置 調査区北東隅。 平面形 不整形。
- 規模 今次調査区内では上端1.4m×1.3m、下端1.2×1.13m。
- 検出状況 掘込面一削平を受け不明。 検出面一表土および耕作土直下地山面。
- 埋土 埋土は、黒色土を主体とし、褐色土を粒状に多く含むA層。同じく黒色土を主体としている



第13図 第23次調査区全体図



第14図 RE 802 竪穴

が褐色土を粒状に少量含むB層。褐色の粘土を主体とし、白色の粘土を塊状に含み、礫も混入するC層からなる。

壁の状況 壁高は0.51mをはかり、壁の形状は一定ではなく、上方に向かって狭まるか若干の広がりをもつ。

底の状況 平坦。 出土遺物 なし。

柱穴・ピット (第13図)

今次調査区では、柱穴およびピットを27口検出している。このうち、柱痕跡の確認できるものは1・10・11・13・16・17・20・25である。それぞれ直径は0.2~0.3m、検出面からの深さはRE801縦穴を切る20を除き、概ね0.2~0.3mをはかる。埋土は、黒~黒褐色を主体とし、褐色土を粒~粉状に含むA層（柱痕跡）と黒褐~褐色土を主体とし、褐色土を粒状にやや多く含むB層（堀方）からなっている。

ただしこれらの柱穴群は、柱間寸法等の関係から、掘立柱建物跡を構成するものとは考えていない。その他のピットは15を除くと小規模なものが大半で、直径0.1~0.5m、検出面からの深さは0.1~0.4mをはかる。埋土は黒~黒褐色を主体としている。

2. 砂溜遺跡第24次調査

(1) 縄文時代の遺構と遺物

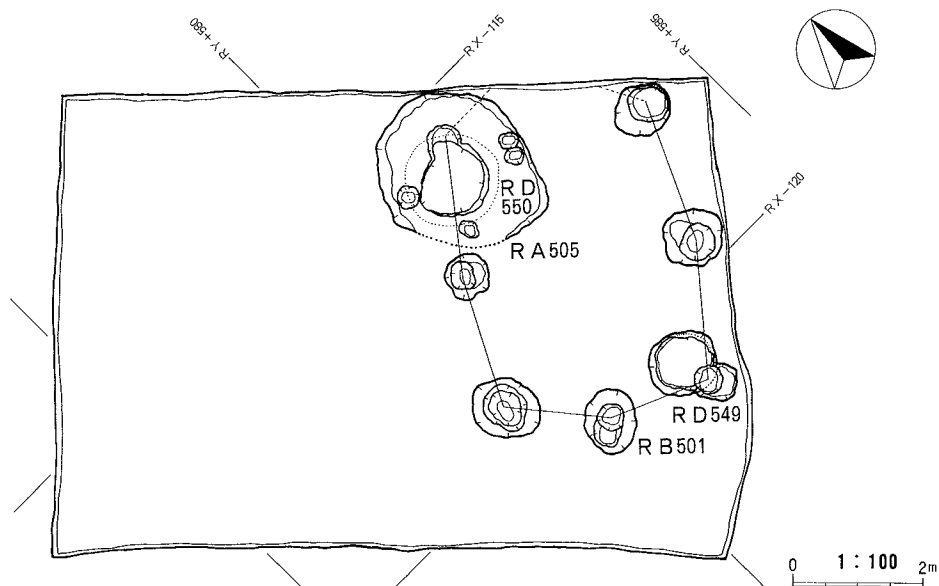
RA505竪穴住居跡 (第16図)

位置 調査区北東部。 平面形 不整形円形。

主軸方向 N15° E 規模 2.5×2.5m

重複関係 RD550土坑およびRB501掘立柱建物跡を切る。

検出状況 掘込面一削平を受け不明。 検出面一暗褐色土層。



第15図 砂溜遺跡第24次調査区全体図

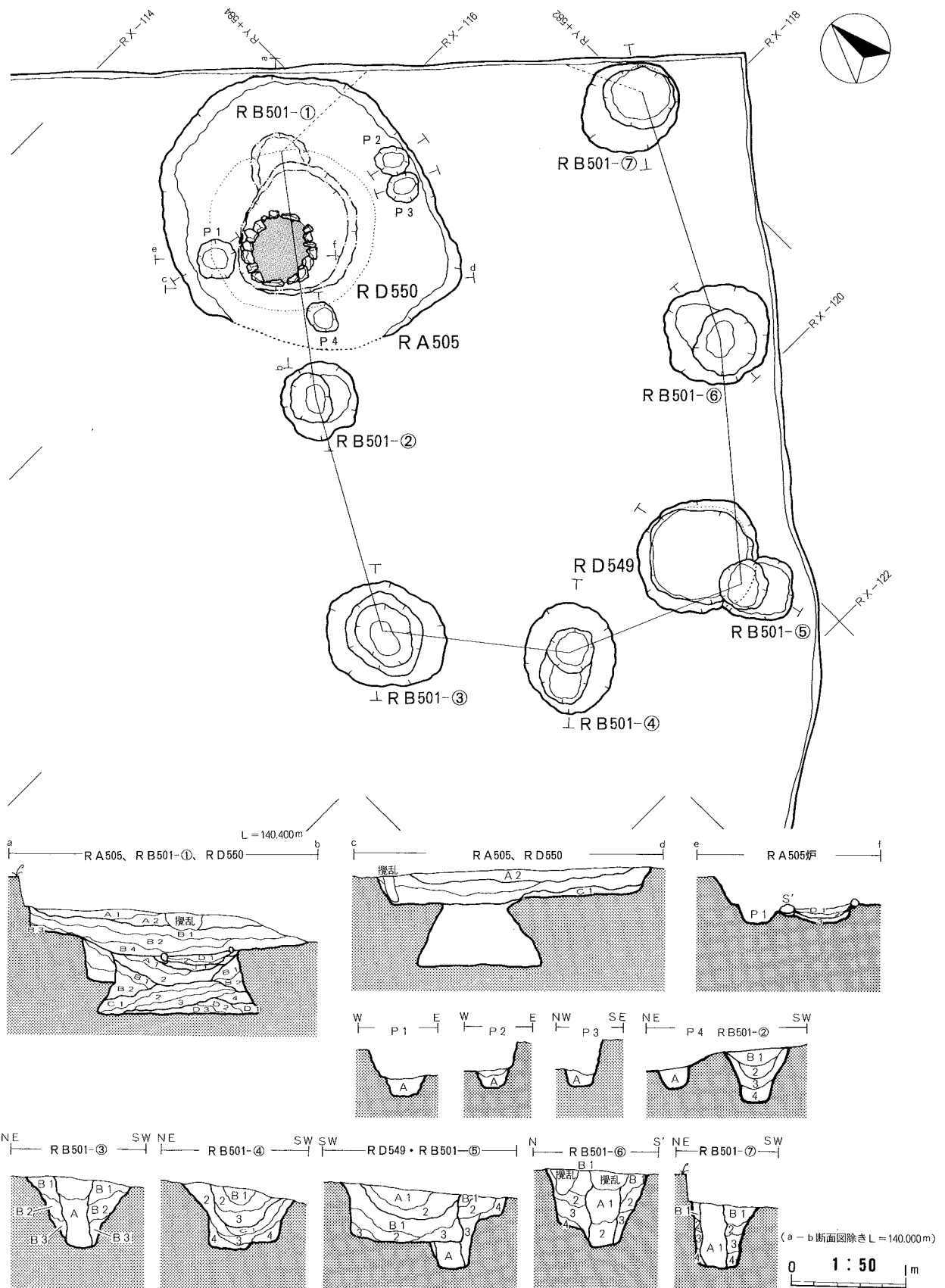
- 埋 土** 埋土は自然堆積で、全て黒色土および黒褐色土を主体としている。黒色土を主体とし、褐色土を粉～粒状に含むA層。黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含むB層。黒褐色を主体とし、褐色土を粒状にやや多く含むC層。黒褐色土を主体とし、炭化物、焼土粒を含むD層からなる。
- 壁の状態** 検出面からの深さは0.25～0.4mをはかる。削平を受け残存状態はよくない。
- 底の状態** ほぼ平坦であるが炉の下面にある断面形フラスコ形の土坑（RD550）があるため床面の一部が沈下して検出されている。
- 柱 穴** 柱穴（ピット）は4口検出されているが柱穴の配置等から当住居に伴うものではない。
- 炉の状態** 炉は、床面のやや南西寄りに位置し、下面にある土坑の埋土が柔らかいため、沈下した状態で検出された。石組みの石は河原石を用いており、転用は認められない。火床面は赤褐色を呈し、やや硬くしまる層相である。
- 出土遺物** 遺物（第17図1）は5点が出土しているが、図示できるものは1点である。1は深鉢の体部破片で、胴部上半でくびれ、口縁部に向かって外反する器形を呈する。施文は、沈線による入組文が施され、頸部には篋状工具を直角にあて、横方向に押し引きして施文された刻目文が帯状にみられる。

RB501掘立柱建物跡（第16図）

- 位 置** 調査区北東側 主軸方向 N40° E
- 平面形** 柱穴は円～楕円形、8本柱による亀甲形の配置、または7本柱による五角形の配置をもつものであると考えられる。
- 規 模** P₁が直径0.6m、深さ0.8m。P₂は直径0.7m、深さ0.5m。P₃は直径0.9m、深さ0.6m。P₄は直径0.95m、深さ0.55m。P₅は直径0.6m、深さ0.65m。P₆は直径0.9m、深さ0.65m。P₇は直径0.9m、深さ0.55mをはかる。
- 重複関係** RA505竪穴住居跡、RD549・550土坑に切られる。
- 検出状況** 掘込面一削平を受け不明。 検出面一暗褐色土層。
- 埋 土** 柱痕跡のA層が黒～黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含み、炭化物を少量含む。堀方埋土は、暗褐色土を主体とし、雲母と粒状の褐色土を含むB層。同じく暗褐色土を主体とし、褐色土を含むC層からなる。
- 出土遺物** 遺物（第17図2～4）2は深鉢の体部下半～底部で、縦位に単節の地文が施されるもの、3は深鉢の破片で、刻目を施す隆線が横位に巡るほか、横位の沈線が施されるもの。4は小形深鉢の底部である。

RD549土坑（第16図）

- 位 置** 調査区東端側。 平面形 円形。 規 模 上端 直径1.1m、下端 直径1.0m。
- 重複関係** RB501掘立柱建物跡を切る。
- 検出状況** 掘込面一削平により不明。 検出面一暗褐色土層。
- 埋 土** 黒～黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含むA層。黒褐～暗褐色土を主体とし、褐色土を粒～塊状に含むB層からなっている。
- 壁の状態** 断面フラスコ形を呈し、検出面からの深さ0.5mをはかる。



第16図 R A 505 竖穴住居跡、R B 501 掘立柱建物跡、R D 549・550 土坑

底の状態 平坦。 出土遺物 なし。

RD550土坑（第16図）

位置 調査区北東部 平面形 円形。 規模 上端 直径1.15m、下端 直径1.43m

重複関係 RA505竪穴住居に切られ、RB501掘立柱建物跡を切る。

検出状況 掘込面—RA550に削平されている。 検出面—RA550床面。

埋土 埋土はA～D層に分けられ、A層は暗褐色土を主体とし、粒状に褐色土と炭化物を含む。B層は、暗褐色土を主体とし、褐色土を粒～塊状に多く含む層相である。C層は同じく暗褐色土を主体としているが、黒褐色土および褐色土を含む層。D層は、暗褐色土をを主体とし、黄褐色土を粒状に含む層相である。

壁の状態 断面フラスコ形を呈し、検出面からの深さ0.55mをはかる。

底の状態 平坦。 出土遺物 なし。

4 調査のまとめ

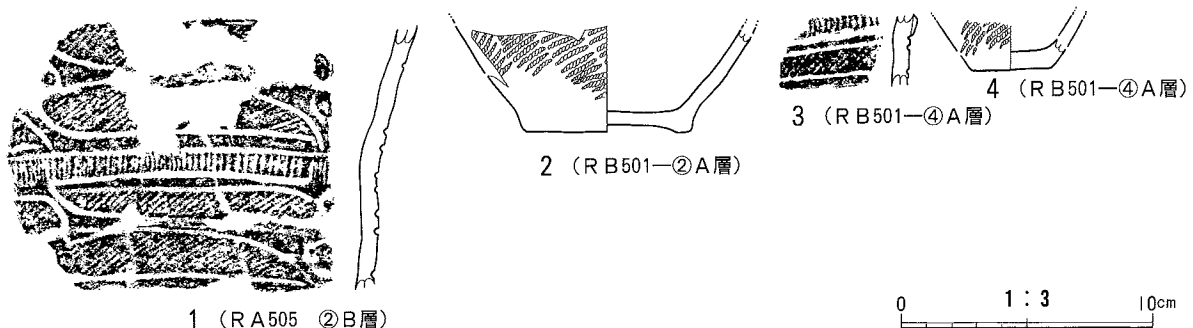
第23次調査で検出された遺構は、近世以降の竪穴1棟、土坑1基、その他柱穴である。出土第23次調査遺物も縄文時代の土器、平安時代の土師器片のほか近世の陶磁器片数点が出土しているのみである。検出された竪穴（RE802）は出土遺物等から、近接する第16次調査区で検出された近世以降の礎石建物跡や土坑と近接する時期と考えられる。また、出土した古代の遺物は第16次調査で検出された遺構と同様の時期のものと想定される。

第24次調査で検出された遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡1棟、縄文時代中期の土坑2基、第24次調査掘立柱建物跡1基、縄文時代後期の遺物包含層である。

これまでの調査で、調査区の南～南西側に縄文時代中期前葉の遺構・遺物が確認されており、当調査区で確認された掘立柱建物跡についても、縄文時代後期の竪穴住居跡や縄文時代中期の土坑に切られていることから同様の時期のものとしてとらえている。このことにより、付近の山麓緩斜面の縁辺には縄文時代前期末～中期前葉の集落が立地していたことが再確認された。

また、縄文時代後期末葉の竪穴住居跡も確認されたことから、縄文時代後期の集落が存在する可能性も出てきている。

【参考文献】 1989 盛岡市教育委員会「小山遺跡群」—昭和63年度発掘調査概報—



第17図 RA505竪穴住居跡、RB501掘立柱建物跡、出土遺物

3. 百目木遺跡（第12次調査）

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の位置と地形

遺跡の位置 百目木遺跡は盛岡市の中心から約7kmほど南側の三本柳字百目木地内に位置し、遺跡の東側は北上川が流れている。昭和53年の大型ショッピングセンター建設を契機に、遺跡周辺は各種開発が行われるようになり、盛岡市南部地域における商業の中心となっている。

地形 本遺跡の周辺は、北上川や雫石川の開析によって形成された低位沖積段丘面に立地しており、周辺は1～2mの比高差をもって北上川や雫石川の旧河道から画されている。

雫石川はかつて遺跡の西側から現矢巾町の徳田付近まで流下した痕跡が認められているほか、南から現河道に向かって河岸段丘が低くなっていることから、河道が北進したことが窺える。

また、細かな旧河道は複雑な河道の変遷を示しており、河道により分割された段丘面は河川の影響を常に受けざるを得ない不安定な土地であったことも窺える。

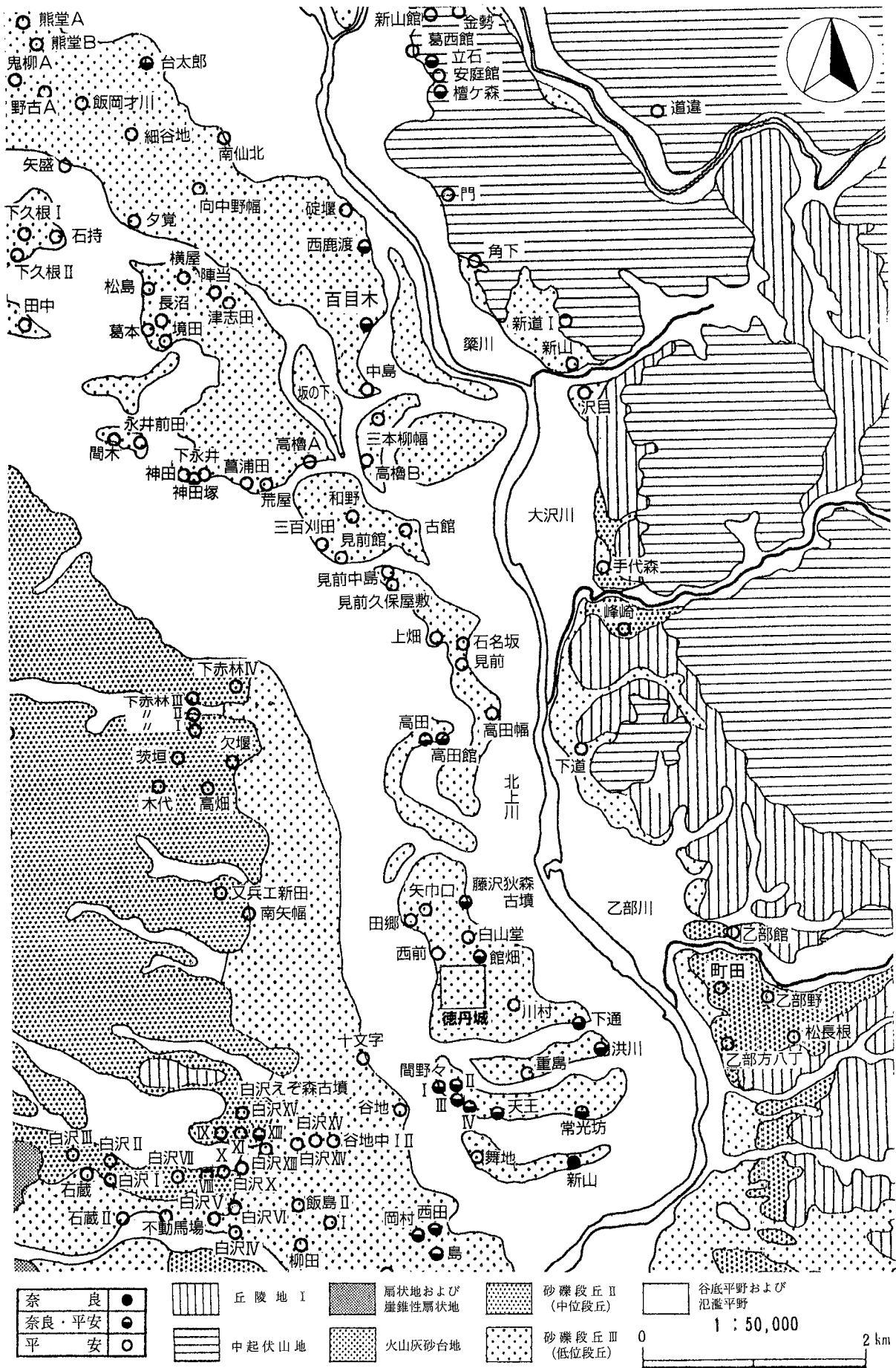
これらの沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、水成堆積のシルト層がそれを覆っている。このシルト層は雫石川によって周辺山地から運搬され、形成されたものである。なお、これらシルト層上面には黒色火山灰層や腐植土が堆積しており、現在の表土となっている。また、シルト層下面には上面高の一定しない砂礫層が確認されており、遺構底面で確認されるほか、検出面で礫層が露出している地点も確認されている。

遺構検出面は、大半が耕作や住宅建築等により削平を受けており、一般には表土直下のシルト面および砂礫層の面で遺構が検出される。遺構埋土は大半が自然堆積で、暗褐色～黒褐色土である。また、時期によっては粉状パミスが遺構埋土に混入している。これは、市内または付近における9世紀後半の集落遺跡には共通するものである。

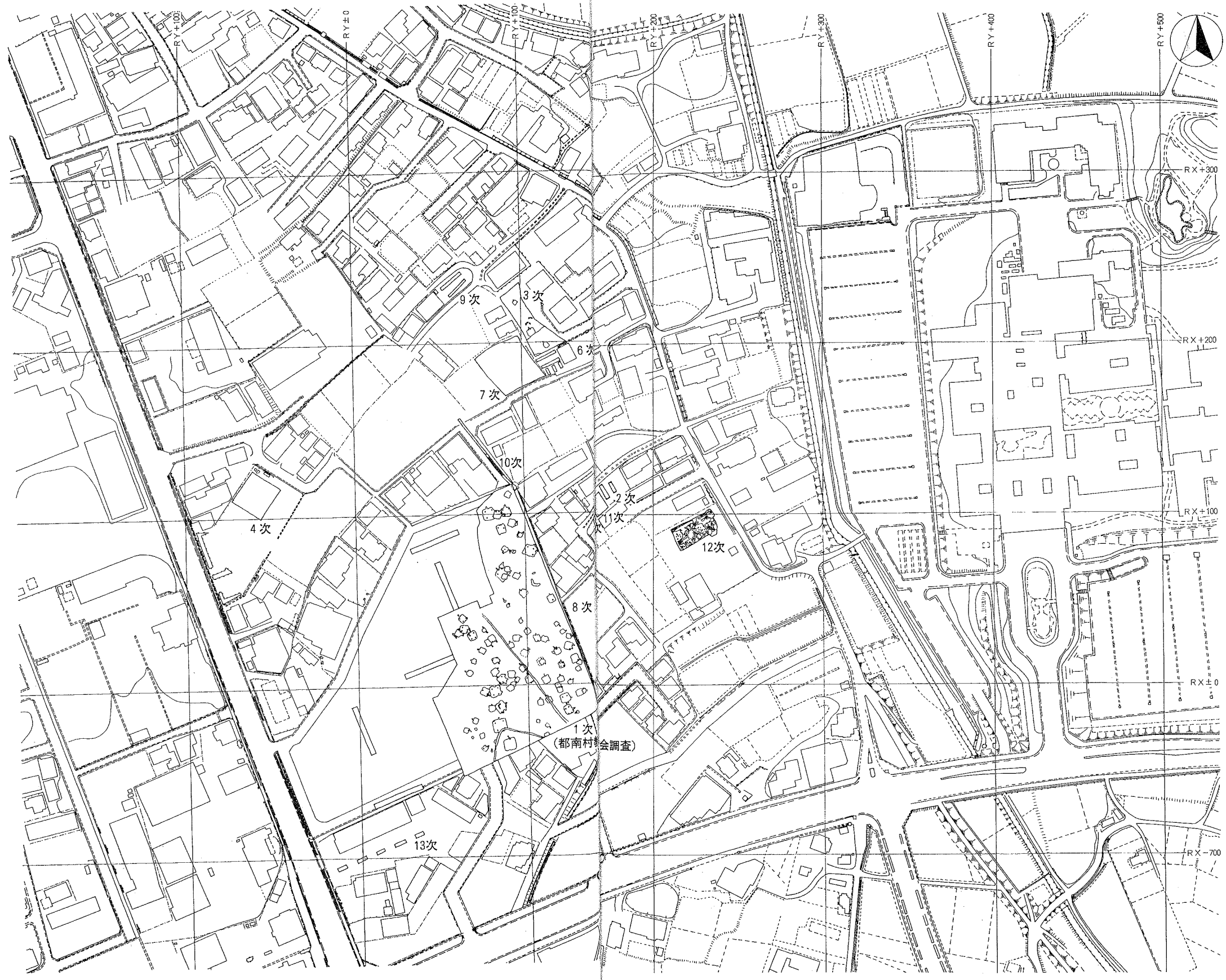
なお、当地区字名の百目木（どめき）は本来、「どうめき」や「どどめき」と川の水が急に流れる様子を形容した地名といわれており、市内でも三本柳のほか、羽場、永井、大ヶ生に見ることができる。当地については、北上川が雫石川や築川と合流し水量が多くなることからつけられた地名であると推される。

周辺には、北側に細かい旧河道を挟み碓堰遺跡・西鹿渡遺跡があり、南側には坂の上遺跡・中島遺跡・下永林遺跡のほか、現況では確認できないが、蕨手刀が採集された大道西古墳群が位置している。なお、百目木遺跡はこれら遺跡の中であって調査事例がもっとも多く、遺構も数多く検出されており、縄文時代、奈良～平安時代、近世に至る遺構・遺物が検出されている。

遺跡範囲については、これまで実施された立会調査や試掘調査・本調査の成果から東西350m、南北680mほどと想定している。



第18図 地形分類と周辺の遺跡



第19図 百目木遺跡 (1 : 2,500)

2 調査経過

(1) これまでの調査

当遺跡は古くから土師器や須恵器が表採される遺跡として知られていたが、昭和36年の草間俊一氏らによる分布調査により、北上川西岸の旧河道兩岸の微高地上が遺跡として確認されるに至った。その後、昭和53年に大型ショッピングセンター建設に伴う発掘調査が都南村教育委員会により実施され、調査区の全域で多数の縄文時代～奈良・平安時代の遺構が確認された。遺構数は、奈良～平安時代の竪穴住居跡80棟、土坑12基、溝跡2条などを検出し、当該遺跡が大規模な集落遺跡であることが認知された。

平成4年の盛岡市との合併に伴い、個人住宅新築をはじめとする小規模な開発行為の事前調査についても対応が開始され、平成5年度からは本格的な発掘調査も実施され、これまで13地点について試掘調査・本調査を実施した。

第1次調査区をはさんだ遺跡の東半部では第2・3・5～7・9～11次調査が実施されている。このうち、遺構が検出されているのが第3・5・10次調査で、平安時代の竪穴住居跡や土坑・溝跡等が検出されている。

第1次調査区を中心とした遺跡の西半部では、第4・8次調査が実施されている。このうち第1次調査区に隣接する第8次調査区では、平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。これら調査の結果から、遺構が検出される範囲は東西が第1次調査区から東側の北上川旧河道に至る250mほど、南北が第1次調査区を中心とした150mほどの範囲と想定される。

(2) 平成10年度の調査

平成10年度は第12次調査として個人住宅新築に伴う事前の発掘調査（本調査）を1件、第13次調査として試掘調査1件について対応した。そのうち、個人住宅新築分の第12次調査については国庫補助事業として調査を実施した。本書ではこの第12次調査を報告することとし、未報告分および第13次調査については別途報告とすることとしたい。

第12次調査 第12次調査区は、第1次調査区の東側約130mほどの地点に位置し、北上川旧河道によって調査区の南～東側は比高差1～2mをもって画されている。

検出された遺構は、奈良時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の竪穴住居跡7棟、近世以降の掘立柱建物跡2棟、土坑5基を検出し、それらに伴う土師器・須恵器、近世以降の陶磁器などが出土した。

第13次調査 第13次調査は、店舗新築に伴うもので、調査区は国道4号線と主要地方道上米内湯沢線との交差点付近に位置している。建築申請範囲内に試掘トレンチを5本設定し、遺構の検出作業を行ったが、遺構・遺物はともに検出されていない。

百目木遺跡の調査成果

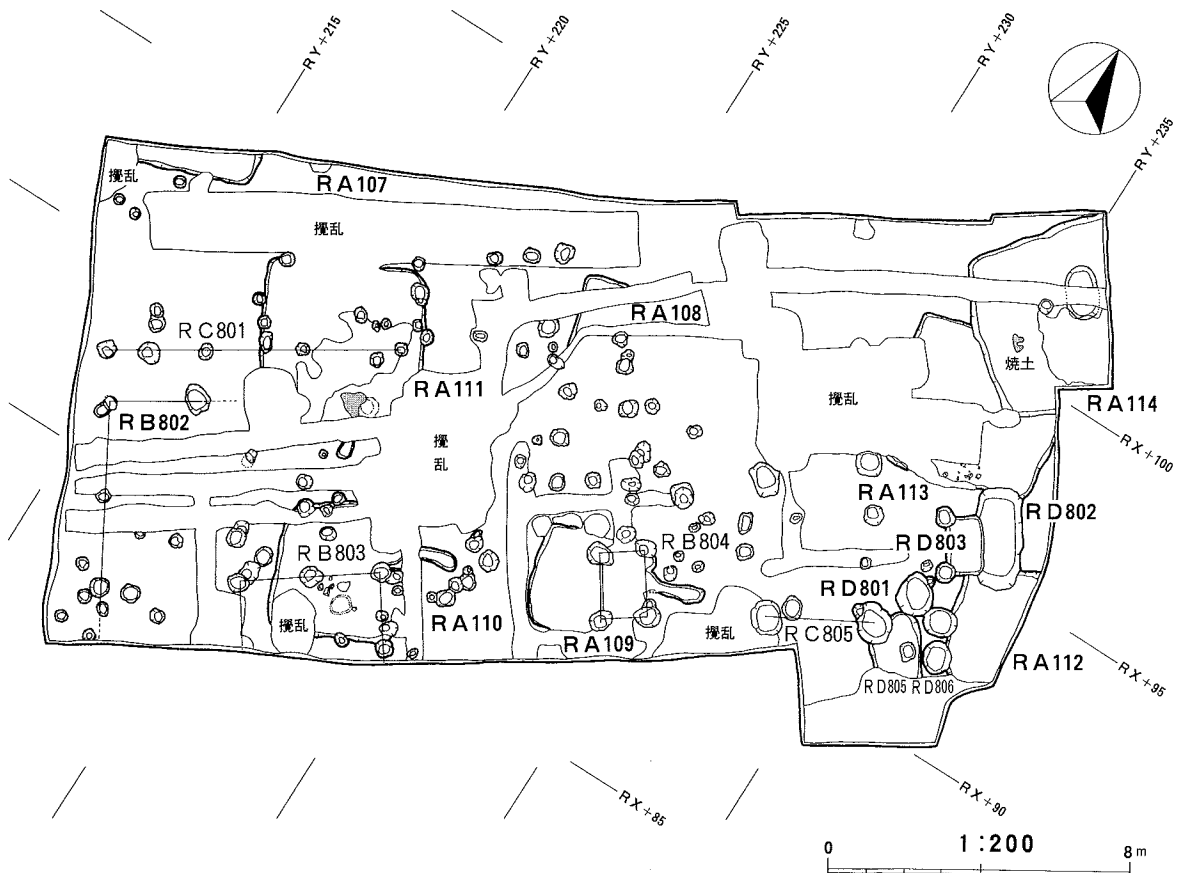
次数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期間	検出遺構・遺物
1	三本柳 5 地割21ほか	店舗新築	9,000	78. 3. 10 78. 10. 12	奈良・平安時代の竪穴住居跡80棟ほか (都南村教育委員会調査)
2	三本柳 5 地割35-7	住宅新築	34	93. 9. 8	遺構・遺物なし
3	三本柳 5 地割13-2	住宅新築	652	94. 9. 22 94. 10. 12	奈良・平安時代の竪穴住居跡 3 棟、土坑 5 基
4	三本柳 5 地割 2 - 1	店舗新築	399	95. 2. 23	遺構・遺物なし
5	三本柳 5 地割35-9	住宅新築	119	95. 7. 12 95. 7. 17	平安時代の竪穴住居跡 1 棟、溝跡 3 条
6	三本柳 5 地割13-4	住宅新築	56	95. 12. 7	遺構・遺物なし
7	三本柳 5 地割 6 - 1	住宅新築	100	96. 5. 13	遺構・遺物なし
8	三本柳 5 地割57. 60. 61	下水道管敷設	200	96. 9. 4 96. 9. 7	平安時代の竪穴住居跡 2 棟、土坑 1 基
9	三本柳 4 地割14-8 15-6	住宅新築	43	96. 11. 21	遺構・遺物なし
10	三本柳 5 地割 6 - 1	下水道管敷設	56	96. 11. 25 96. 11. 27	畝状遺構
11	三本柳 5 地割35-8	住宅新築	150	97. 4. 20	遺構・遺物なし
12	三本柳 5 地割35-8	住宅新築	288	98. 10. 5 98. 11. 5	奈良時代の竪穴住居 1 棟、平安時代の竪穴住居跡 7 棟、近世以降の掘立柱建物跡 1 棟、土坑 3 基
13	三本柳 5 地割25-15	店舗新築	38	99. 1. 26	遺構・遺物なし

3 調査内容

(1) 奈良・平安時代の遺構、遺物

RA107竪穴住居跡（第21図）

- 位置 調査区北西部。 平面形 方形。
- 主軸方向 不明。 規模 東西3.5m、南北2m以上
- 検出状況 掘込面一削平により不明。 検出面一表土直下褐色シルト面および砂礫層上面。
- 埋土 自然堆積で層相の違いによりA～Bの2層に大別される。A層は、黒～黒褐色土を主体とし、黄褐～褐色土を粒状に含む層、B層は暗褐色土を主体とし、黄褐～褐色土をA層よりも多く含む層である。床面構築土（C層）は地山砂礫層直上に黄褐～褐色シルトと黒褐色土の混合土によるもので、堅くしまりがある層相である。
- 壁の状態 壁は上方に向かいやや広がりをもつもので、検出面から床面までの深さは0.2～0.25mほどをはかる。
- 床の状態 床面はほぼ平坦で、一部に礫層がみられるが、構築土はほぼ全面に確認されている。層厚は0.01～0.05mをはかる。なお、柱穴や貯蔵穴等は見られない。



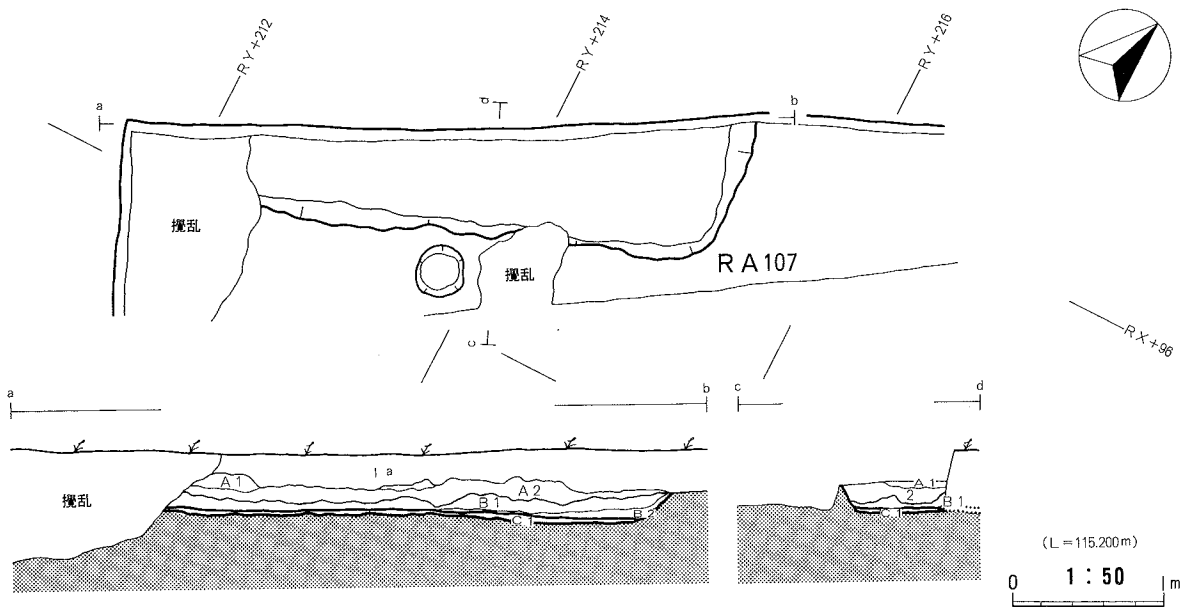
第20図 百目木遺跡第12次調査区全体図

かまど 未検出。

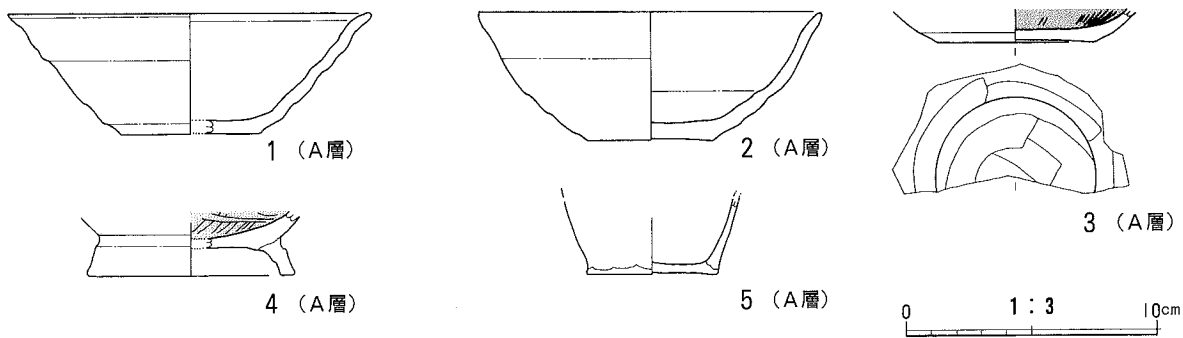
遺物 遺物（第22図1～5）は、埋土中からの出土である。1は須恵器坏で、底部が回転糸切り無調整のものである。2はあかやき土器坏で、これも底部は回転糸切り無調整である。3は土師器坏で、底面には回転糸切り後に底部～体部下半に手持ちのヘラケズリが施され、内面には黒色処理後にヘラミガキが施されている。4は土師器の高台付坏で、内面が黒色処理された後にヘラミガキが施されるものである。5は土師器小形甕の体部下半～底部である。

RA108竪穴住居跡（第23図）

位置 調査区北西部。 平面形 方形。（竪穴住居跡北西部のみ残存）



第21図 RA107竪穴住居跡

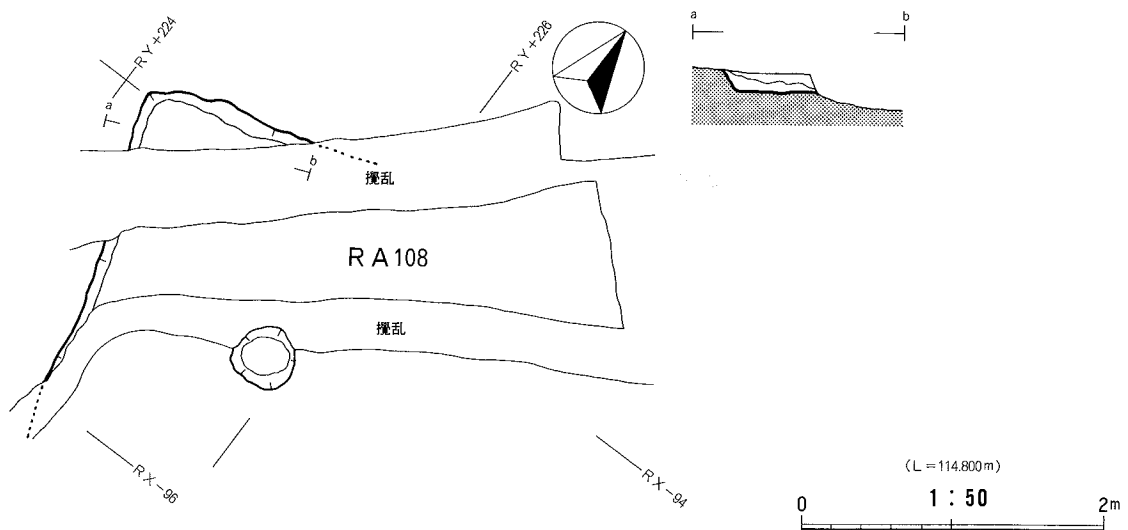


第22図 RA107竪穴住居跡出土遺物

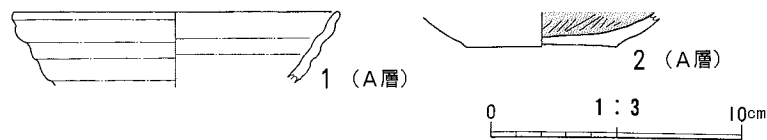
主軸方向 不明。 規 模 一辺2m以上。
 検出状況 掘込面—削平により不明。 検出面—表土直下褐色シルト面および砂礫層上面。
 埋 土 自然堆積で、黒～黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含むA層のみである。
 壁の状態 壁は上方に向かいやや広がりをもつもので、検出面から床面までの深さは0.11～0.13mほどをはかる。
 床の状態 残存する床面はほぼ平坦であるが、大部分が攪乱および削平を受けている。一部に礫層がみられ、構築土は確認されていない。また、柱穴や貯蔵穴等もみられない。
 かまど 未検出。
 遺 物 遺物(第24図1・2)は埋土中からの出土である。1は須恵器杯の口縁部～体部上半の破片、2は土師器杯の底部で、内面に黒色処理を施した後にヘラミガキが施されるものである。

RA109竪穴住居跡(第25図)

位 置 調査区南西。 平面形 方形。 新旧関係 RB802掘立柱建物跡に切られる。
 主軸方向 E20°S。 規 模 東西2.8m、南北2.76m。
 検出状況 掘込面—削平により不明。 検出面—表土直下褐色シルト面および砂礫層上面。
 埋 土 自然堆積で、層相からA・Bの2層に大別される。A層は黒～黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含む層。B層は暗褐色土を主体とし、黄褐～褐色土を粒状に含む層である。



第23図 RA108竪穴住居跡



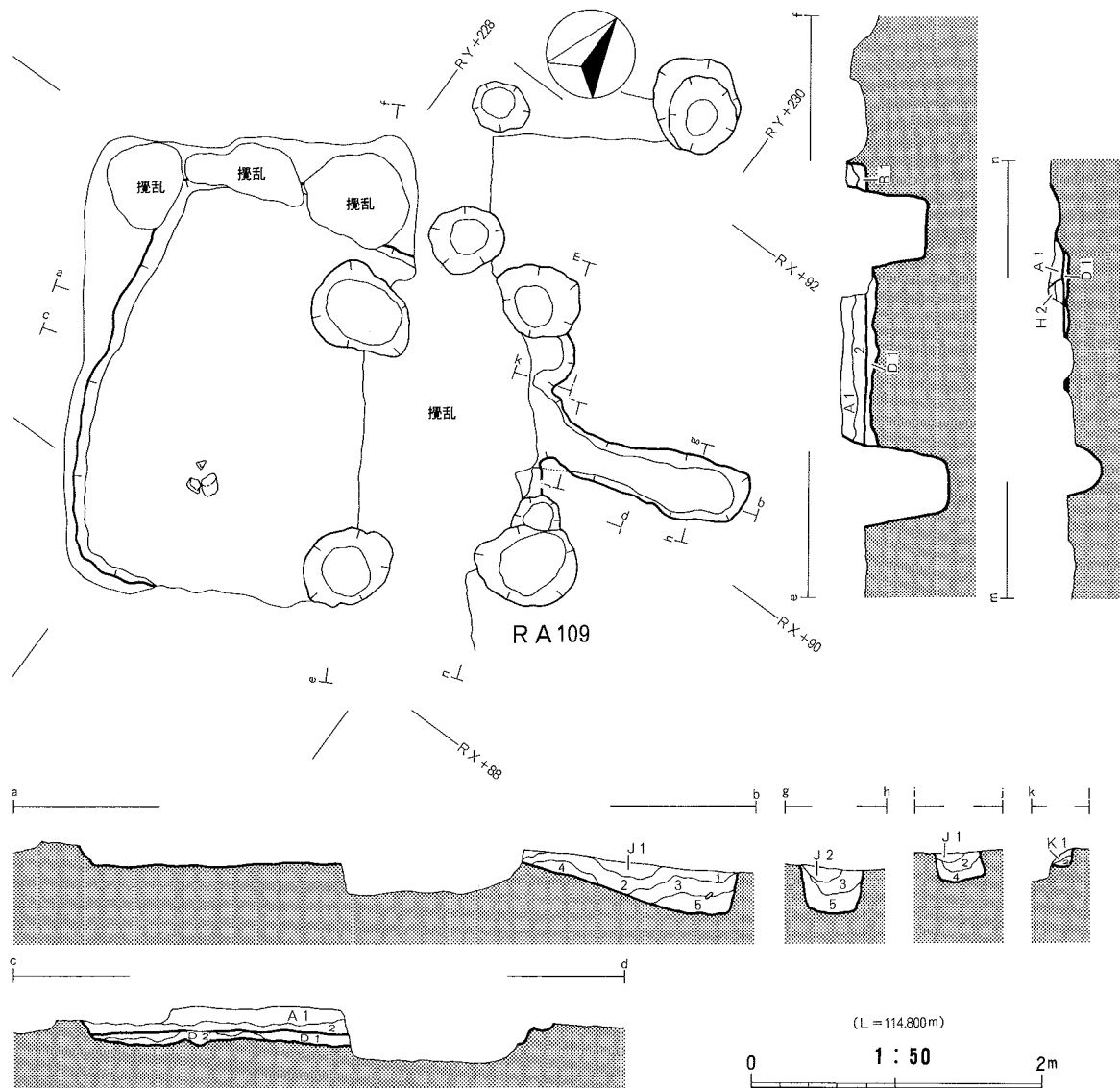
第24図 RA108竪穴住居跡出土遺物

壁の状態 壁は上方に向かいやや広がりをもつもので、検出面から床面までの深さは0.25～0.28mほどをはかる。

床の状態 床面はほぼ平坦で、一部に礫層がみられる。構築土は黄褐色～褐色のシルトに若干の黒褐色を含む。層厚は0.08～0.2mをはかり、構築面には若干の起伏がある。柱穴はみられない。

かまど かまどは東壁中央部に構築されている。煙道平面形は溝状を呈し、底面は東側壁際から徐々に深くなり、煙出し部が最も深くなっている。東壁から煙出し先端までの長さは1.6m、幅0.32～0.48m、深さ0.22～0.56mをはかる。そでは攪乱を受けており、北側の一部のみが残存しているのみである。褐色～黄褐色シルト混合土により構築されている。規模は長さ0.15m、幅0.1～0.17mをはかる。なお、火床面は残存しない。

遺物 遺物（第26図1～8）は埋土およびかまど周辺、煙道からの出土である。1～5はあかやき土器坏で、ロクロにより成形され、底部は回転糸切り無調整である。なお、口縁部は外反する

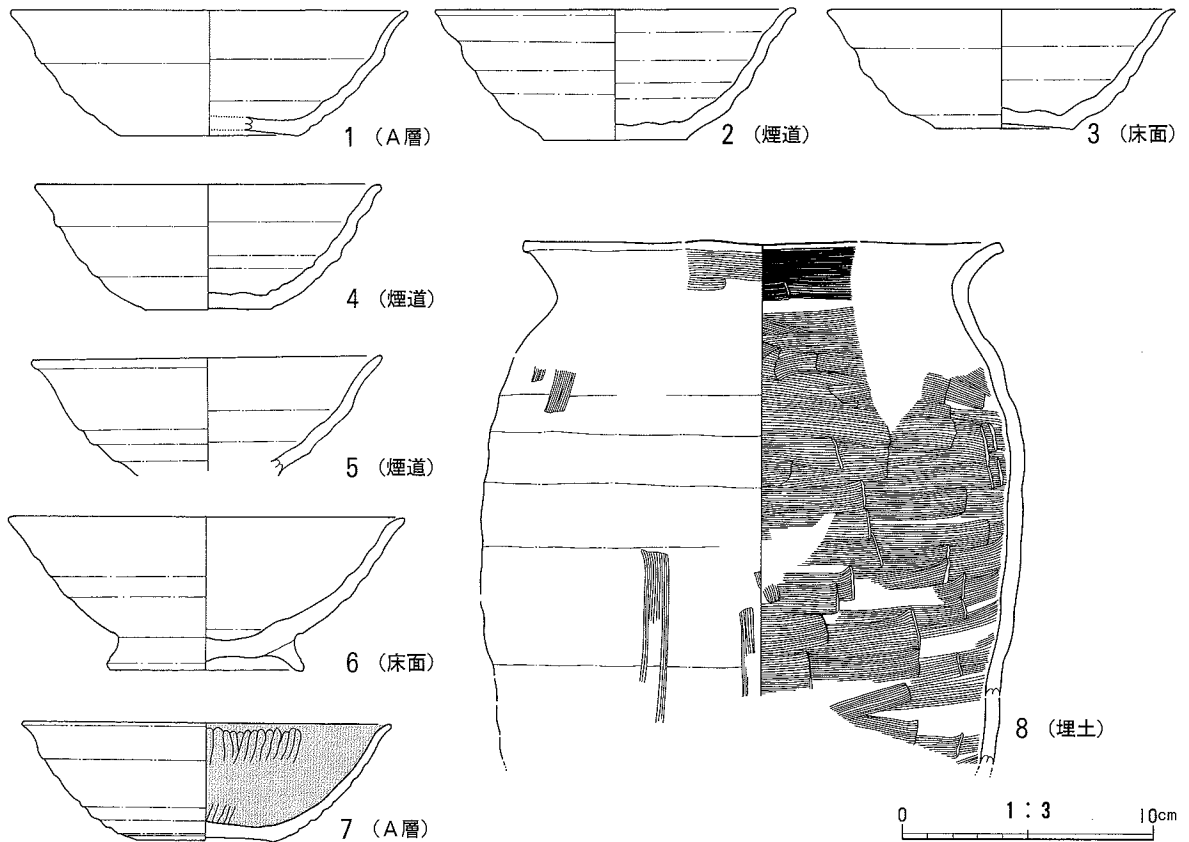


第25図 R A 109 竪穴住居跡

ものである。6はあかやき土器高台付坏である。ロクロ成形で高台は回転糸切り後にナデツケにより接着されている。7はロクロ成形の土師器坏で、底部は回転糸切り無調整である。内面には摩滅して一部が不鮮明であるが黒色処理およびヘラミガキが施されている。8は土師器甕で、口唇部と口縁部内面に丹塗が施されているものである。器面調整は、口縁部内外面にヨコナデを施し、外面の一部に縦方向のヘラナデが施され、内面には横方向のヘラナデが施される。

RA110竪穴住居跡（第27図）

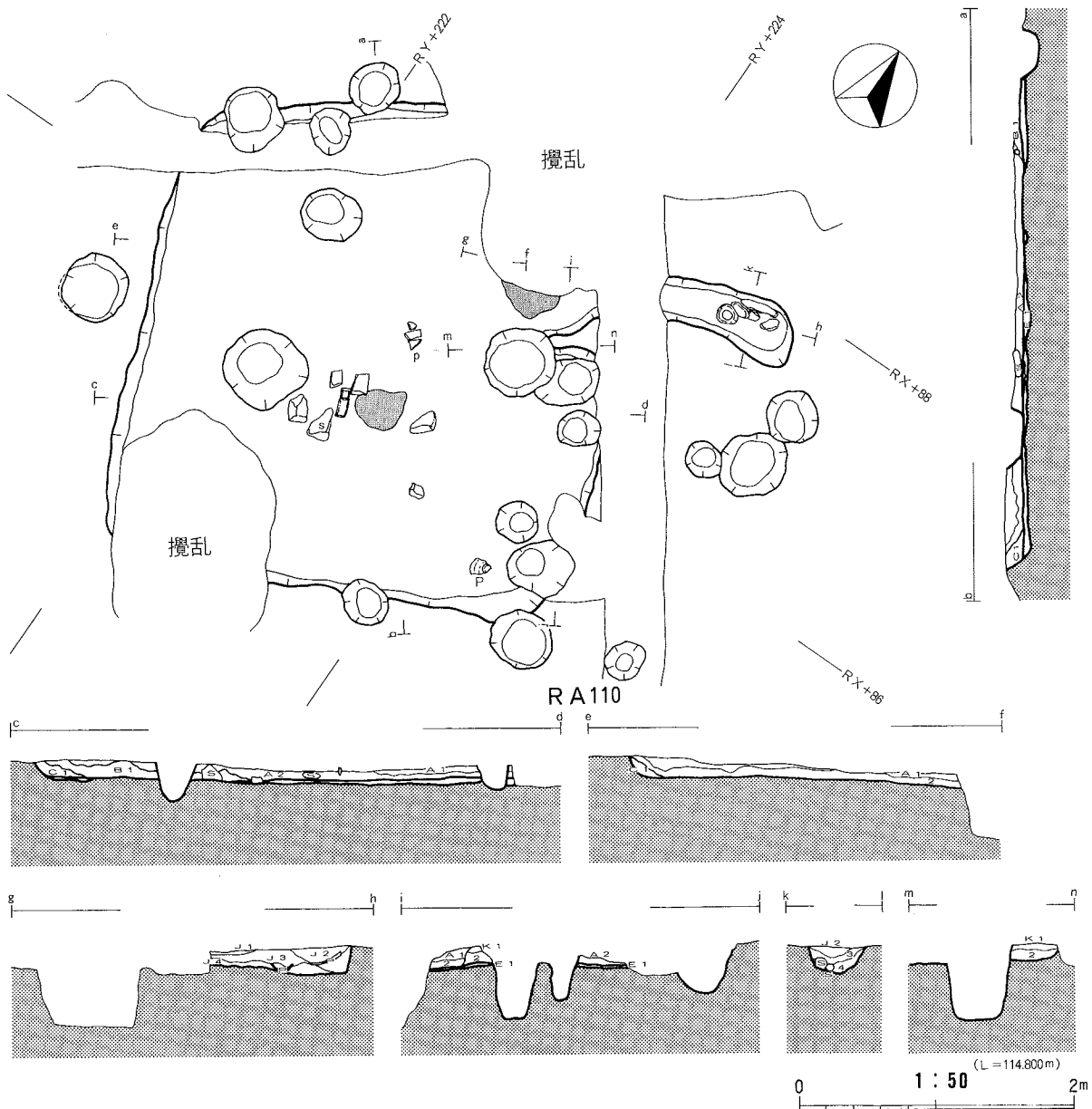
- 位置 調査区中央南側。 平面形 方形。
- 新旧関係 RB801掘立柱建物跡に切られる。 主軸方向 E25° S。
- 規模 東西3.5m、南北3.6m。
- 検出状況 掘込面—削平により不明。 検出面—表土直下褐色シルト面および砂礫層上面。
- 埋土 自然堆積で、層相からA～Cの3層に大別される。A層は黒～黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含む層。B層は暗褐色土を主体とし、黄褐～褐色土を粒状に含む層である。C層は、黒褐色土を主体とし、黄褐～褐色土を粒状に多量に含む層である。
- 壁の状態 削平を受けているため、残存していない箇所もあるが、検出面から床面までの深さは0.08～0.1mほどをはかる。
- 床の状態 床面はほぼ平坦で、構築面の他一部に礫層がみられるほか、堅い面もみられた。構築土は黄



第26図 RA109竪穴住居跡出土遺物

褐色～褐色のシルトに若干の黒褐色を含むもので、層厚は0.05～0.1mをはかり、構築面は砂礫層でほぼ平坦である。なお、かまど火床面下からピット1口を検出している。その他にも柱穴（ピット）が散在するが埋土の状況などから後世のものにとらえている。

かまど かまどは東壁北寄りに構築されている。煙道平面形は溝状を呈し、底面は東側壁より深くなり、煙出し部が最も深くなる。東壁から煙出し先端までの長さは1.04m、幅0.34～0.45m、深さ0.1～0.2mをはかる。そでは南側のみが残存しており、褐色または黄褐色土の混合土により構築されている。残存する長さは0.37m、幅0.08～0.25mを確認している。また、そでの内側に火床面を確認している。攪乱を大きく受けており、残存状況は良くないが焼土の厚さは0.01～0.02mをはかる。

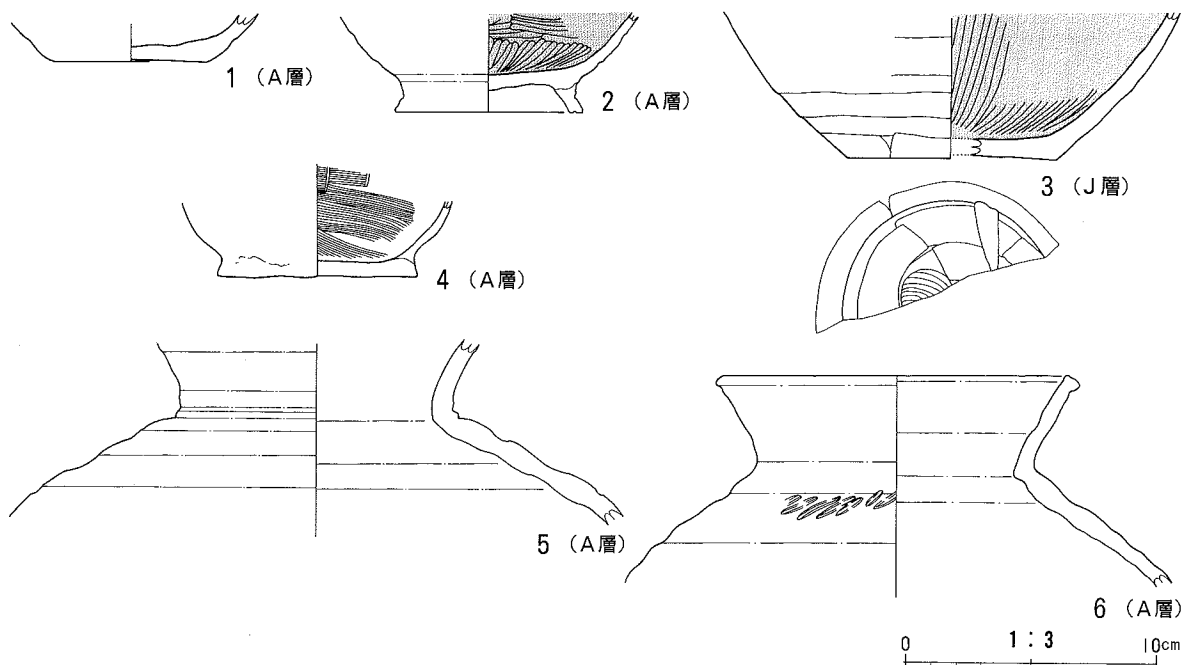


第27図 RA 110 竪穴住居跡

遺物 遺物（第28図1～6）は埋土および煙道からの出土である。1はあかやき土器環の底部で、ロクロ成形で、回転糸切り無調整のものである。2は土師器高台付環で、ロクロ成形で底部を回転糸切りにより切り離した後高台を接着しているものである。3はロクロ成形の土師器碗で、底部～体部下半にはは回転糸切り後に手持ちヘラケズリが施され、体部下半には回転ヘラケズリが施されている。なお、内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。4は土師器甕で、内面に横方向のヘラナデが施されているものである。5は須恵器甕の口縁部～体部上半の破片で、内面にロクロナデが施されるものである。6は須恵器壺の口縁部～体部上半の破片で、外面の体部上半の一部にタタキを施し、その後にロクロによる整形が内外面に施されるものである。

RA111竪穴住居跡（第29図）

位置 調査区中央西寄り。 平面形 方形。
 主軸方向 S25°E。 規模 東西4.35m、南北4.3m。
 検出状況 掘込面一削平により不明。 検出面一表土直下褐色シルト面および砂礫層上面。
 埋土 自然堆積で、暗褐色土を主体とし、黄褐～褐色土を粒状に含むA層からなる。
 壁の状態 壁は上方に向かいやや広がりをもつもので、検出面から床面までの深さは0.08～0.15mほどをはかる。
 床の状態 床面はほぼ平坦で、構築面の他一部に礫層がみられる。構築土は黄褐色～褐色のシルトに若干の黒褐色を含むもので、層厚は0.08～0.1mをはかり、構築面はほぼ平坦である。なお、床面に柱穴が散在するが埋土の状況などから後世のものにとらえている。
 かまど かまどは南壁やや東寄りに構築されていたようであるが攪乱を受けているため、煙道および火床面が残存している。煙道は長さ0.45m、幅0.3～0.35m、深さ0.27～0.32mをはかる。火床



第28図 RA110竪穴住居跡出土遺物

面は煙道延長の壁内に不整形に検出されており、焼土は厚さ0.01~0.03mを確認している。

遺物 遺物は十数点が出土しているが、いずれも小破片のため図示はできなかった。

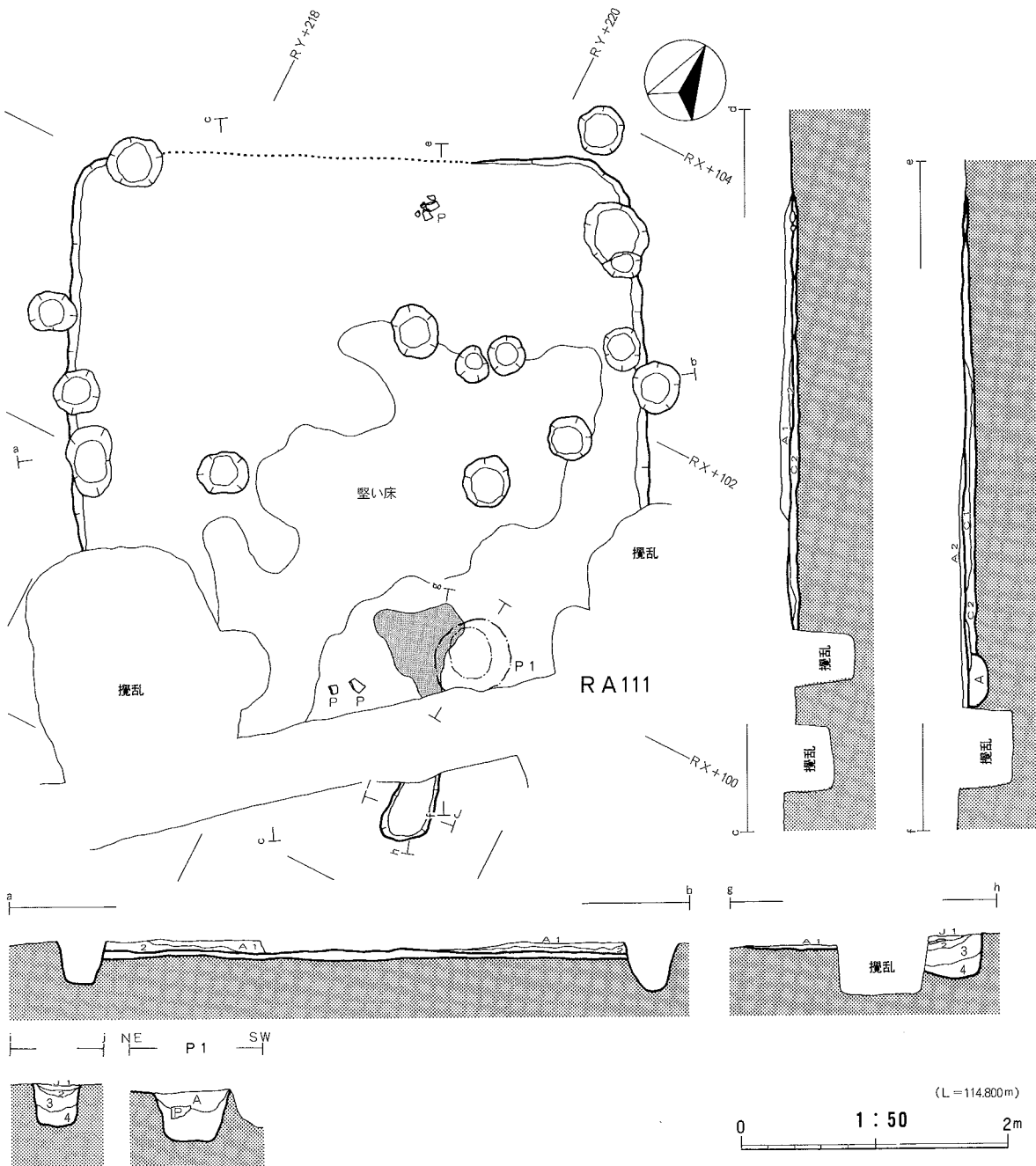
RA112竪穴住居跡 (第30図)

位置 調査区南東隅。 平面形 方形ないし長方形。

新旧関係 西側をRD802、803土坑に切られ、南側をRD804、805土坑に切られる。

主軸方向 不明。 規模 2.2m以上、南北3.3m以上。

検出状況 掘込面一削平により不明。 検出面一表土直下褐色シルト面および砂礫層上面。

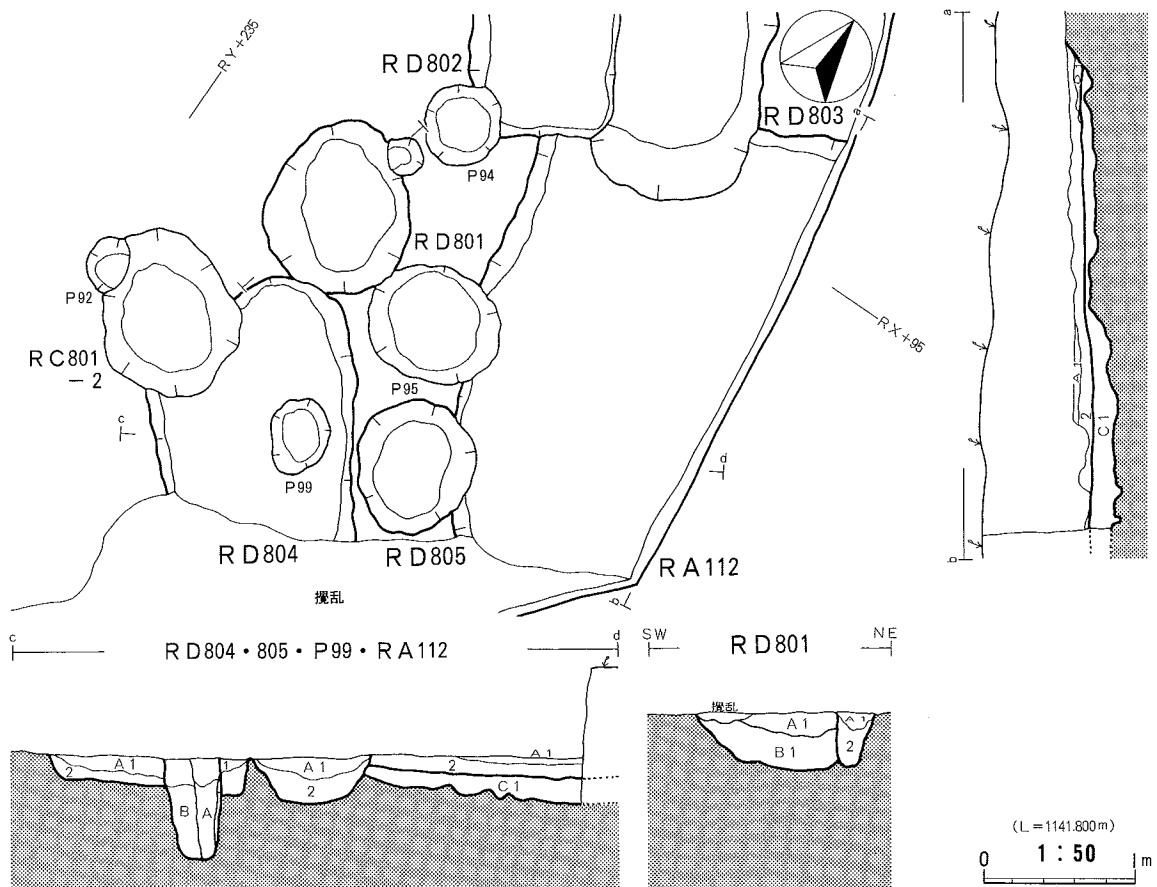


第29図 RA111竪穴住居跡

- 埋 土 自然堆積で、暗褐色土を主体とし、黄褐～褐色土を粒状に含むA層からなる。
- 壁の状態 壁は上方に向かいやや広がりをもつもので、検出面から床面までの深さは0.08～0.15mほどをはかる。
- 床の状態 床面はほぼ平坦で、構築面の他一部に礫層がみられる。構築土は黄褐色～褐色のシルトに若干の黒褐色を含むもので、層厚は0.03～0.2mをはかり、構築面はほぼ平坦である。
- かまど 未検出。
- 遺 物 遺物は十数点が出土しているが、いずれも小破片のため図示はできなかった。

RA113竪穴住居跡（第31図）

- 位 置 調査区北東部。 平面形 方形。
- 新旧関係 北東側の壁をRA114竪穴住居跡に切られ、南壁をRD803土坑に切られている
- 主軸方向 不明 規 模 東西4.2～4.5m、南北4.1～4.2m
- 検出状況 掘込面一削平により不明。 検出面一表土直下褐色シルト面および砂礫層上面。
- 埋 土 自然堆積で、層相によりA・B 2層に大別される。A層は暗褐色土を主体とし、黄褐～褐色土を粒状に含む。B層はA層と同様に暗褐色土を主体としているが、黄褐～褐色土を粒状に多く含む層相である。

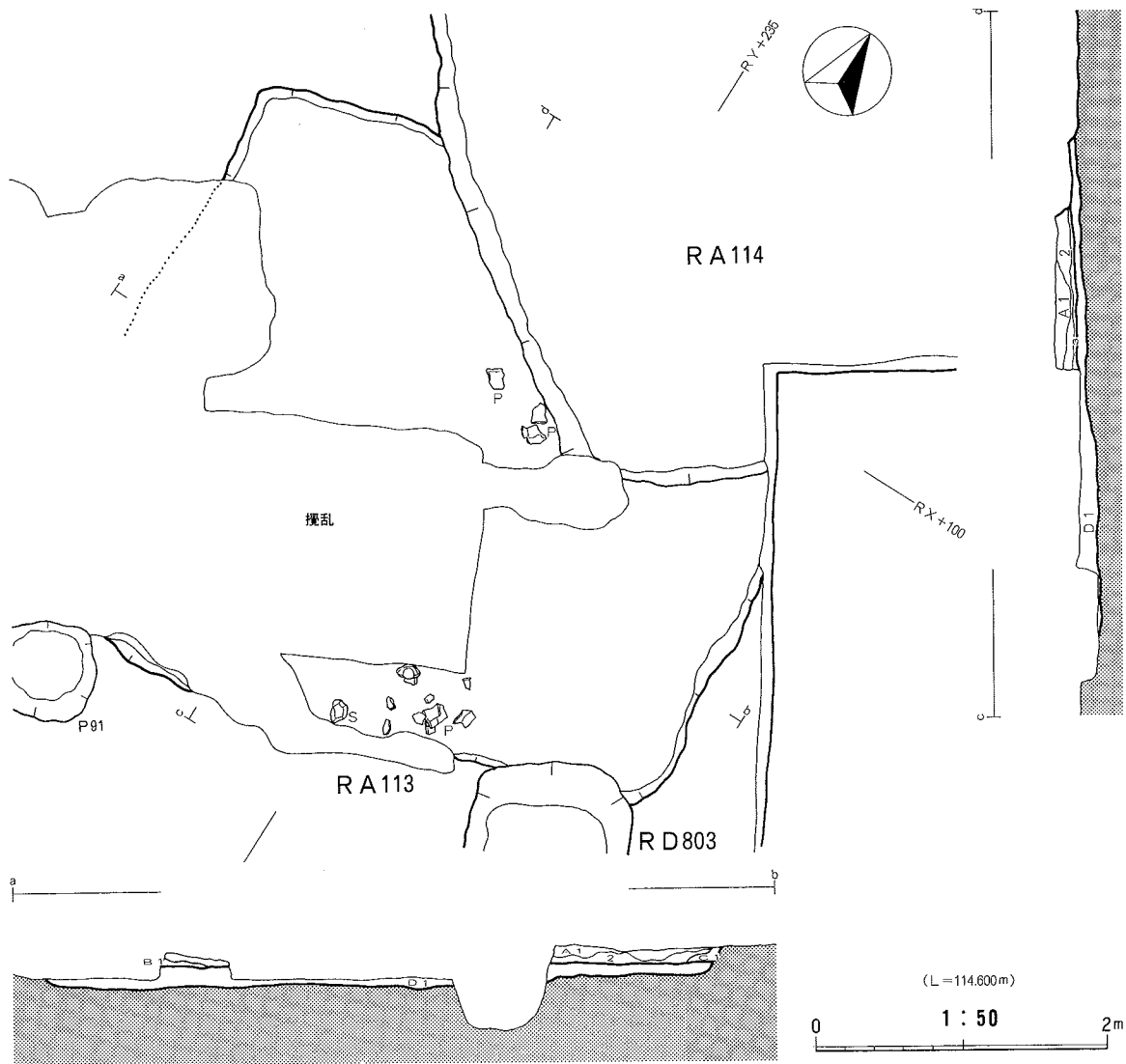


第30図 RA112竪穴住居跡、RD801・804・805土坑

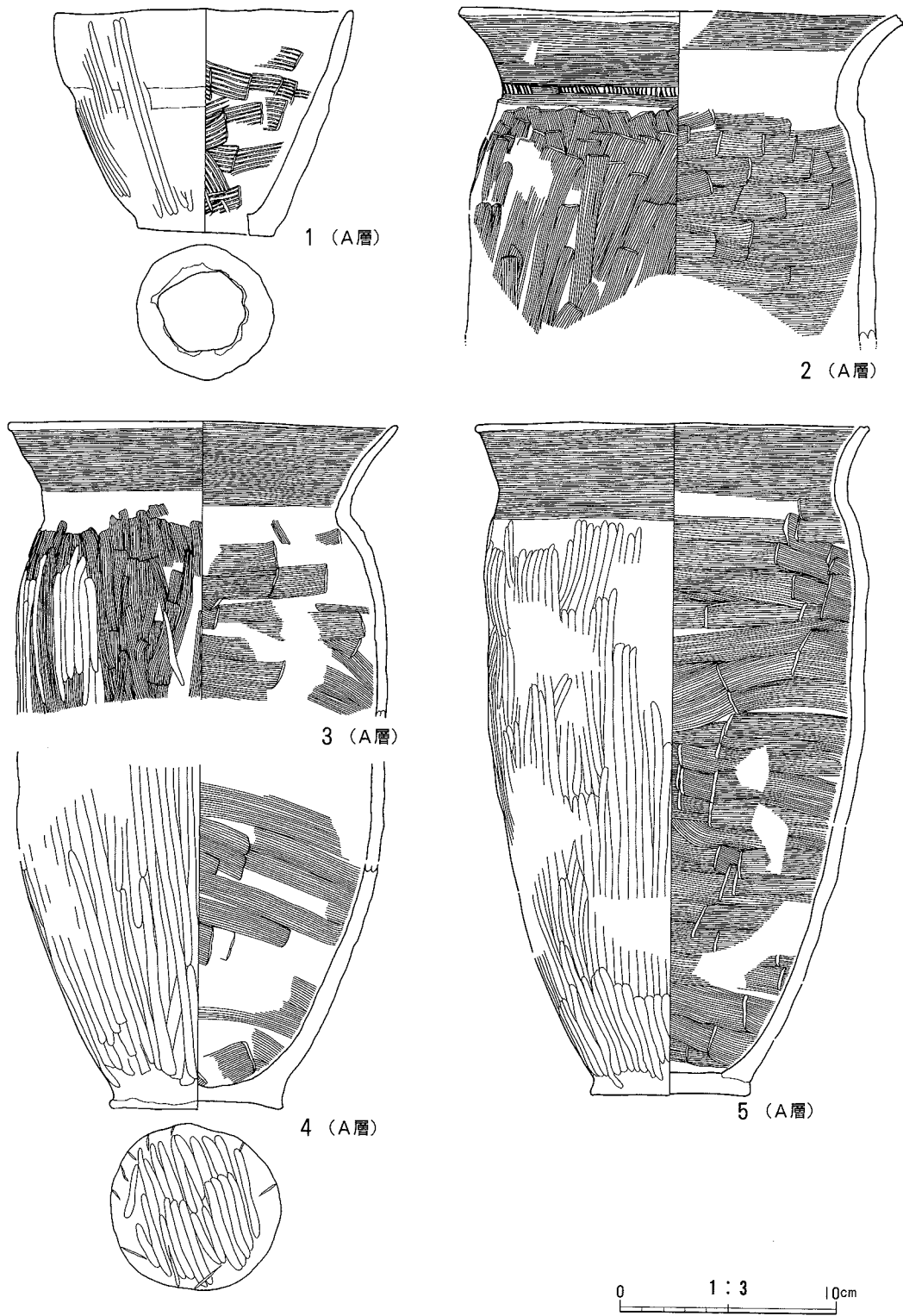
壁の状態 壁は上方に向かいやや広がりをもつもので、検出面から床面までの深さは0.08～0.15mほどをはかる。

床の状態 床面は平坦で、顕著な起伏は認められない。床構築土（C層）は褐色シルトと黄褐色シルトの混合土に若干の暗褐色土が混入している。なお、床面は平坦で、構築土の層厚は0.03～0.15mをはかる。

遺物 遺物（第32図1～5）は埋土および床面からの出土である。1は土師器甕で、底部の孔は焼成前にあけられたものである。体部外面に縦方向のヘラミガキ、内面には横方向のハケメ調整が施される。2～5は土師器長胴甕である。2は口縁部～体部上半を残すもので、口縁部下に段をもつものである。器面調整は口縁部の内外面にヨコナデを施すが、口縁部外面は縦方向のハケメ調整の後にヨコナデが施されている。また、外面の口縁部下からは縦方向のヘラナデが施され、内面には横方向のヘラナデが施されている。3も口縁部～体部上半を残すもので、口

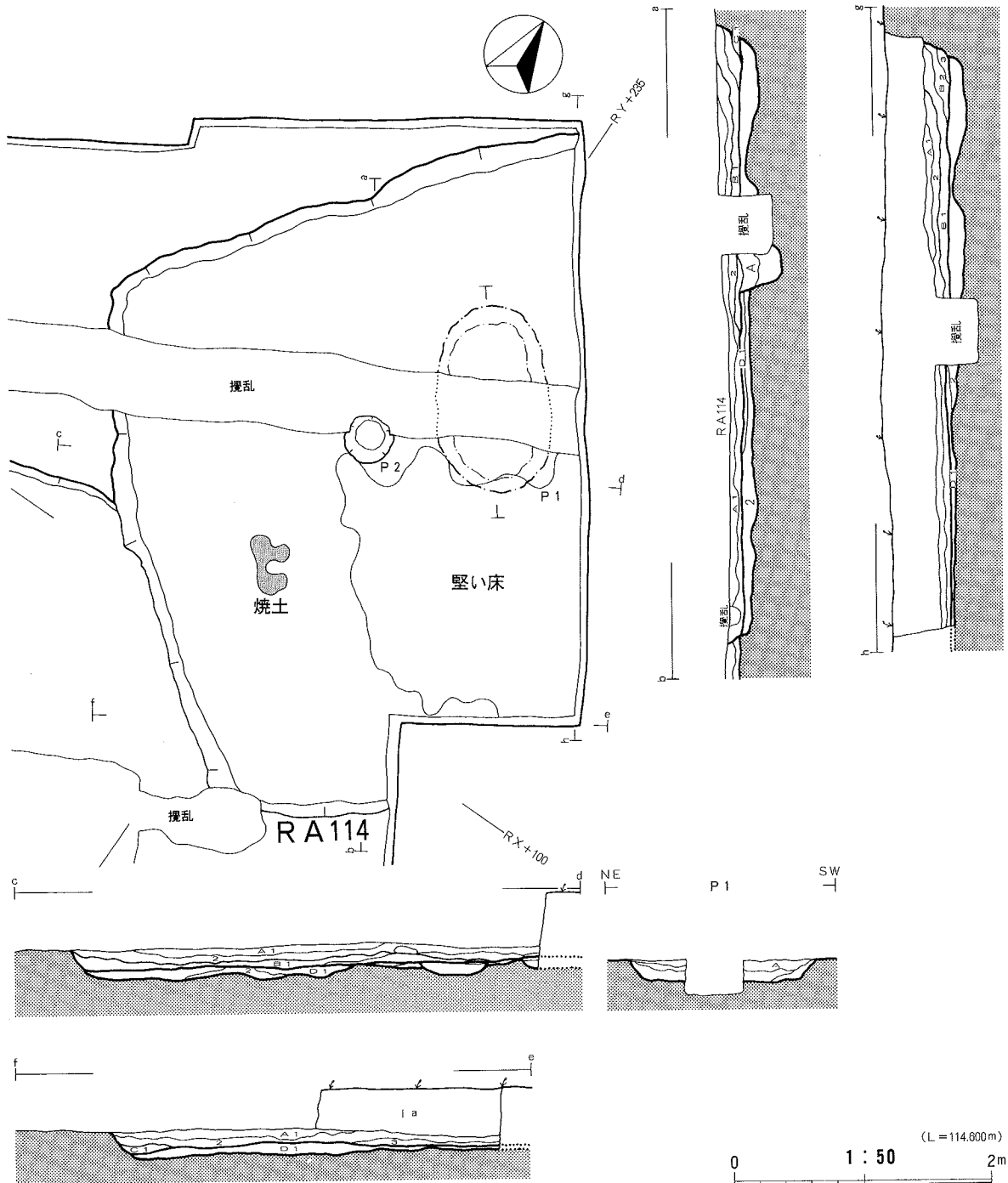


第31図 RA113竪穴住居跡



第32図 R A 113 竪穴住居跡出土遺物

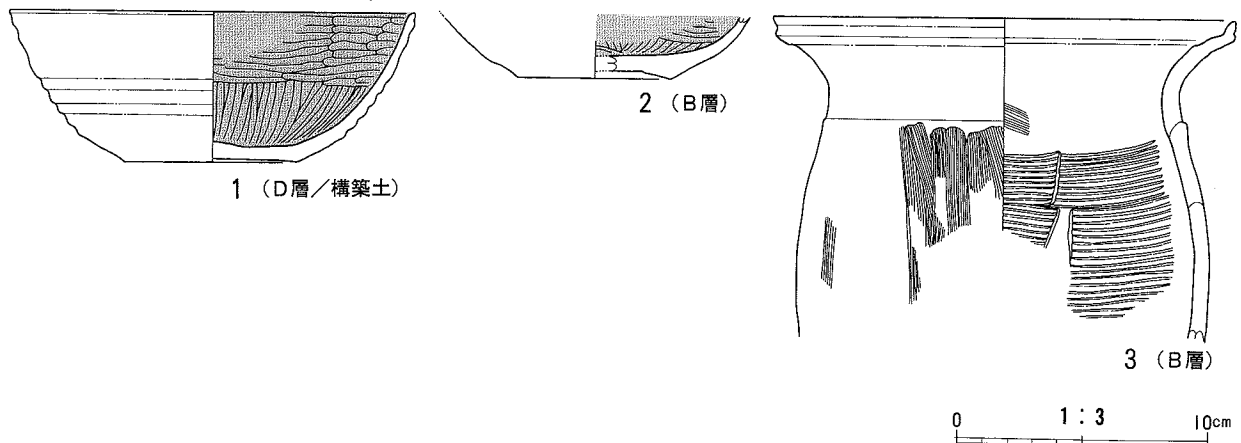
縁部の内外面にヨコナデが施されているほか、体部外面には縦方向のヘラナデが施された後に縦方向のヘラミガキが施されている。また、体部内面には横方向のヘラナデが施されている。4は体部下半から底部を残すもので、体部には縦方向のヘラミガキが施され、内面には横方向のヘラナデが施されている。また、底部にもヘラミガキが施されている。5は口縁部の内外面にヨコナデを施し、体部外面には縦方向のヘラミガキを施している。また、体部内面には横方向のヘラナデが施されている。



第33図 RA114 竖穴住居跡

RA114竪穴住居跡（第33図）

- 位置 調査区北東隅。 平面形 方形ないし長方形。
- 新旧関係 西側にあるRA113竪穴住居跡を切っている。
- 主軸方向 不明。 規模 東西4.2m以上、南北4.55～4.6m。
- 検出状況 掘込面一削平により不明。 検出面一表土直下褐色シルト面および砂礫層上面。
- 埋土 埋土は自然堆積で、層相の違いによりA～Cの3層に大別される。A層は黒褐～暗褐色土を主体とし、褐色～黄褐色土を粒状に若干含む層、B層は暗褐色土を主体とし、A層と同じく黄褐～褐色土を粒状に含んでいる。C層は暗褐色土を主体としているが、褐色～黄褐色土を多く含む層相である。
- 壁の状態 壁は上方に向かいやや広がりをもつもので、検出面から床面までの深さは0.1～0.2mほどをはかる。
- 床の状態 床面はほぼ平坦で、顕著な起伏はみられない。床構築土（D層）は、褐色シルトと黄褐色シルトの混合土に若干の暗褐色土が混入している。なお、一部に起伏があり、堅い面がみられる。また、構築面は凹凸が顕著にみられ、構築土の厚さは0.01～0.15mをはかる。また、層厚2cmほどの焼土がみられる。
- ピット ピットは床面に2口を確認している。2口とも床面で検出されたもので、P₁は小判形を呈しており、東西0.8m、南北1.4mをはかり、床面からの深さは0.15mをはかる。埋土は、暗褐色土に多量の褐色土を粒状に含んでおり、軟らかい。P₂は平面形円形を呈し、直径0.38m、床面からの深さ0.32mをはかる。埋土は黒～黒褐色を呈し、ややしまりのある層相を呈する。
- かまど 未検出
- 遺物 遺物（第34図1～3）は、埋土および構築土中からの出土である。1～2は土師器坏で、内面に黒色処理を施し、ヘラミガキを施している。また、底部は回転糸切り無調整である。3はあかやき土器長胴甕で、口縁部～体部上半を残すものである。口唇部に若干上方への立ち上がりを見せるもので、体部外面には縦方向のヘラナデが施され、内面には横方向のハケメ調整が施されている。



第34図 RA114竪穴住居跡出土遺物

(2) 近世以降の遺構

近世以降の遺構としては、掘立柱建物跡が2棟、柱列2条、土坑5基、その他柱穴が99口検出されている。なお、柱穴については調査区内で攪乱が著しく、柱穴が損なわれているものが多数あることや、調査区外にも多く広がりをもつことが想定されるため、今次調査区内で掘立柱建物跡として認識できなかったものも存在するものと思われる。

RC801柱列（第35図）

位 置 調査区西半 主軸方向 W40°S 新旧関係 不明
検 出 面 削平された褐色シルト面
規 模 柱間が2.7m（約9尺）をはかり、3間分を確認している。
柱 穴 直径は0.35m～0.5m、検出面からの深さは0.2～0.35mをはかる。埋土は、黒～黒褐色土を主体とした柱痕跡（A層）と、黒～暗褐色土に褐色土を含む掘方（B層）からなる。
出土遺物 なし

RB802掘立柱建物跡（第35図）

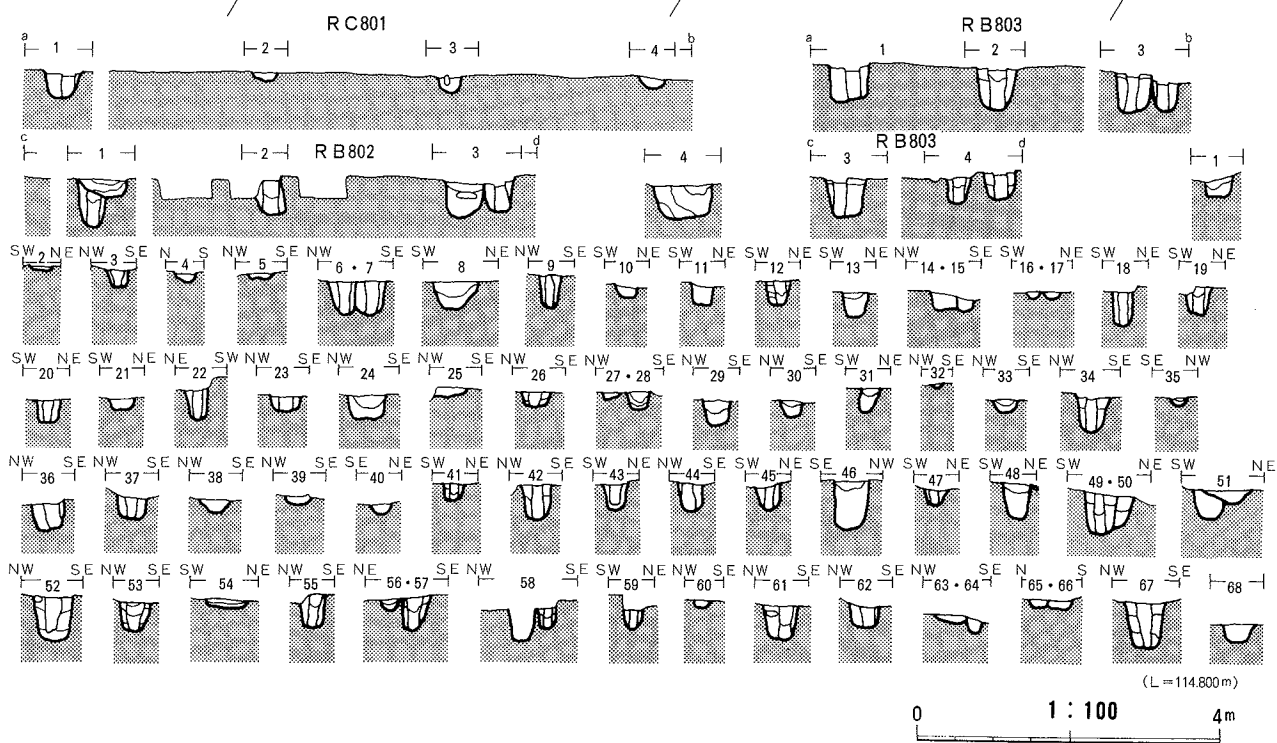
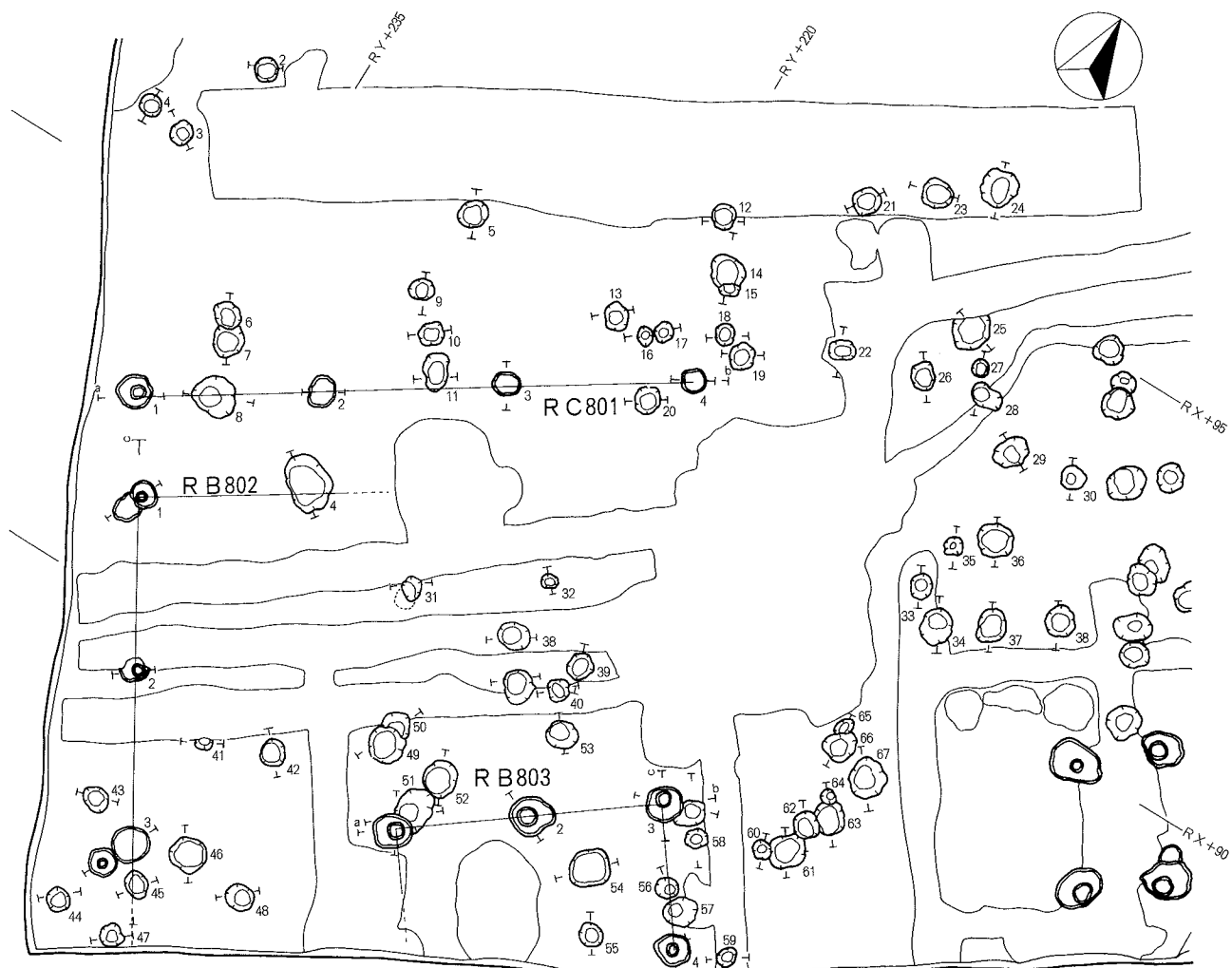
位 置 調査区南西 主軸方向 W40°S
新 旧 関 係 不明（RB803掘立柱建物跡と新旧関係にある）
検 出 面 削平された褐色シルト面
規 模 桁行3間（7.8m）以上、梁間2間（5.0m）以上をはかる。桁行は1間1.8m（約6尺）、梁間は1間2.5m（約6尺）で、調査区の南側に広がりをもつものと想定される。
柱 穴 直径0.4～0.6m、深さ0.5～0.6mをはかる。
出土遺物 なし

RB803掘立柱建物跡（第35図）

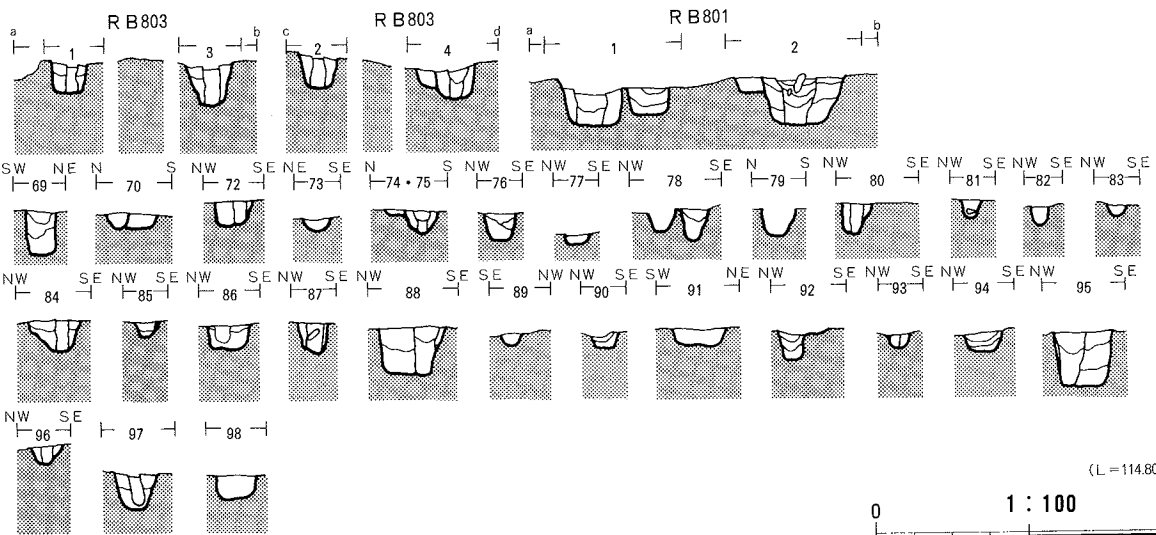
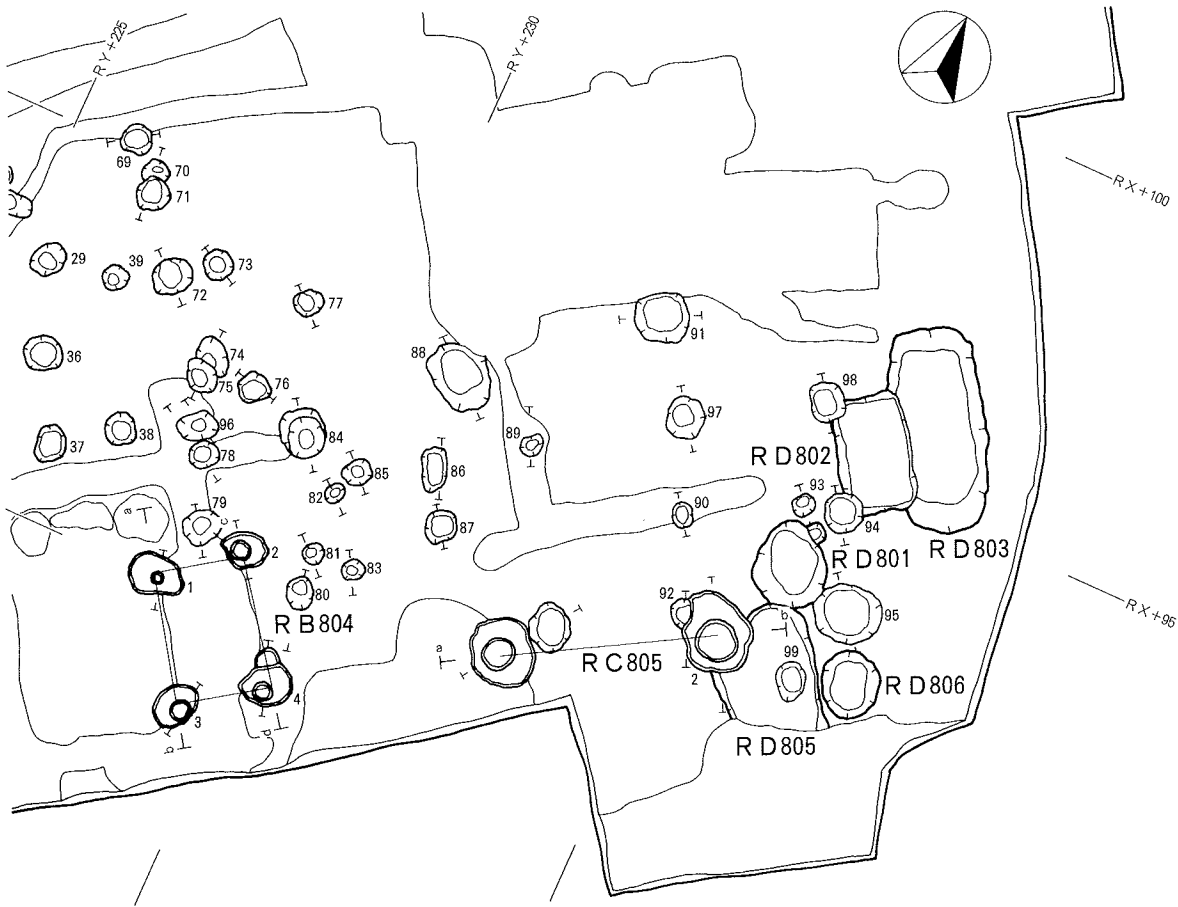
位 置 調査区南西 主軸方向 W45°S
新 旧 関 係 不明（RB803掘立柱建物跡と新旧関係にある）
検 出 面 削平された褐色シルト面
規 模 調査区外にも柱穴の存在する可能性があるため全体規模は不明であるが、桁行2間（3.8m）、梁間1間（2.2m）以上で、桁行1間1.9m（約6尺）、梁間1間2.2m（約7尺）桁行3間（7.8m）以上、梁間2間（5.0m）以上で、調査区の南側に広がりをもつものと想定される。
柱 穴 直径0.4～0.6m、深さ0.5～0.6mをはかる。埋土はRB802掘立柱建物跡の柱穴と同様で、黒～黒褐色土を主体とした柱痕跡（A層）と、黒～暗褐色土に褐色土を含む掘方（B層）からなる。
出土遺物 なし

RB804掘立柱建物跡（第36図）

位 置 調査区南東 主軸方向 S40°E 新旧関係 不明



第35図 R B 802・803掘立柱建物跡、R C 801柱列跡、ピット群（調査区西半）



第36図 R B 804掘立柱建物跡、R C 805柱列跡、ピット群（調査区東半）

検出面 削平された褐色シルト面
規模 桁行1間(約2m)、梁間1間(約1.3m)ほどを検出しているが、周囲の遺構や攪乱の状況から掘立柱建物跡の一部と考えられる。
柱穴 直径0.5~0.6m、検出面からの深さ0.45~0.6mをはかる。埋土はRB802掘立柱建物跡の柱穴と同様で、黒~黒褐色土を主体とした柱痕跡(A層)と、黒~暗褐色土に褐色土を含む掘方(B層)からなる。
出土遺物 なし

RC805柱列(第36図)

位置 調査区東半隅 主軸方向 N60°E 新旧関係 RD805土坑を切る。
検出面 削平された褐色シルト面
規模 1間(約3m)のみを確認したが、柱穴の規模から調査区外に広がりをもつものと想定される。
柱穴 直径0.9~1.1m、検出面からの深さも0.7mほどはかる。埋土は、黒~黒褐色土を主体とした柱痕跡(A層)と、黒~暗褐色土に褐色土を含む掘方(B層)からなる。
出土遺物 なし

RD801土坑(第30図)

位置 調査区東半隅 平面形 不整楕円形 主軸方向 不明
新旧関係 RD805土坑に切られる。 検出面 削平された褐色シルト面
規模 1.15m×0.95m、検出面からの深さ0.25~0.4mをはかる。
埋土 A層—褐色土を粒状に含む。
B層—暗褐色土に褐色~黄褐色土を粒~塊状に含む。
出土遺物 なし

RD802土坑(第36図)

位置 調査区東半 平面形 長方形 主軸方向 N60°W
新旧関係 RD803土坑を切る。 検出面 削平された褐色シルト面
規模 1.6m×1.0mで、検出面からの深さは0.52mほどをはかる。
埋土 A層—褐色土を粒状に含む。
B層—褐色土を主体とし炭化物を少量含む。
出土遺物 なし

RD803土坑(第36図)

位置 調査区東半 平面形 長方形 主軸方向 N60°W
新旧関係 RD802土坑に切られる。 検出面 削平された褐色シルト面
規模 2.7m×1.15m、検出面からの深さは0.55mほどをはかる。
埋土 A層—暗褐色土を主体とし、褐色土を粒状に多く含む。

B層—褐色土を主体とし暗褐色土および黄褐色土を含む。

出土遺物 なし

RD804土坑 (第30図)

位置 調査区南東 平面形 一部攪乱を受けている、不整楕円形。 主軸方向 N40°W

新旧関係 RC805柱列跡、P99に切られる。 検出面 削平された褐色シルト面

規模 1.65m以上×1.35m、検出面からの深さは0.15mほどをはかる。

埋土 A層—暗褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含む。

出土遺物 なし

RD805土坑 (第30図)

位置 調査区南東 平面形 楕円形 主軸方向 不明

新旧関係 RA112竪穴住居跡を切る。 検出面 削平された褐色シルト面

規模 0.8m×0.9m、検出面からの深さは0.32mほどをはかる。

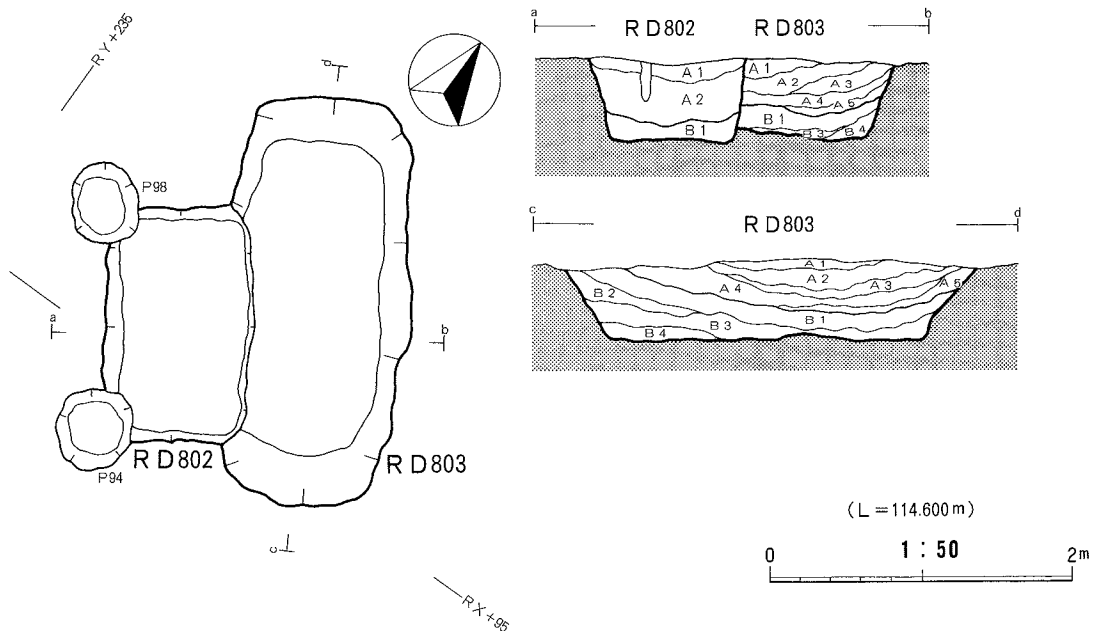
埋土 A層—暗褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含む。

出土遺物 なし

4. 調査のまとめ

百目木遺跡ではこれまで13地点において調査を実施している。調査の成果から遺構密度の濃淡や遺構の配置などが明らかになりつつある。

第12次調査では、奈良時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の竪穴住居跡7棟のほか、近世以降の掘立柱建物跡2棟、柱列2条、土坑5基を検出した。



第37図 RD802・803土坑

古代の遺構 奈良時代の竪穴住居跡住居跡は、1辺が4 mほどをはかるもので、かまどは切り合いや攪乱を受けているために検出されていないが北壁もしくは西壁にかまどが構築されていたと考えられる。出土遺物は甕類が多く、ほかに甕が1点出土しているほかは坏類はほとんど見受けられない。

平安時代の竪穴住居跡は1辺が2.8m～4 mと規模はまちまちである。かまどの向きについてもRA109・110竪穴住居跡が住居の北東壁にかまどを構築しているのに対し、RA111竪穴住居跡は南東壁に構築されており、統一性はみられない。出土遺物は坏類が多く、全体的には土師器よりもあかやき土器の割合が多いようである。

当遺跡内でこれまで確認された竪穴住居跡の傾向としては、奈良時代の竪穴住居跡の大半が北壁か北西壁にかまどを構築しているのに対し、平安時代の竪穴住居跡は北東壁から南東壁にかまどを構築しており、今回の調査でも同じような傾向がみられている。また、竪穴住居跡の規模においても、平安時代の竪穴住居跡が1辺3.5～4 mをはかるもので占められているのに対し、奈良時代の竪穴住居跡は1辺が6～7 mをはかる大規模なものが多く、今回検出された竪穴住居跡は小規模な部類にはいるものである。

出土遺物の傾向は、奈良時代においては甕類の割合が多く、平安時代においては坏類が多くなり、中でもあかやき土器の割合が多くなっている。今回の調査においても同様の傾向がみられることが確認された。

近世以降の遺構 近世以降の遺構は攪乱を受けており、掘立柱建物跡の全体を復原できるものは皆無であった。埋土からは近世～近代（明治時代）までの陶磁器片が出土しており、当時の屋敷跡の一部としてとらえることができる。土坑は平面形が長楕円形～長方形を呈している。これらからも、近世～近代（明治時代）までの陶磁器片が出土しており、掘立柱建物跡とほぼ同時期の遺構と考えられるが性格は不明である。

【引用・参考文献】

1979 都南村教育委員会『百目木遺跡』

1998 西野修ほか『東北地方の古代集落』「北上盆地北部」第24回古代城柵官衙検討会資料

4. ^{みるまえだて}見前館遺跡（第1次調査）

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の位置と地形

見前館遺跡は、盛岡市南部の西見前字館地内に所在する。遺跡は、雫石川の旧河道が入り込んだ沖積段丘上（砂礫段丘Ⅲ）の旧河道縁辺に残された小段丘上に立地する。この沖積段丘上には、本書で報告されている林崎遺跡・百目木遺跡も立地しており、古墳～平安時代の遺跡が多く見られる。この旧河道は、志波城跡から矢巾町に所在する徳丹城跡付近まで見られるが、現在その幅や細部については圃場整備などにより形状が変化してしまっているため不明である。遺跡の現況は水田に囲まれた住宅地および畑地である。

遺跡の立地

見前館遺跡周辺には旧河道をはさんだ小段丘上にいくつかの遺跡が分布している。北側には三百刈田・菖蒲田・荒屋・和野遺跡、東側には、見前中島・見前久保屋敷・上畑・石名坂・見前古館遺跡、南側には下谷地・下谷地前遺跡が立地している。

周辺の遺跡

遺跡の立地する低位沖積段丘面は、他の遺跡と同様に河川の影響を強く受けており、水成層が基底をなしている。その上に水成シルト層が形成され、表土がシルト面を覆っている。遺構は全てこのシルト面を掘り込んでおり、遺構埋土は基本的に黒褐色～暗褐色土を主体としている。

(2) 周辺の城館遺跡

盛岡市内および岩手・紫波郡内における城館遺跡数は、遺構・遺物の未確認なもの、本来別な遺跡として認識されていたが中世の遺構・遺物が検出され城館遺跡と認知されたものを含み274遺跡を数える（注1・3）。このうち、雫石川の南側、北上川西側に立地する城館遺跡は、それぞれ雫石川上流域（繫地区）を中心とする地区、北上川東側の山地、雫石川中流域の沖積段丘面、その他低位沖積段丘面上に立地するものに分類できる。これらの地区内で確認されているのは城館遺跡は見前館遺跡を含み15遺跡で、発掘調査が実施されたのは5遺跡である。その他の遺跡については現況での地形観察の結果、表採遺物の時期などにより城館遺跡としている。

城館遺跡

館市館、萩内館、上野館遺跡が立地する繫地区では山地に城館遺跡が分布している。また、猪去館、小和田館、猪去八幡館遺跡の立地する雫石川中流域の城館遺跡は、沖積段丘より上位の中位段丘（砂礫段丘Ⅱ）、および山地に分布している。また、低位沖積面に立地する遺跡は館（太田館）・向中野館・見前古館・見前館遺跡が確認されている。

発掘調査が実施されている城館遺跡のうち、猪去館遺跡を除いては旧河道の縁辺に残存する

低位沖積段丘面に立地している。これらの遺跡は周辺が水田化し、さらに圃場整備により旧地形をとどめておらず、遺跡内も宅地化されるなど遺構が確認しにくくなっている。

館（太田館）遺跡は、斯波氏家臣であった太田氏が居を構えていたとされている。館遺跡はこれまでの調査により遺跡の中央部で土塁と堀跡が検出されているほか、竪穴建物跡が検出されている。また、圃場整備前の地割により用水堰や堰に併行する堀跡が確認されている。

低位沖積面に分布する城館遺跡のほとんどは遺構の明瞭なものは少なく、築城・廃城時期の明確なものは皆無である。山地に分布する城館についても時期の特定は困難であるが、開発が及んでいないこともあり堀や土塁のほか段状に削平された曲輪等の遺構が確認できるものが多い。

(3) 歴史的環境

見前の字はもともと見舞（みるまい）と読まれていたとされ、見前郷は斯波氏の家臣であった見前氏が領有していたとされている。建武二年（1335）に斯波家長が奥州管領として斯波館（高水寺城か）に拠したとされており、斯波氏勢力の伸張とともに周辺に城館が築かれたと想定される。室町幕府の伸張とともに斯波氏勢力は隆盛を極め、志和郡66郷を封じている。「奥南落穂集」によれば、志和郡の北上川東側には河村氏、西側には石清水・築田・細川・永井・徳田・見前・稲藤・室岡・太田（多田）・矢羽々・星川・飯岡・中嶋・小屋敷・山王海・宮手・鱒沢・川村の各氏が配されていたとされ、見前氏については天文年間（1532～1555）にこの地に入ったとされている。

天文元年（1532）～元龜二年（1571）にかけて志和郡北部から岩手郡南部においてしばしば紛争が惹起している。天文十四年（1545）に斯波氏は雫石川の南側を勢力下におくが、天文十八年（1549）には岩手郡を攻略した南部氏と直接境界を接することとなった。天文年中に、閉伊郡遠野保主阿曾沼広郷の勢力の伸張により阿曾沼氏との同盟により力を得た斯波氏（注2）が、南部（三戸）晴政の勢力下にあったとされる岩手郡南側に進出し滴石城を略取、滴石御所斯波詮貞の勢力を生んだ。このことから、16世紀前半の岩手郡は岩手山を境にして、北に一戸氏を中心とする南部氏の勢力と、南に斯波氏の家臣が対峙していたと考えられる。

元龜二年、斯波氏と南部氏との間で農民間の納貢問題を契機に紛争が勃発した。南部（石川）高信が出兵、斯波方と争った。斯波方は敗色強く、稗貫氏の調停により斯波氏は志和郡の見前郷以北を失っている。それに伴い見前館に南部信直は日戸内膳を配置したとされている。

このことについては『祐清私記』に「見前の日戸の館」・「北斯波の代官」と記されている。

同年には九戸政実弟弥五郎のちの高田康実（高田吉兵衛のち南部方に属し中野直康と改姓改名、天正十九年傷死）が高水寺城主斯波詮真の女婿となったとされており、斯波氏と九戸政実とは姻戚関係になっている。しかし、天正十四年（1586）に高田氏と斯波氏の間が不和となり、高田吉兵衛は斯波から逃れ、後中野館に入って中野修理と改めた。斯波氏はこれに対し兵を出したがかえって敗れる結果となった。この後も斯波氏と南部氏との抗争は繰り返されていたが、天正十六年（1588）7～8月に三戸南部家を継いだ南部信直は志和郡を攻略し、斯波氏を滅ぼすに至った。これは、志和稲荷棟札に「天正十六年五月二八日、大旦那源朝臣志和孫詮直」と

あることから当主斯波詮直（詮基または詮元ともされる）の健在が確認されている。ただし、「斯波系図覚書」によれば詮直は幼く、詮森こそ隠退していたが当主であったともされるが真偽は定かではない。

信直の志和郡攻略については、年欠八月五日付「葛西晴信書状」、年欠八月五日付「本堂道親書状」が信直の志和郡攻略を伝えていることから志和郡は天正十六年の夏には南部方に略取されることが確認される。敗れた斯波詮直は高水寺城から山王海に逃れ、さらに出羽へ落ちのびたともいわれている。

見前館（城）であるが、前掲「奥南落穂集」によれば郡主斯波氏重臣見前若狭の本拠であったとされ、見前氏は見前郷を所領としていたと記されている。見前氏についての記録は皆無に等しく史料として検討の余地があるが、「志和軍戦記」によると見前若狭は元龜三年（1572）飯岡城攻略に活躍したとされる記載がみられる程度で、出自等詳細については不明である。また、日戸内膳の見前館配置時の記載には「其の他同所旧館に家名は不明であるが差置、境目仕置かれ」とあり、当時は旧館主が見前氏であったか明確でなかったかは、あえて見前氏の記録を残さぬようにしたためか検討の余地がある。また、斯波氏の旧臣の多くが南部氏に帰順し本領安堵を受けているものが多いが、その中に見前氏の名前は見られず詳細については不明である。

見前館築城時期については記録が無いため不明である。廃城（破却）の時期について「南部古実記」には『御当家御分国の古城太閤秀吉公の時御書上写奥州南部大膳太夫分国諸城破脚に書上の事 天正二十年六月十一日書上 見前平城信直抱代官日戸内膳』とあり、天正二十年（1592）の書上である「聞老遺事」によれば『南部大膳太夫分国内諸城破却共書上之事』にも破脚の指示があったことから16世紀末葉には破却されていたと解される。

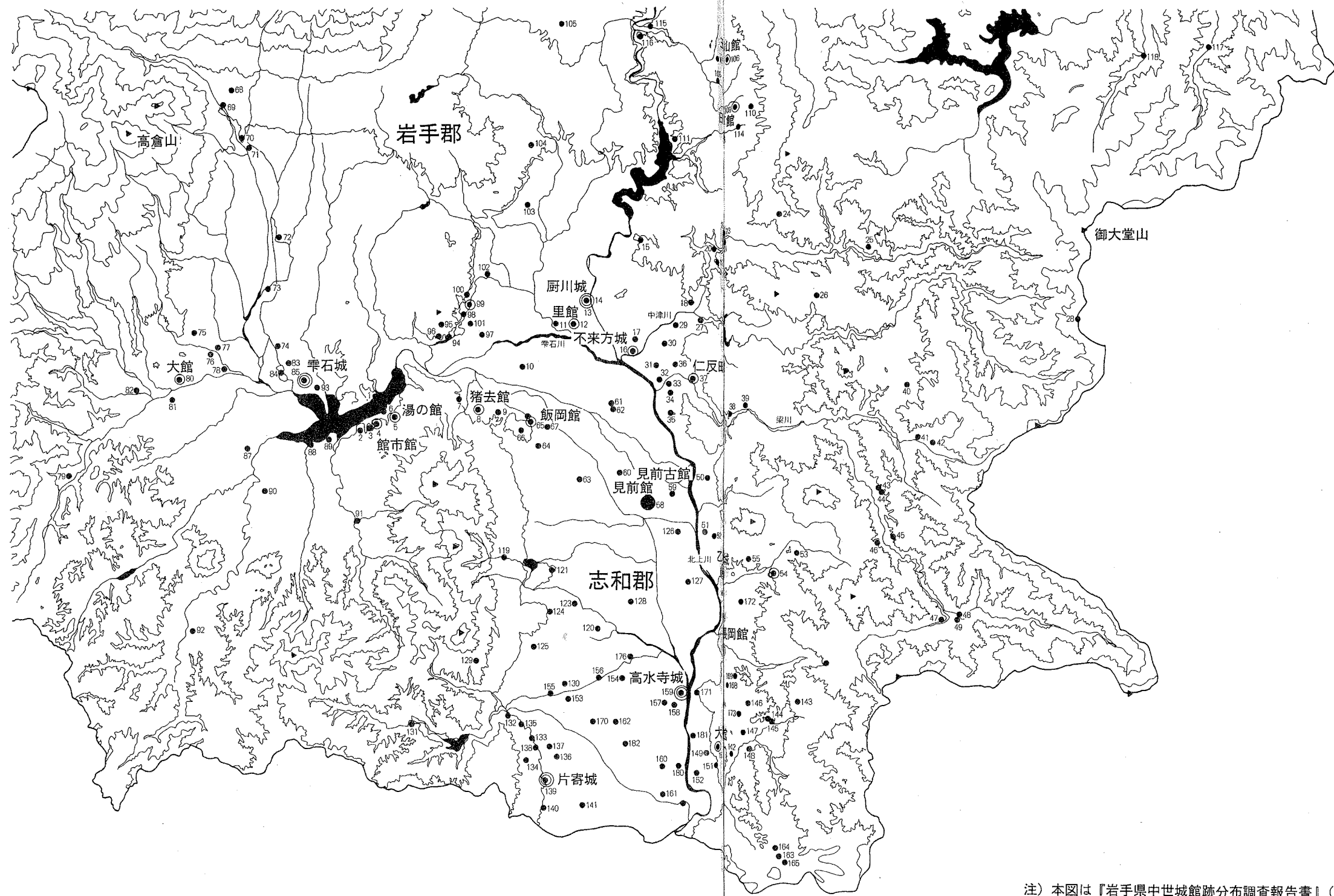
なお、東見前9地割古館地内所在の見前古館遺跡（通称古館）は、見前館以前の館跡との伝承がある。戦前までは土塁が残存し、それに沿って堀跡も存在したといわれているが現況では確認できない。ただし、元治元年（1864）に描かれた東見前・西見前村絵図には2つの郭を持つ館跡が明瞭に描かれていることから、見前氏の居館であった確証はないものの城館遺構の存在は間違いないものと思われる。

(4) 遺跡の構造

見前館遺跡は平城で、比高差1～2mほどの微高地に立地しており、現況の地形図（第39図）をみると住宅の立地する独立した微高地が水田や用水路に囲まれているのが確認できる。また、遺跡内は古くから西見前字館と行政区分されており、地区内には搦手・大館・大手先・堀田・観音堂・鎌倉道などの地名が言い伝えられている。

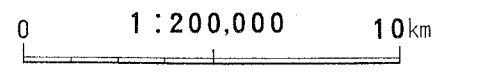
元治元年（1864）の東見前・西見前村絵図（写真図版7）には遺跡の北側を画する土塁の痕跡と思われる高まりが描かれている。また、当時から存在した確証はないが、遺跡の中央から北東部に相当する付近に社殿が描かれ、鬼門の方角にあたる宗教施設と考えられる。

明治時代の公図『岩手県陸中国紫波郡西見前村8地割館絵図』（明治18年作図）には、現在圃場整備のため観察できない地形の区画が確認できる。遺跡の四方は現況と同様に水路や水田



注) 本図は『岩手県中世城館跡分布調査報告書』(岩手県文化財調査報告書第82集: 1986岩手県教育委員会)を基本とし、その後確認された城館跡を加筆して作成した。全ての城館を実査して作成したものではなく、一部に位置等の不明なものを含むが、今後の調査により加筆修正していきたい。

(1999『安倍館遺跡—厨川城跡の調査—』盛岡市教育委員会)を転載



第38図 岩手・志和郡の城館分布図

周辺の城館遺跡一覧表

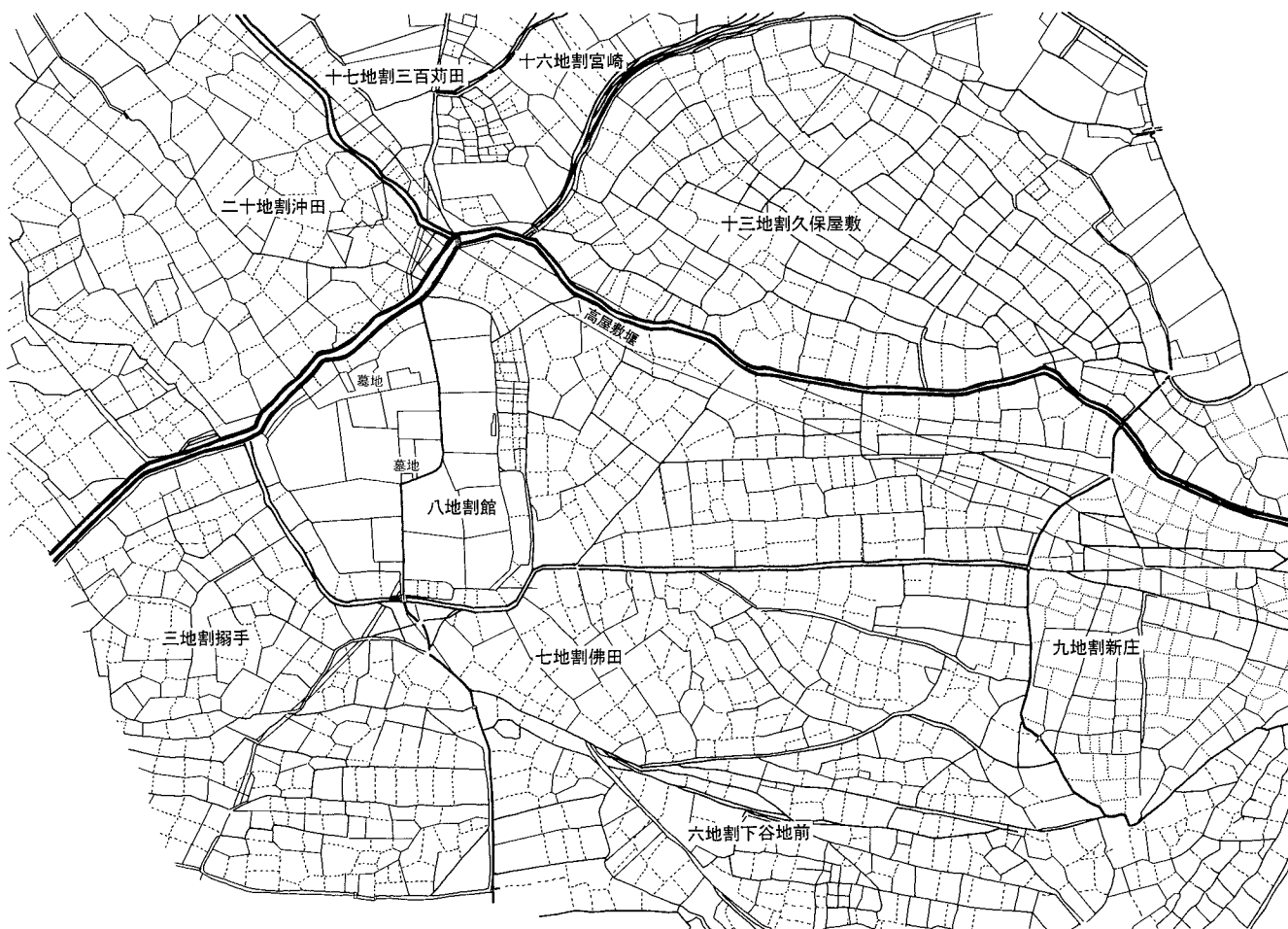
No	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模(m)	主要郭	備考(城主・文献・年代など)
1	新城館	盛岡市繫字堂ヶ沢	段丘先端	60m	80×40	1	綾織越前広信か?
2	上野館	繫字萩内沢	尾根先端	60m	80×40	1	
3	萩内館	〃	尾根先端	90m	50×20	1	
4	館市館(古館)	繫字館市	尾根	90m	400×100	3	手塚伊織・館市氏(館市家文書)
5	湯の館	繫字湯の館	山頂~山腹	180m	400×350	2	田口氏?
6	繫皿遺跡	繫字湯の館	段丘縁辺	20m	100×80	1	湯の館の居館か? 15~16世紀
7	猪去八幡館	猪去字田面木	尾根先端	50m	200×80	1	
8	猪去館	猪去字釈迦堂	段丘先端	10m	350×200	3以上	猪去(斯波)氏~天正16年(1588)?
9	小和田館	猪去字小和田	台地先端	7m	130×40	2	
10	太田館	上太田字館	微高地	1m	200×150	2	太田氏(奥南盛風記)天正ごろ
11	稻荷町遺跡(大館)	大館町・稻荷町	低位段丘	3m	300×250	1	12世紀居館
12	里館	天昌寺町ほか	低位段丘	3m	400×150	4~5	工藤氏 12~16世紀
13	厨川城(安倍館遺跡)	安倍館町ほか	台地縁辺	20m	650×200	7	工藤氏16世紀 天正20年(1592) (破脚書上)
14	上田城	上田地内か?					所在地不明(遠野南部家文書:正平5年)
15	大森山遺跡	上田字黒石野	山頂	70m	50×50	1	
16	淡路館(南館)	内丸	丘陵	18m	450×250	3以上	不来方(福士)氏 近世盛岡城本丸~三の丸の位置
17	慶善館(北館)	内丸	丘陵	7m	250×120		福士氏 盛岡城外曲輪の位置(旧記)
18	佐々木館	下米内字寺並	丘陵	70m	300×150	2	佐々木氏
19	大誘館	上米内字大誘	尾根先端	60m	200×50	2	畝状堅堀群
20	野頭館	上米内字野頭	尾根	50m	150×150	3	
21	米内館	上米内字畑井野	丘陵先端	25m	50×30	2	
22	竹林遺跡	上米内字米内沢	丘陵先端	30m	30×20	1	郭内に堅穴状窪み6カ所
23	向館	上米内字米内沢	尾根先端	50m	40×30	1	
24	矢沢館	上米内字畑	舌状台地	5m	400×100	1	山間部の小規模な居館
25	大志田館	浅岸大志田(館沢)	尾根先端	160m	40×20	1	
26	元信館	浅岸字元信	山頂	100m	60×40	1	山間部の小規模居館 元信弥六
27	上村屋敷遺跡	浅岸字柿木平	段丘縁辺	3m	250×100	1	浅岸氏? 19・20次調査地点 16世紀、南に近世環壕屋敷
28	阿部館	浅岸字中津川	山頂	700m	350×150		安倍氏?
29	獅子ヶ鼻館(妙泉寺山)	加賀野字桜山	丘陵	60m	200×150	2	丘陵頂部を環壕が周回、近世寺院で部分的に改変
30	花垣館(三上館)	天神町・住吉町	丘陵	20m	150×100	2以上	盛岡城築城時三上氏居住
31	中野館	茶畑ほか	丘陵	8m	150×100	2以上	中野(高田)康実 天正14年
32	新山館	高崩ほか	低位段丘	4m	150×100	1?	
33	葛西館	東安庭字見石	丘陵先端	20m	250×120	1?	葛西氏 慶長年間
34	安庭館	東安庭字館	丘陵先端	20m	200×150	1	
35	蝶ヶ森館(まったつ)	東安庭字蝶ヶ森外	山頂	110m	280×100	1	山頂に経塚、経ヶ森とも、単郭多重周壕
36	槻木館(小山遺跡)	東山一丁目	台地	20m	200×80	1	
37	仁反田館	東山二丁目ほか	丘陵	30m	300×150	4	仁反田四郎常忠(岩手郡史)
38	川目C遺跡	川目第6地割	丘陵	30m	80×50	1	堀切等ないが、斜面に段築。開元通寶・鉄釉天目茶碗出土
39	戸中館	川目字戸中	尾根先端	60m	250×50	2	吉田氏?多重堀切
40	内沢館	築川字内沢	尾根先端	80m	100×20	1	
41	下館	築川	尾根先端	160m	50×10	2	
42	平清館	築川字平清	尾根先端	120m	50×40	1	
43	細野館A	根田茂字細野	尾根先端	50m	200×30	1	
44	細野館B	根田茂字細野	尾根先端	50m	150×50	1	
45	マダテ	根田茂字築場	尾根先端	120m	60×20		
46	天狗岩館	根田茂字天狗岩	尾根先端	120m	60×20	1	
47	笹川館	砂子沢	尾根先端	100m	50×50	1	
48	若宮館	砂子沢字横石	尾根先端	40m	250×150	1	
49	砂子沢館	砂子沢字御蔵	尾根先端	20m		1	
50	手代森館	手代森字館	山麓台地	50m		1	手代森秀親(紫波郡史)
51	黒川館	黒川字沢田	丘陵先端	30m	150×100	1	黒川某(紫波郡史)
52	高陣	黒川字高陣	丘陵頂部				
53	大ヶ生館(北館・南館)	大ヶ生字城内	丘陵先端	40m	300×100	2	大ヶ生玄蕃(祐清私記)
54	上大ヶ生館	大ヶ生上大ヶ生	山頂			1	
55	江柄館	大ヶ生字江柄	山頂			1	
56	乙部館(乙部城)	乙部字館	舌状台地	10m	400×150	5	乙部兵庫→福士右衛門 天正20年
57	乙部方八丁遺跡	乙部字新田	段丘縁辺	20m	400×250	2	
58	見前館(見前城)	西見前字館	微高地	1m	250×200	2	見前若狭→日戸内膳、天正20年存置
59	見前古館	東見前字古館	低位段丘	2m	300×270	2?	見前館以前の館?
60	永井館	永井字前田	平地				永井八郎延明 永井小学校地内

No	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模(m)	主要郭	備考(城主・文献・年代など)
61	向中野北館	飯岡新田字才川	微高地	1m	80×70	1	東野文七(志和軍戦記)
62	向中野南館	飯岡新田字才川	低位段丘	2m	70×60	1	東野氏
63	大館(湯沢大館遺跡)	湯沢字館	段丘先端	5m	200×90	1	杉山一学(志和軍戦記)、二重堀
64	羽場館(小館)	羽場字百目木	段丘先端	6m	150×100	3	岩倉常太郎(志和軍戦記)
65	飯岡館	上飯岡字赤坂	山麓丘陵	70m	200×200	3	飯岡平九郎・弥六郎祐貫
66	寺館	上飯岡字館野前	微高地	1m	250×80	2	飯岡氏?
67	月見山	上飯岡字山中	小丘陵	10m	180×50	1	
68	湯ノ沢館	零石町長山字有根	丘陵				
69	有根館	長山字有根	丘陵		70×50		
70	篠森館	長山字館	丘陵				
71	的館	長山字篠ヶ森	丘陵				
72	長山館(岩井花館)	長山字狼沢	丘陵		60×30		
73	土樋館	長山字中上	山頂		30×25		
74	柿木館	長山字柿木	平地				
75	上和野館	上野字上和野	丘陵				
76	和野館(曾利館)	上野字曾利	平地				
77	天神館	上野字天神	平地				
78	新里館	上野字片子	平地				
79	中の館(中野館)	御明神字清水川	山麓		150×60		
80	大館	御明神字山津田	山頂		500×250	4以上	
81	高見館	御明神字滝沢	山麓				
82	小赤沢館	橋場字明神下	山麓		90×130		北浦五郎重任(岩手郡誌)
83	北浦館	万田渡	平地				
84	源太堂館	八卦麻見田	平地				
85	零石城(八幡館)	下町	段丘	10m	600×200	5以上	戸沢氏→零石(斯波)氏→南部氏
86	古館	古館	段丘	10m			
87	矢川館	西安庭字矢川野	山頂				
88	戸沢館	西安庭字戸沢	段丘				戸沢氏(零石町史)
89	田屋館	西安庭字下戸沢	段丘先端	20m	100×90	2	
90	枅沢館(野曾木館)	西安庭字除	平地				
91	矢櫃館(安倍館)	西安庭字斬ヶ沢	尾根先端	30m	150×50	1	多重堀切
92	木村館	南畑字上台	山麓				
93	御所	西安庭字元御所	平地				
94	八幡館	滝沢村大釜字白山	山頂	80m	250×200	1	主郭は径50mほど
95		大釜字白山	山頂	160m	120×30	1	
96	千ヶ窪遺跡	大釜字千ヶ窪	山頂	110m	150×60	1	堅穴状の窪みが約30カ所
97	大釜館	大釜字外館	微高地	1m	200×100	2以上	
98	篠木館	篠木字上篠木	丘陵	20m	150×100	1	
99	エゾ館	篠木字中村	台地	8m	200×80	3	先端より一の台、二の台、三の台(消滅)と呼称
100	大沢館	大沢字館	丘陵先端	30m	100×60		
101	参郷森	篠木字参郷森	独立丘陵	20m	150×70		明確な遺構なし
102	御飯屋館(鶉飼館)	鶉飼字御庭田	独立丘陵	30m			明確な遺構なし、江戸時代に東の麓に御飯屋が存在、鶉飼(福土)
103	勘助館	滝沢字滝沢	舌状台地	10m			
104	館	湯舟沢	丘陵	10m			
105	一本木館	一本木	台地縁辺	10m	90×90		
106	玉山館	玉山村玉山城内字館	丘陵先端		200×150	2	玉山(川村)氏
107	二子沢館	玉山二子沢	丘陵先端		200×120	2	玉山大和
108	館花館	玉山館花	台地先端	10m	160×40	2	
109	日戸館	日戸字古屋敷	丘陵先端	30m	250×100	3	日戸氏
110	祝の沢館	日戸字祝沢	平地		100×200		
111	川口平館(もぐら館)	川又字赤坂	丘陵先端	20m	100×80	1	
112	町川又館	川又字赤坂	尾根先端	50m	150×60	2	
113	館	川又字中館	丘陵				
114	堀館	川又字中館	山麓		100×100	1	山際に堀
115	御供山館	洪民字岩鼻	丘陵先端	20m	80×50	2	
116	門前寺館	門前寺字館	丘陵先端	20m	80×80	1	
117	向井沢堀米館	藪川字向井沢	山麓		60×50	1	
118	軽米沢堀米館	藪川字軽米沢	山麓		30×30	1	
119	座頭館	矢巾町広宮沢	台地縁辺	20m	20×10	1	
120	谷地館(太田館)	太田字谷地館	平地				太田氏
121	煙山館	煙山	尾根先端	60m	100×80		煙山氏
122	いたこ館	煙山字蔦ヶ平					
123	室岡館(久保屋敷)	室岡字久保	平地		80×60	2	
124	伝法寺館	北伝法寺字寺前	丘陵先端	30m	100×80	2	
125	岩清水館	岩清水字城内	尾根先端	50m	150×80		岩清水右京
126	高田館(吉兵衛館)	高田字北田	平地				

No	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模(m)	主要郭	備考(城主・文献・年代など)
127	徳田館	徳田字五百刈田					
128	白沢館	白沢	独立丘陵	20m	180×60	1	白沢氏
129	山館	紫波町上松本字内分	尾根頂部	510m	80×100	1	単郭を基調、郭内は自然地形が残
130	松本館	下松本字下二合	平地	1m	100×100		松本清兵衛
131	山王海館	土館字小清	山麓台地	30m	180×180	2	山王海太郎(天正～慶長)
132	弥勒地館	土館字弥勒	丘陵先端	100m	100×80	1	
133	寺館(源勝寺館)	土館字閼沢	丘陵	70m	200×250		亨徳3年(1454)～
134	笹森館	土館字笹森	尾根先端	50m	250×250		
135	笹木館	土館字田面	山麓丘陵	40m	150×150	1	
136	金田館	土館字金田	山麓台地	10m	110×150	1	
137	浦田館	土館字浦田	台地	20m	120×100	1	
138	愛宕山館	土館字和山	山麓丘陵	30m	120×80	1	
139	片寄城(吉兵衛館・今崎城)	片寄字中平	山麓丘陵	60m	400×250	3	
140	墳館(古館・漆館)	片寄字漆館	山麓丘陵	40m	200×150	1	
141	上久保館	片寄字上久保	台地	2m	120×100		
142	的場館	赤沢字的場	丘陵				
143	船久保館	赤沢字船久保	丘陵	40m	180×100	1	
144	白山館Ⅰ	赤沢	山頂			1	
145	白山館Ⅱ	赤沢	尾根			1	
146	田村館	赤沢字清水袋	丘陵	25m	150×150		
147	加賀館	赤沢字加賀館	丘陵	27m	250×300		
148	赤沢館	赤沢字赤沢	山頂	90m	200×150	1	
149	古館	大巻字上山	山麓台地				
150	大巻館(河村館)	大巻字花館	山頂	60m	350×250	3	大巻氏
151	梅ノ木館	大巻字梅ノ木	平地				
152	赤川館	大巻字長沢尻	平地				葛原伯耆(文亀二年堂宇建立)・葛原義敬(斯波御所次男)
153	谷地館	宮手字谷地館	平地		100×120	1	
154	陣ヶ丘	宮手字陣ヶ丘	丘陵	13m	300×280		
155	泉館	宮手字泉屋敷	平地	2m	120×90	1	
156	久々館	宮手字久々館	台地	1m	80×80	1	
157	戸部御所(西御所)	二日町字南七久保	丘陵	10m	150×100	1	斯波家政(～天正16年)
158	吉兵衛館	二日町字向山	丘陵	25m	500×200	2	高田吉兵衛
159	高水寺城(郡山城)	二日町字古館	丘陵	90m	700×500	4	斯波氏
160	比爪館	南日詰字箱清水	微高地	2m	300×300	1	樋爪氏
161	善知鳥館(坂本館)	南日詰字滝名川	段丘陵辺	6m	150×100	1	
162	平沢館	平沢字館	平地	0m	200×150		築田大学
163	太郎館	平沢字的場	平地				
164	古館	佐比内字古館	丘陵			1	
165	佐比内館	佐比内字神田	丘陵	45m	250×200	1	河村秀清
166	牛の頭館	佐比内字牛の頭	丘陵				
167	平栗館	佐比内字平栗	丘陵				
168	星川館	北田字星川	丘陵				
169	北田館	北田	丘陵		30×30	2	円形の単郭
170	梅ノ木館(畑沢館)	北田字畑沢	山頂				
171	稲藤館(フクベ館)	稲藤字田屋	微高地	2m	210×120	1	稲藤大炊
172	犬吠森館(東館)	犬吠森字沼端	丘陵	35m	200×180	2	東民部
173	江柄館	江柄字大志田	丘陵	25m	100×50	1	江柄式部(天正年間)
174	高間館(西野館)	遠山字西野々	山頂				
175	遠山館	遠山字新田	山頂				遠山氏(慶長年間)
176	栃内館	栃内字栃内	段丘陵辺	10m	100×120	1	栃内源蔵(天正年間)
177	中島城	中島字上長根	微高地	2m			中島安将(天正年間)
178	長岡館	東長岡字館	丘陵	33m	350×200	2	長岡八右衛門・南部重直(～慶長5年)
179	西田館	犬淵字西田	丘陵先端	12m	150×100	1	
180	機織館(彦部館)	彦部字機織	丘陵	35m	250×200	1	彦部氏(天正年間)
181	北条館	北日詰字城内	段丘陵辺	6m	180×250	1	北条氏・日詰氏(天正年間)
182	星山館	星山字間野村	平地	3m	100×100		星山左馬丞
183	山屋館	山屋	山頂	40m	60×80	1	

に囲まれており、灌漑施設を兼ねた堀跡とも想定される。また、近世以降から高屋敷堀が付近の田畑を潤すようになったとすれば、古くから通水していたものではない可能性もある。ただし、周辺の字名に沖田・下谷地など湿地を指し示す地名が現存することから少なくとも周辺に湿地および水田が広がっていたことは想像に難くない。

遺跡の中央には南北に道路が走っている。この道路は中心部付近で直角に曲がっており、北側では主郭を区画する堀と重複あるいは並行しているものと想定される。また、堀跡と並行する土塁の痕跡と思われる地割も確認できる。現地表面では土塁の痕跡が確認されない、おそらく堀を埋める際に土塁は崩されたものと思われる。もっとも、今次発掘調査だけでは城館の構造を明確にするには至っておらず、縄張りも推定の域を出ない。今後の調査事例の蓄積が必要であろう。



第39図 岩手懸陸中図紫波郡西見前村絵図（明治5～15年作図）（原図を模写）



第40図 見前館遺跡 (1 : 1,500)

2 調査経過

(1) 平成10年度の調査

第1次調査 平成10年度は、第1次調査として個人専用住宅全面改築に伴う事前調査を実施した。検出面は表土直下で、現地表面からは約40cmのところである。遺構は、改築前の住宅基礎などにより攪乱・削平を受けている。また、全ての遺構は地山黄褐色シルト面を掘り込んでいる。なお、基礎工事が遺構検出面をいためないこと、一定の保護層を設けることを条件に、ほとんどの遺構は全掘せず、検出にとどめている。

3 調査内容

(1) 中世以降の遺構と遺物

今次調査で確認されている中世以降の遺構は、掘立柱建物跡4棟、井戸跡2基、溝跡1条その他柱穴222口である。なお、掘立柱建物跡については柱穴の精査が全て行われていないので、柱の配列等から明確に建物を構成するものを抽出した。また、井戸跡等については遺構の断ち割りをおこなったものについて記述する。なお、出土遺物は陶磁器の破片のほか、柱穴より唐津産の皿の破片が出土している。

SB501掘立柱建物跡（第41図）

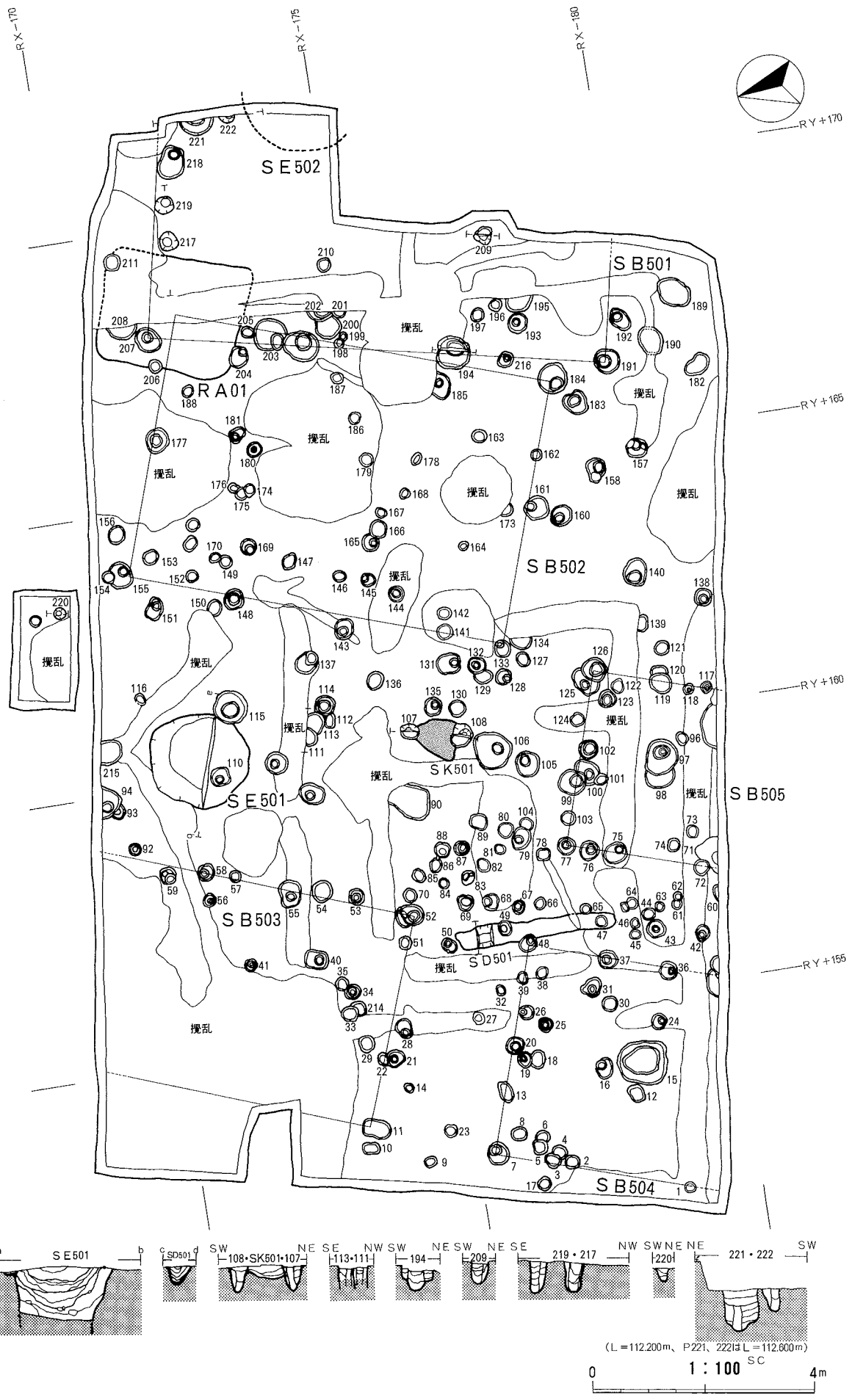
位 置 調査区東半 主軸方向 N10° E
規 模 3間×2間以上、各柱間隔は2.7m（約9尺）をはかり、約2分の1は調査区外（東側）に広がりをもつと思われる。
柱 穴 柱穴は直径0.4～0.6m、検出面での柱痕跡は0.15～0.25mをはかる。

SB502掘立柱建物跡（第41図）

位 置 調査区東半 主軸方向 N20° E
規 模 3間×2間、柱間隔は2.2～2.5m（約7～8尺）ほどをはかる。
柱 穴 直径0.3～0.4mをはかり、検出面での柱痕跡も明瞭で直径0.1～0.2mほどをはかる。

SB503掘立柱建物跡（第41図）

位 置 調査区西半 主軸方向 N20° E
規 模 3間×2間以上の規模をもち、各柱間隔は2.0m（約6尺）をはかる。なお、建物跡は調査区北側に広がりをもつと思われる。
柱 穴 直径0.3～0.5mをはかり、検出面での柱痕跡は明確でないものもあるが、直径0.1～0.2mをはかる。



第41図 見前館遺跡 1次調査区全体図

SB504掘立柱建物跡（第41図）

- 位置 調査区南西 重複関係 SD501溝跡を切る。
主軸方向 N20° E
規模 2間×2間以上、各柱間隔は2.7m（約9尺）をはかり、南側調査区外に遺構の広がりをもつものと思われる。
柱穴 直径0.3～0.4mをはかり、検出面で確認された柱痕跡は直径0.2mをはかる。

SB 505掘立柱建物跡（第41図）

- 位置 調査区中央南側 主軸方向 N20° E
規模 1間以上×1間、各柱間隔は3.2m（約10尺）をはかり、南側調査区外に遺構の広がりをもつものと思われる。
柱穴 直径0.3～0.4mをはかり、検出面で確認された柱痕跡は直径0.12～0.25mをはかる。

SD501溝跡（第41図）

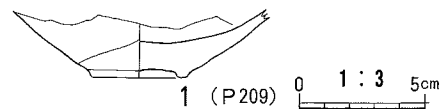
- 位置 調査区西半。 重複関係 SB504掘立柱建物跡のほかP47～50に切られる。
規模 検出された長さ2.85m、検出面からの深さ0.2m。
埋土 自然堆積で、6層に細分。A層—黒～暗褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含む。

SE501井戸跡（第41図）

- 位置 調査区中央部北側。 重複関係 P110・115に切られる。
規模 直径 東西1.8m、南北1.65m。検出面から1mほど掘り下げた時点で精査を終了している。
埋土 自然堆積で大きく4層に分かれる。
A層—黒褐色土を主体とし、褐色土を粒状に含む。
B層—褐色土を主体とし、暗褐～黒褐色土を含む。
C層—黒褐～暗褐色土を主体とし、褐色～黄褐色土を主体とする層。
D層—暗褐色を主体とし、褐色～黄褐色土を粒～塊状に多く含む層。

第1次調査出土遺物（第42図1）

1は唐津産の皿である。P₂₀₉埋土より出土しているもので表面は褐色を呈し、釉は灰白色を呈している。16～17世紀初頭に属するものと考えられている。



第42図 第1次調査出土遺物

4 調査のまとめ

見前館遺跡の調査では、平安時代の竪穴住居跡1棟のほかは中世以降にかかる遺構が大半を占めている。中世の掘立柱建物跡や井戸跡等についてはそれぞれ新旧関係があるが、遺物の出土がほとんどみられなかったため、どの時期に属するものかは不明である。なお、古代と中世の遺構埋土の差異は、中世の遺構埋土が黒褐～暗褐色を呈しているのに対し、古代の遺構埋土が暗褐色土を主体としており、明確な判断基準としてとらえている。

遺構時期の判断材料としては、唯一柱穴埋土から陶磁器（唐津産）が1点出土しているのみである。これは、16世紀末～17世紀初頭に属するものと考えられ、文献に書かれている廃城（破却）の時期に近接しているがそれ以降城館として存続したかは不明である。

今次調査では、検出された掘立柱建物跡等、中世に属すると考えられるものについて明確な時期を窺うことができなかった。しかし、城館の構造は中世を思わせるものであることから今後の調査事例の増加により明確にしていきたい。

【引用・参考文献・文中注】

（注1）1999 盛岡市教育委員会『安倍館遺跡―厨川城跡の調査―』より引用。

（注2）1987 吉井功兒「中世南部氏の世界」『地方史研究205』第37巻1号。地方史研究協議会より引用。

（注3）1986 岩手県教育委員会『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集より引用。

1974 都南村史編集委員会『都南村史』

1978 盛岡市『盛岡市史』（復刻版）（第1巻・第6章戦国期）

1980 矢巾町史編纂委員会『矢巾町史』上巻

5. ^{まちだ}町田遺跡（第9次調査）

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の位置と地形

遺跡の位置 乙部遺跡群は乙部館・松長根・乙部野・町田・乙部方八丁遺跡の5遺跡からなる。その中で乙部野・松長根・町田遺跡の地形による境界は明確ではなく、おおよそは遺跡内を通る東西・南北に走る道路で分割されている。

町田遺跡は盛岡市南端部の住宅地および果樹園、畑地を主体とした乙部30地割地内に位置している。遺跡の周辺には南東側に松長根遺跡、北東側に乙部野遺跡が隣接し、沢をはさんで南側には乙部方八丁遺跡が位置しており、これらの遺跡包括してを乙部遺跡群としている。

地 形 本遺跡群は早池峰構造帯に属する先第三系からなる北上山地の西縁が北上川の付近まで迫ってきており、朝島山（607m）を中心とする中起伏山地（朝島山山地）や小起伏山地がみられる。遺跡の立地する南北約900mをはかる細長い段丘面（砂礫段丘Ⅱ）は、西側を南流する北上川の氾濫原によって画されるほか、東側は乙部川によって開折された低地によって画される。

また、北側は西流する乙部川、南側は乙部川から分流する小河川および大地田川によって画されている。

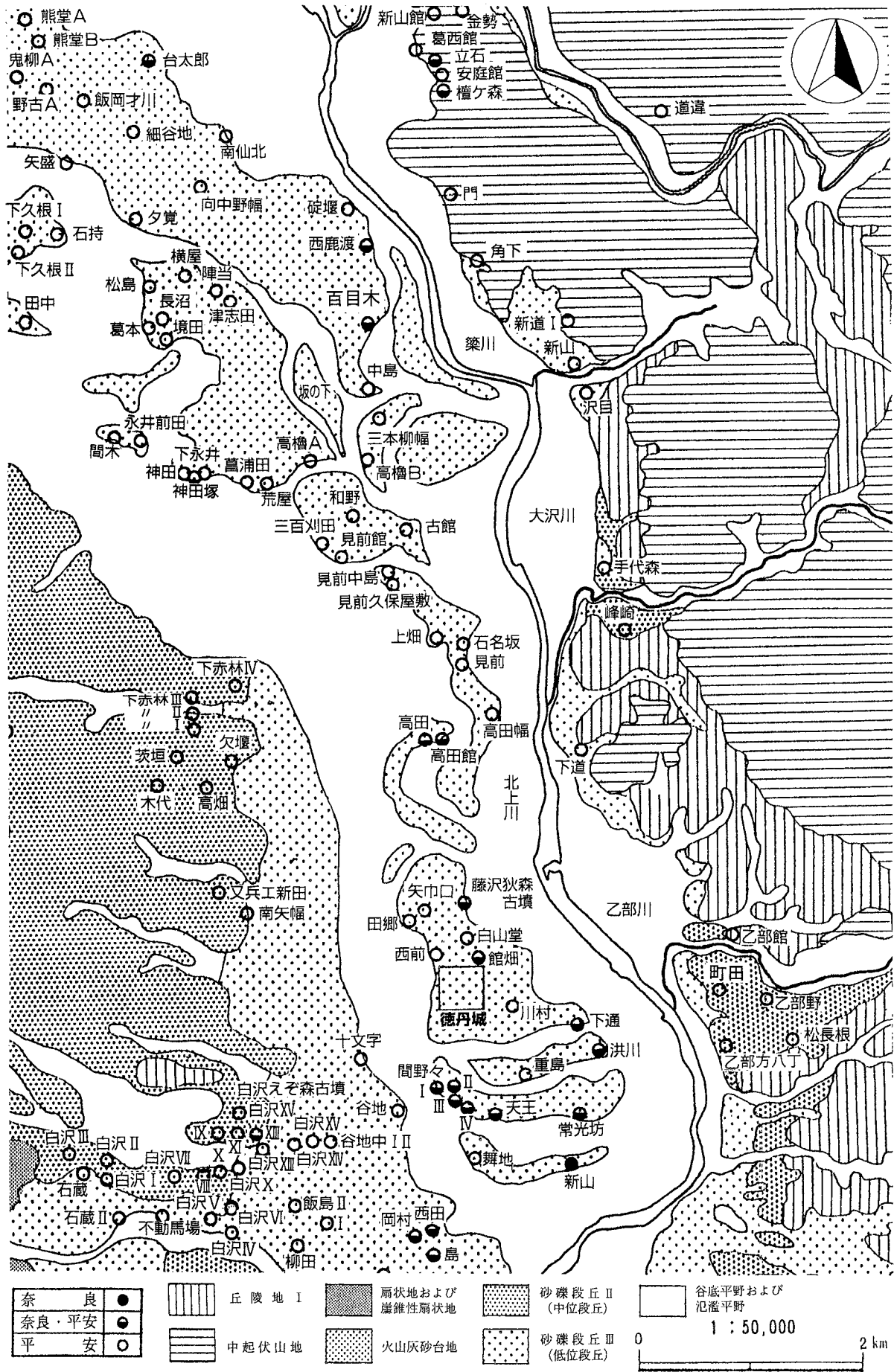
この河岸段丘は表土下に礫を多く含む黒色土やスコリア粒と礫を含む黄褐色の火山灰土がみられる。黒色土は火山灰層上層に堆積しているものと思われ、町田遺跡から乙部野遺跡にかけて確認されており、平安時代の遺構検出面および縄文時代後期の遺物包含層となっている。なお、黄褐色土火山灰層内には遺物はみられない。また、町田遺跡周辺では昭和20年（1952）年4月10日に火災が発生し、駐在所をはじめ民家11戸13世帯などを焼失する被害を受けている。火災事後の処理のため、焼けた部材等を埋めた地点もあり、一部で遺構面を攪乱・削平している。

2 調査経過

(1) これまでの調査

松長根遺跡や乙部野遺跡の立地する段丘上では、古代の土師器・須恵器のほか縄文時代の遺物も表採されており、遺跡として確認されていたところである。

本格的な発掘調査は平成6年度に車庫新築に伴う事前調査にはじまっている。遺跡北東部は遺跡内で最も遺構が検出されている地区である。調査は第1・2・4・5・7・8次調査が実施されており、平安時代の竪穴住居跡・竪穴・土坑のほか、縄文時代後期の遺物包含層が検出



第43図 地形分類と遺跡分布



第40図 見前館遺跡 (1 : 1,500)

されている。

遺跡の南西では第3次調査が実施されている。ここでは表土下、褐色地山面で遺構検出を試みたが遺構・遺物共に検出されなかった。

第6次調査区は遺跡の南半部中央に位置している。個人専用住宅増築に伴う事前調査を実施したもので、平安時代の竪穴住居跡1棟を検出した。検出の結果、平安時代の土坑1基、時期不詳の柱穴8口を検出した。

これまでの調査の結果、平安時代の遺構は調査地点の多い遺跡の東半に偏っており、遺跡の北東側では局地的ではあるが縄文時代後期の遺物包含層も検出されている。

町田遺跡の調査成果

回数	所在地	調査原因	面積(㎡)	期間	検出遺構・遺物
1	乙部30地割町田 36-2・3	車庫新築	20	94. 11. 8 94. 11. 11	平安時代の竪穴住居跡1棟
2 試掘	乙部30地割町田 51-8	住宅新築	132	94. 11. 11 94. 11. 12	平安時代の竪穴住居跡6棟、土坑5基、溝跡2条、近世以降の土坑墓4基を検出
2	乙部30地割町田 51-8	住宅新築	132	95. 4. 7 95. 4. 14	溝跡2条、近世以降土坑墓4基
3	乙部30地割町田 28-4	住宅新築	100	96. 6. 17	遺構・遺物なし
4	乙部30地割町田 59-4	住宅増築	36	96. 7. 9 96. 7. 12	縄文時代後期の遺物包含層 平安時代の竪穴2棟
5 試掘	乙部30地割町田 85-1	住宅改築	250	96. 9. 24	平安時代の竪穴住居跡を検出
5	乙部30地割町田 85-1	住宅改築	250	96. 11. 5 96. 11. 13	平安時代の竪穴住居跡3棟
6	乙部30地割町田 33-3	住宅増築	180	97. 4. 15 97. 4. 16	平安時代の竪穴住居跡1棟
7	乙部30地割町田 56	農作業小屋 新築	20	97. 5. 10	遺構・遺物なし
8	乙部30地割町田 51-9	車庫新築	20	97. 9. 4 97. 9. 12	平安時代の土坑1基 ピット(柱穴)8口
9	乙部30地割町田 13-1、13-5	小屋新築	33	98. 7. 1 98. 7. 6	縄文時代後期の遺物包含層、平安時代の竪穴住居跡1棟

(2) 平成10年度の調査

平成10年度は第9次調査として、物置小屋新築に伴う事前調査を実施した。当初試掘調査と

して遺構・遺物の有無を確認したところ、表土下約30cmほどより平安時代の竪穴住居跡が検出されたことから建築申請範囲の全面調査に切り替え、実施した。

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、縄文時代後期の遺物包含層を確認した。

3 調査内容

(1) 平安時代の遺構、遺物

RA112竪穴住居跡（第45図）

位置 調査区の北東隅。 平面形 方形。 主軸方向 不明。

規模 東西1.5m、南北3.5m、全体規模は1辺が4mほどをはかるものとおもわれる。

掘込面 削平。

埋土 埋土は自然堆積で、層相により2層に大別される。

A層—黒褐色を主体とし、黒褐色土に暗褐色土を含みカーボンを若干含む。

B層—黒褐色土に若干の褐色土を含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.18～0.25mをはかる。壁は上方へ向かって緩やかに開いている。

床の状態 床面は平坦で、やや礫の混入する暗褐色土面を床面としている。床構築土はみられないが一部に黄褐色～灰褐色の粘土が貼られている。なお、

出土遺物 遺物（第46図1～3）は土師器で、内面にヘラミガキ調整を施し、黒色処理がなされている。1は、復元される口径14.5cm、器高が約5cmをはかる。2は、復元される口径14.0cm、器高が約5cmをはかる。出土遺物のうち3は、墨書が施されているが部分的で、文字を判読するまでには至っていない。

(2) 縄文時代の遺物包含層

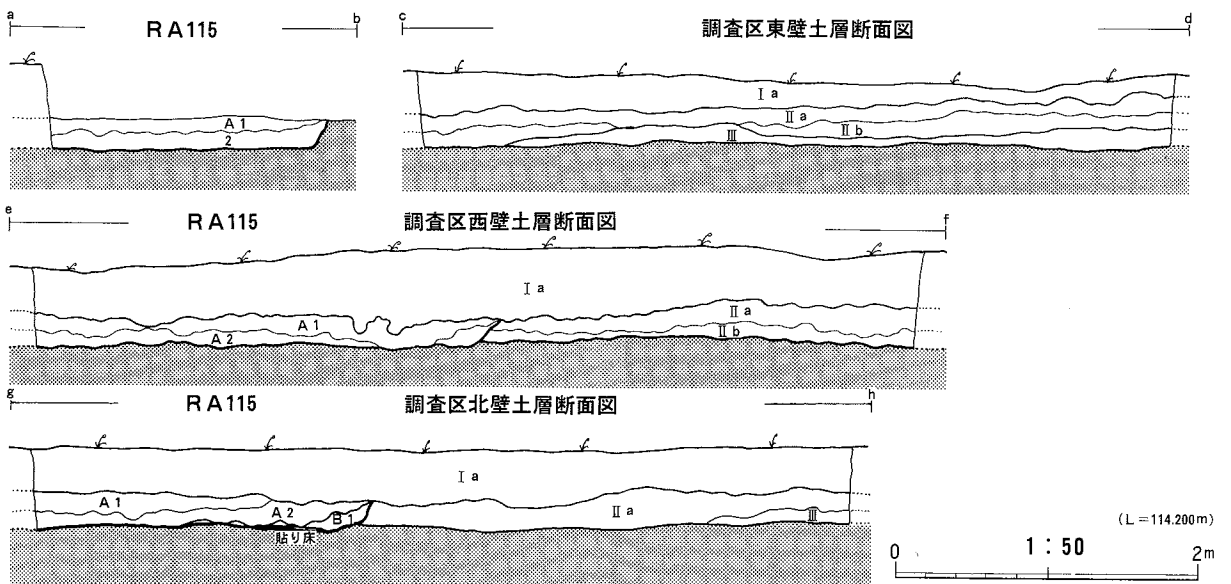
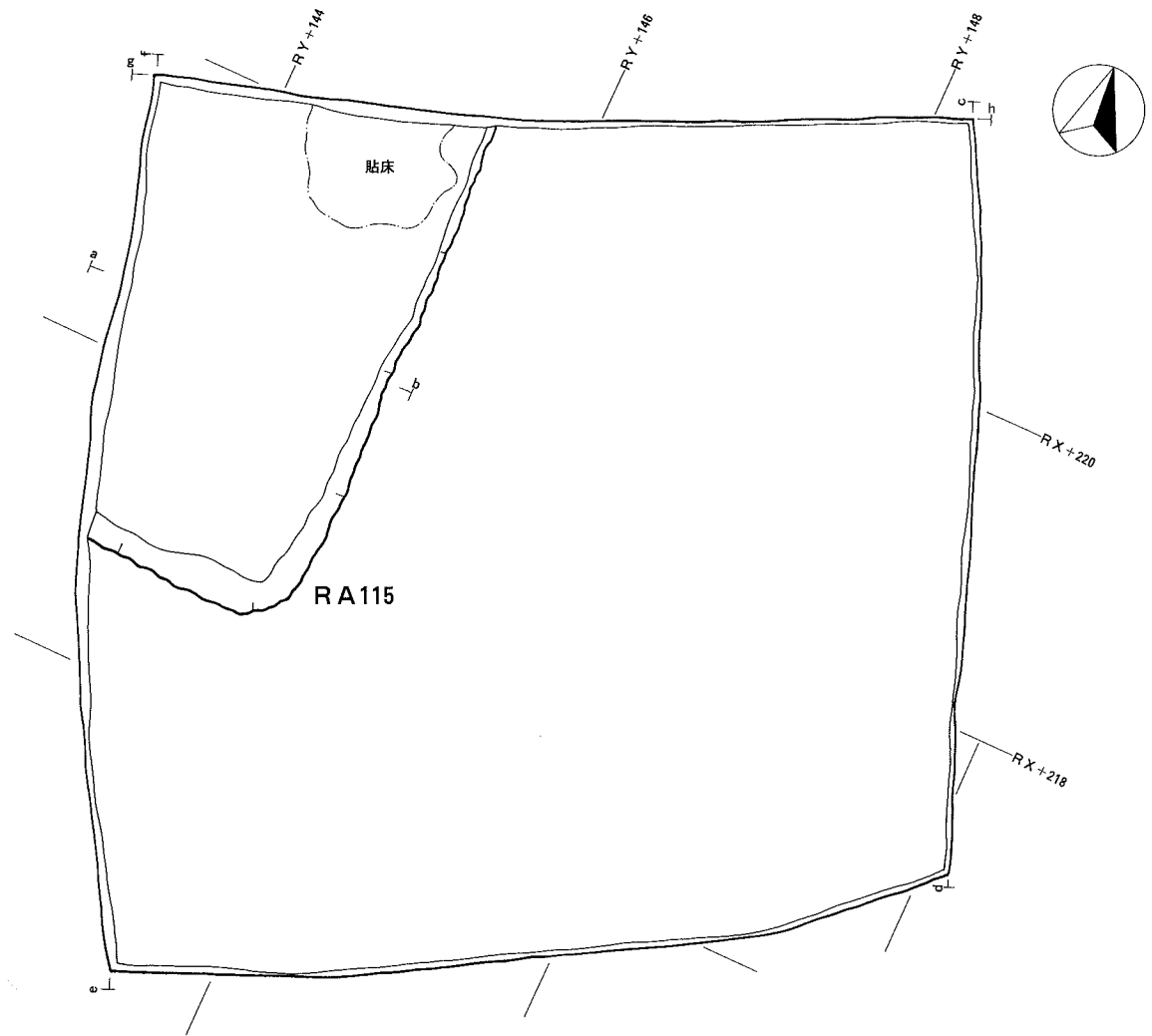
遺物包含層 縄文時代の遺物包含層は、調査区のほぼ全面にわたって確認されている。層相は以下の通りである。なお、遺物の集中は調査区北東部でみられ、完形に近い縄文時代後期の深鉢などが出土している。

I a層・・・表土・耕作土

II層・・・黒色土を主体とし、暗褐色土・黒褐色土を含む層で、その層相から2層に細分される。上層のII a層は黒褐色を主体とし、暗褐色土を少量含む。また、炭化物を若干含んでいる。この層から縄文時代後期の遺物が出土している。II b層はII a層よりも暗褐色を多く含む層相で、遺物は出土しない。

III層・・・暗褐色土を主体とし礫を多く含む層で、無遺物層である。

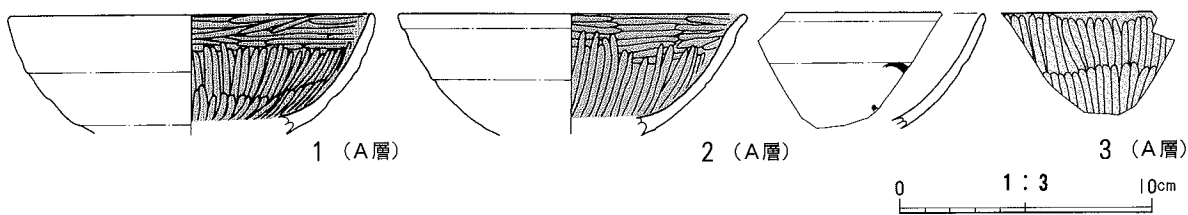
遺物（第45図1～14）は縄文時代後期の遺物である。1は深鉢で口縁部を欠く。推定される口径は24.5cm、底径8.2cm、器高24.0cm以上をはかる。文様は、口縁部から頸部にかけて、弧状の文様が沈線により施されるほか、弧状文の連結部には一定の間隔をもって瘤が施されている。



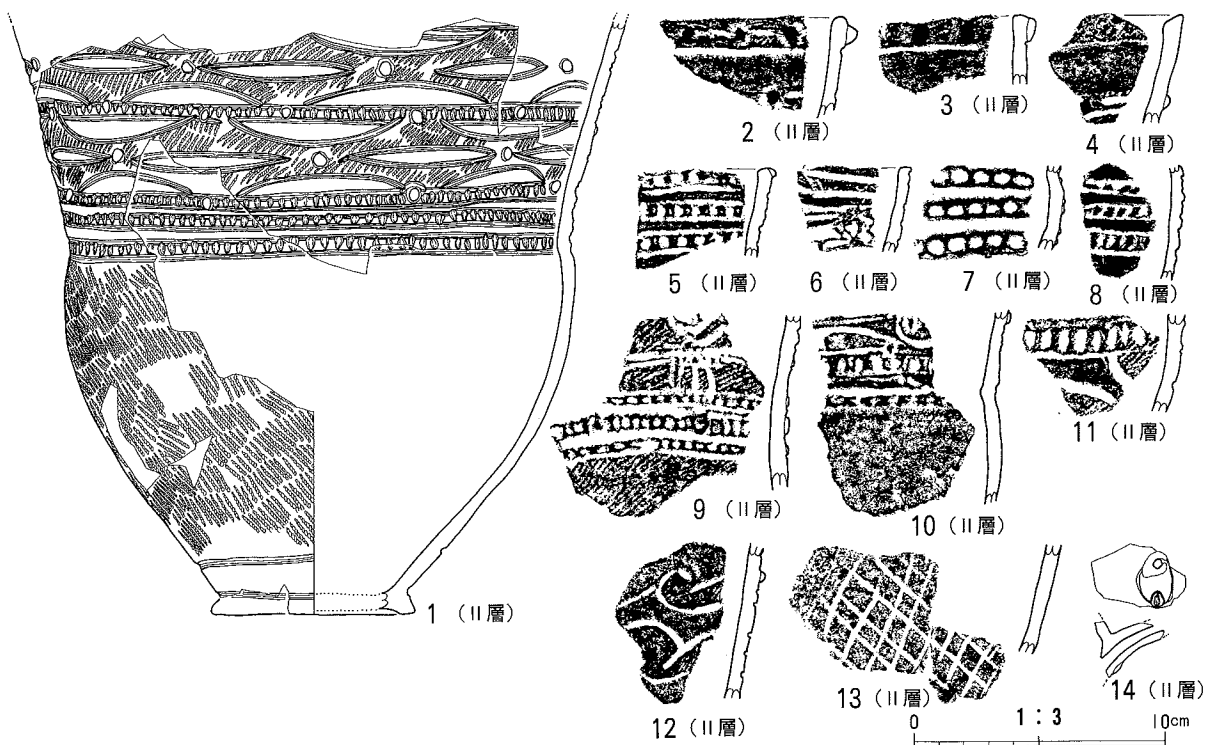
第45図 町田遺跡第9次調査区全体図

また、口縁部と頸部のほぼ中間部には連続する刺突文が横位に施される。この刺突文帯にも一定の間隔をあけて瘤が施されている。頸部には横位の連続刺突文が3条施されている。3条のうち上の1条にのみ瘤が施されており、頸部から下には瘤は施されていない。体部には縄文による地文が施されており、若干の膨らみをもち底部付近で横位の沈線を2条巡らせ、若干の広がりをもって底部となっている。

2・3は、口縁部に横位の沈線が巡り、瘤が等間隔に施されている深鉢、4は沈線と小さな瘤が施される深鉢の口縁部、5・8は横位の沈線間に連続する刺突が施されるもの、6は沈線を主体とするもの、7は横位の隆線に連続する楕円形の刺突が施されるものである。9～10は1と同様の器形を呈する深鉢で、9は口縁部から頸部にかけて沈線を主体とし、頸部には1と同様に連続する刺突文が横位に施され、刺突文帯に一定の間隔をあけて瘤が施されている。頸



第46図 R A 115 竪穴住居跡出土遺物



第47図 遺物包含層出土遺物

部には横位の連続刺突文が3条施されている。10は沈線による弧状文が施され、頸部には9と同様に横位の沈線間に連続する刺突文が施されるものである。なお体部には地文が施されていない。11・12は入組文が施されるもので、11は連続する刺突文帯がみられるもの、12は入組文の交差部に瘤が施されるものである。13は格子目状に撚糸文が施される深鉢の体部、14は注口土器の注ぎ口の破片である。

4 調査のまとめ

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡1棟および縄文時代後期後半の遺物包含層を検出した。

平安時代の遺構 検出された平安時代の竪穴住居跡1棟は出土遺物等から、隣接する調査区（第5次調査）で検出された竪穴住居跡と同時期の遺構であることが確認された。なお、これまでに行われた調査で確認された竪穴住居は10棟を数えており、すべてが平安時代（9世紀後半）に属していることが確認されている。このことから、当遺跡は長期間存続した集落跡とは考えられないようである。

これまで検出された竪穴住居の平面形は検出した住居の半数以上が重複関係や削平、また調査区外への広がりをもつため全体形が不明であるが、全体形の判るものはすべて方形である。規模が一番大きなもので第2次調査で検出されたRA102竪穴住居跡で、一辺が6mほどをはかる。次いで第5次調査区で検出されたRA110竪穴住居跡の一辺5.5m、第2次調査区のRA103竪穴住居跡の一辺5.0mである。他に検出されている竪穴住居跡は、全体形が不明なものも含め概ね1辺4mほどをはかるものと思われ、住居間の規模の大きな格差は認められていない。

これまでの調査で竪穴住居跡が確認されている範囲は、旧国道の西側に接する南北300m、東西100～150m、標高113～118mの区域で、遺跡の東側では遺構は未検出である。調査事例の増加により集落の構造を明確にしていくとともに、遺構の特性を見だし、細かな時期差についても検討していきたい。

縄文時代の遺物包含層 一方、縄文時代後期の遺物包含層からは後期後半に属する瘤付土器や注口土器が出土している。これまでの調査で遺構は検出されていないが、付近で遺構の存在する可能性があり、今後の調査成果に期待したい。

【引用・参考文献】

- 1974 都南村 都南村史編集委員会『都南村史』
- 1998 盛岡市教育委員会『盛岡市埋蔵文化財調査年報—平成5・6年度—』
- 1998 盛岡市教育委員会『乙部遺跡群 乙部方八丁遺跡—平成6・7・9年度発掘調査概報—』

写 真 图 版

林崎遺跡



全景（東から）

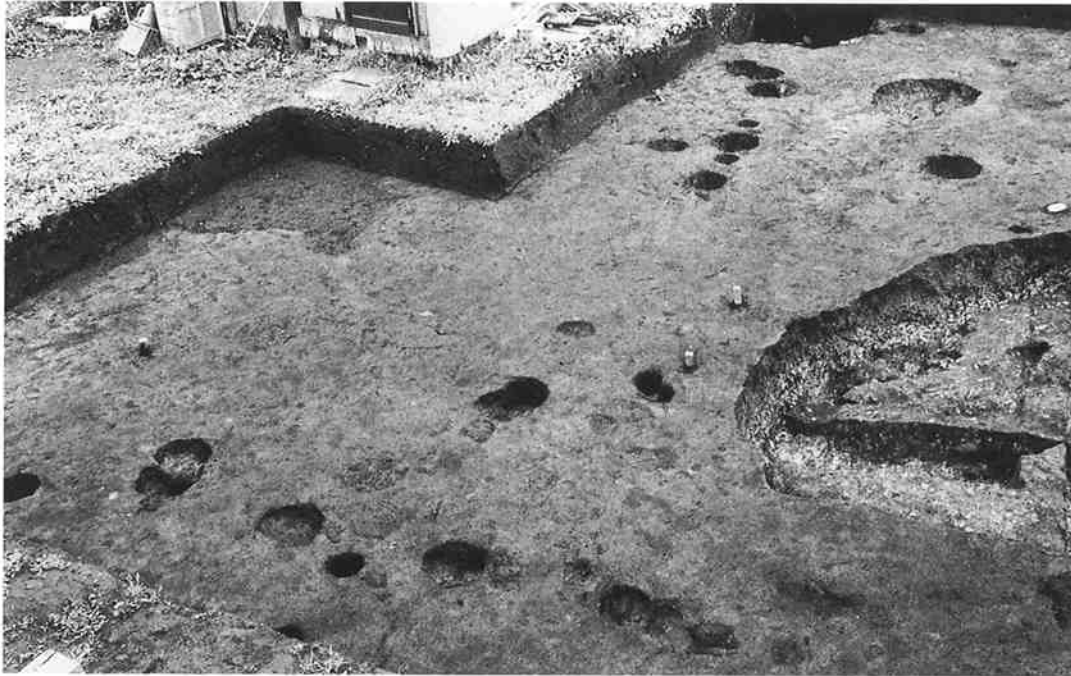
第22次調査



調査区全景
（南東から）



RA027竪穴住居跡
（北から）

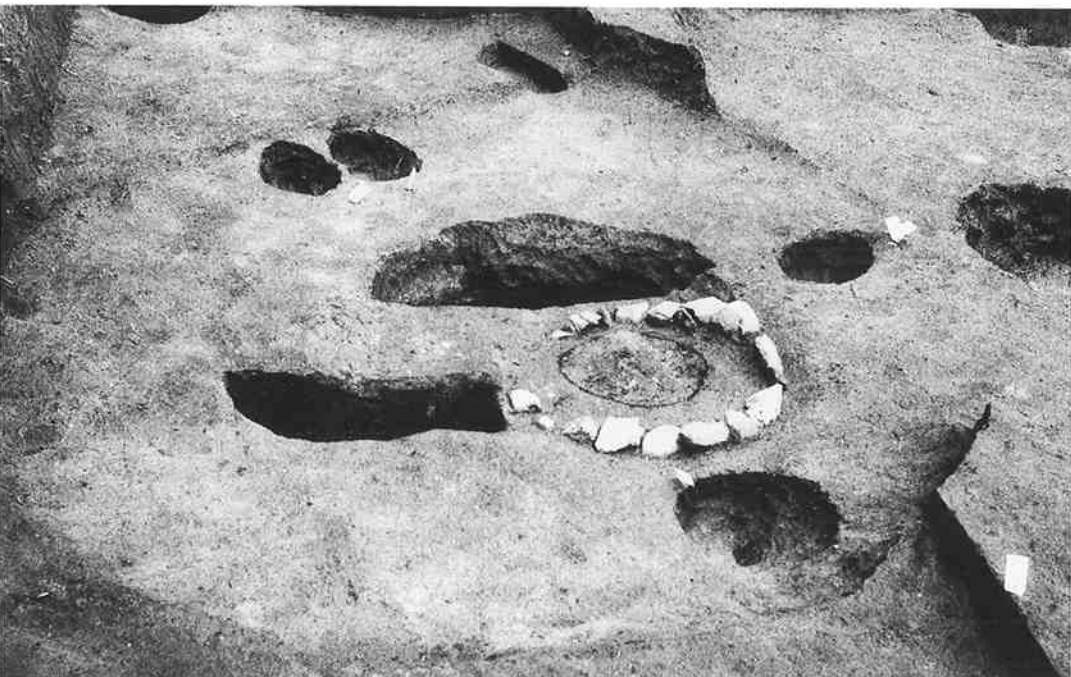


砂溜遺跡

第23次調査
調査区北半全景
(西から)



RE801 竪穴
(西から)



第24次調査

RA505 竪穴住居跡
(西から)

砂溜遺跡



RA505竪穴住居跡
(南から)



RB501掘立柱建物跡
(南西から)



RD549土坑
RB501-⑤
(西から)



全景（東から）

第12次調査



調査区全景
（南西から）



RA109竪穴住居跡
（北西から）

百目木遺跡



RA110 竪穴住居跡
(北西から)



RA111 竪穴住居跡
(南東から)



RA112 竪穴住居跡
(西から)



百目木遺跡

RA112 竪穴住居跡
遺物出土状況

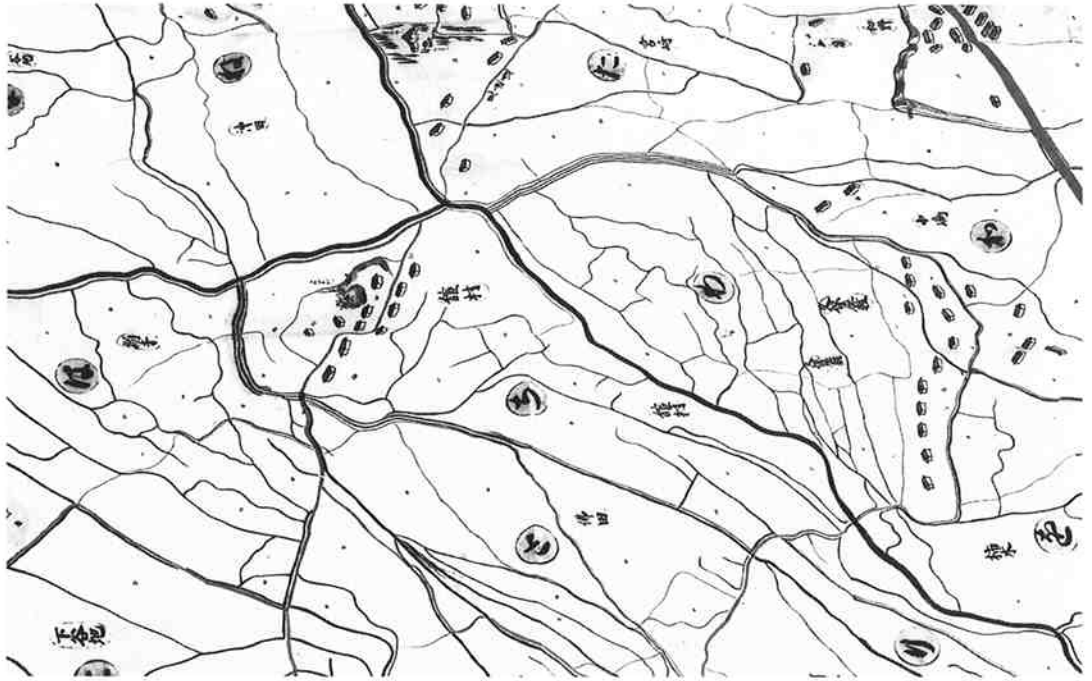


RA113 竪穴住居跡
(北西から)



RD810・805 土坑
(北西から)

見前館遺跡



東見前、西見前村絵図
(部分)
元治元年 (1864)

第 1 次調査



調査区全景 (西から)



調査区西半
遺跡検出状況
(東から)



町田遺跡

全景（北から）



第9次調査

調査区全景
（南から）



遺物包含層
遺物出土状況

報告書抄録

ふりがな	もりおかいせきぐんはくつちょうき		へいせい10ねんどはくつちょうきがいはう					
書名	盛岡遺跡群発掘調査 - 平成10年度発掘調査概報 -							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
編著者名	三浦陽一ほか							
編集機関	盛岡市教育委員会							
所在地	〒020-8532 岩手県盛岡市津志田14地割37-2 TEL 019-651-4111							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はやしざきいせき 林崎遺跡 (22次)	いわて けんもりおか し もとみや 岩手県盛岡市本宮 あきほやしき 字林崎ほか	03201		39° 41' 10"	141° 07' 02"	19980928~ 19981016	104.0	個人住宅新築に係る 調査
さだまりいせき 砂溜遺跡 (23・24次)	いわて けんもりおか しひがみやま 岩手県盛岡市東山 1丁目地内			39° 41' 13"	141° 10' 56"	19980521~ 19980625	122.0 10.0 計 132.0	個人住宅新築に係る 調査
とめきいせき 百目木遺跡 (12次)	いわて けんもりおか し きんぼん 岩手県盛岡市三本 やなぎら ちわり とめき 柳5地割百目木地 内			39° 39' 28"	141° 10' 05"	19980619~ 19980625	288.0	個人住宅新築に係る 調査
みるまえだていせき 見前館遺跡 (1次)	いわて けんもりおか し にしみる 岩手県盛岡市西見 まえ 8 ちわりだて 前8地割館地内			39° 38' 13"	141° 09' 40"	19980518~ 19980527	183.3	個人住宅新築に係る 調査
まちだいせき 町田遺跡 (9次)	いわて けんもりおか し おとへ 岩手県盛岡市乙部 30 ちわりまちだ 30地割町田地内			39° 36' 20"	141° 12' 10"	19980701~ 19980706	33.0	小屋新築に係る調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
林崎遺跡 第22次	集落	平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 ピット	2棟 1棟 2基 8口	土師器 須恵器			
砂溜遺跡 第23次	集落	近世	竪穴 土坑 ピット	1棟 1基 27口	陶磁器			
第24次	集落	縄文時代中期 ~後期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 遺物包含層	1棟 1棟 2基	土器 石器			
百目木遺跡 第12次	集落	奈良時代 平安時代 近世	古代：竪穴住居跡 近世：掘立柱建物跡 柱列跡 土坑	8棟 3棟 2基 6基	土師器・須恵器 近世以降の陶磁器			
見前館遺跡 第1次	城館	平安時代 中世	掘立柱建物跡 溝跡 井戸跡 土坑 平安時代竪穴住居跡 柱穴	5棟 1条 2基 1基 1棟 222口	陶磁器			
町田遺跡 第9次	集落	縄文時代後期 平安時代	縄文時代後期の遺物包含層 平安時代竪穴住居跡	1棟	縄文時代後期土器 平安時代土師器・須恵器			

盛岡遺跡群

—平成10年度発掘調査概報—

1999年3月31日発行

発行 盛岡市教育委員会

〒020-8532 盛岡市津志田14地割37-2

印刷 株式会社熊谷印刷

〒020-0066 盛岡市上田一丁目6-49